

42817
77-59

緒言



言



此書は専ら女
 子將た智育に益
 多くして害無か
 るべきものを選
 び掲げて以て
 身心の發達を助
 けんとすなりけ
 り。

中に就きて、音樂は、殊に女子が神聖溫和なる性情を助くる爲に、必ず習ふべき技にして、且つ、之を高尙なる遊嬉に用ひんことは、最も趣味あるべきものなれども、こは、決して、一小冊の能く云ひ盡くすべくもあらず。且つ、そは必ず、其道の師に就きて、實地に練習せざれば、能はざる事なれば、省きて載せず。

菴頭に、往昔の遊嬉を掲げたるは、一つは其遊嬉の太古より近世に至る迄の沿革を知りて、参考の助けをもせんとし、一つは、ある種類に於ては、更に、これを、今も、實地に試みても可なるべしと覺ゆるもあれば、彼是取り集めて、編み出でたるなり。

希くは、世の年少女子が、清く正しき家庭團樂の中に、其智徳體育に裨益あるべき遊嬉をなして、談笑嬉戯の間に、知らずくも、端正優雅の性情を養成せんことを期するものなり。

明治三十三年十月

編者しるす

子女遊嬉之彙目次

一 總論	一
二 戶外遊嬉	三
○唱歌遊嬉	四
○追羽子	七
○毬つき	一
○毬籠	三
○毬拾ひ	五
○毬網	五
○毬送り	六
○轉毬	七
○鬼ごど	七
○盲目鬼	八
○隠れ遊び	九
○子取り	二〇
○ローンテニス(庭毬)	二一
三 室内遊嬉	四二
○クロツケ(循環球)	四二
○輪とり	六〇
○柱環り	六一
○梯登り	六八
○富士見西行	六九
○蟲撲み	七二
○鳥買	七三
○競馬遊び	七五
○籠の鳥	七六
○蛇行進	七八
○花競争	七九
○庭作り	八一
○フキツトリ(氏體操)	八三
○玉突	八九
○椅子とり	九五
○歌がるた、詩がるた	九六

目次

一

遊嬉之栞

○お弾き……………一〇一
 ○お手玉……………一〇四
 ○雙六(新式)……………一〇七
 ○福笑ひ……………一〇九
 ○茶坊主……………一一一
 ○豚の尾……………一一三
 ○花の名……………一一三
 ○花競べ……………一一五
 ○國めぐり……………一二三
 ○文字鎖り……………一二四
 ○歌まはし……………一二七
 ○火まはし……………一二八
 ○植物まはし……………一二九
 ○動物まはし……………一三〇
 ○つぎ字……………一三〇
 ○字直し……………一三一
 ○ぬき歌……………一三四
 ○四句ぬき……………一三五

○てんがう俳諧……………一三八
 ○連歌遊び……………一四二
 ○あてももの……………一四三
 ○地水空の遊び……………一四七
 ○言ひつぎ……………一四九
 ○電信拳……………一五三
 ○一種物合せ……………一五五
 ○福引……………一六〇
 ○談話の會……………一六六
 ○讀本の會……………一八七
 ○音楽の遊……………一八九
 ○閉香……………一九一

菴頭目次

○往古の遊嬉……………一
 一 音楽……………二
 二 歌論……………五
 三 歌歌……………六
 四 國見……………九
 五 桑橋、花橋、小松引……………一〇
 六 櫻狩、紅葉狩……………一三
 七 笠狩、葎狩……………一四
 八 舟遊……………一六
 九 鳥虫の音の樂み……………一八
 十 蕨物……………二〇
 十一 磯磯……………二二
 十二 躰遊び……………二七
 十三 線ごき……………三〇
 十四 扇つぎ……………三三
 十五 顔ぶたぎ……………三四
 十六 双六……………三七
 十七 石なとり……………三九
 十八 彈茶……………四一

十九 ままこらて……………四三
 二十 葵の河原……………四四
 二十一 貝おぢ……………四五
 二十二 針打……………四八
 二十三 枕拍子……………五一
 二十四 唐扇……………五六
 二十五 扇合せ……………六三
 二十六 繪合せ……………七〇
 二十七 物語合せ……………七三
 二十八 調度の好み……………九五
 二十九 こまの子遊び……………九九
 三十 卵籠の遊び……………一〇一
 三十一 ふりく遊び……………一〇二
 三十二 花かづち……………一〇三
 三十三 葛餅の遊び……………一〇五
 三十四 菊の遊び……………一〇七
 三十五 雪の遊び……………一一一
 三十六 こまの遊び……………一二二
 三十七 道中籠……………一二五
 三十八 うなぎの瀬登り……………一二八
 三十九 芋虫やころく……………一二九

遊嬉之栞

四十 つばなぬこく 一三〇

四十一 植物の遊び 一三一

四十二 動物の遊び 一四五

童謡 一七一

○鞠歌 一七四

一 近江八景 一七四

二 正月の歌 一七八

三 一月の歌 一八一

四 十二月の歌 一八四

五 十二月の歌(新作) 一八八

六 花づくし 一九二

七 孝行鞠歌 一九六

八 修身鞠歌 二〇〇

九 忠の歌 二〇五

十 四季の鞠歌 二〇八

○わらべ歌 二一〇

一月に属するもの 二二〇

二 風 二二二

三 雪 二二二

四 七種 二二三

五 豆まき 二二五

四

六 風あぐる時 二二五

七 凧 二二六

八 鳥 二二六

九 鷹 二二六

十 蜘蛛 二二六

十一 蛸 二二七

十二 蟹 二二七

十三 蟬 二二七

十四 蛙 二二八

十五 蚊 二二八

十六 半虫 二二八

十七 大綿 二二八

○子守歌 二二九

一 千代の子 二二九

二 里のおみや 二二九

三 赤い飯 二二九

四 乳あがれ 二二九

五 ちゆうちゆうもねんね 二二九

六 お船で行こか 二二九

七 おんもいこ 二二九

遊嬉之栞總目次 終

子女遊嬉之栞

往古の遊嬉は、存外に高尚優雅の事多かりしが、此れ、わが國は、氣候溫和、天色清明にして、且つ山川明美なるが故に、自づから、人の嗜好も、優に氣高く、殘忍の行ひ、將た少なりしなるべし。爰に今、上れる代より、近世に至るまで、男女兩性を通じて遊び興じたる、又は、女性の専らなる遊嬉として行はれしもの、其重なるを抜きて、掲げ示さんと

子女遊嬉之栞

下田歌子著

一 總論

西諺に曰く「能く遊ぶ者は、必ず能く勤む」と、此語まことに志かるかな。凡う、遊嬉の種類と方法とを能く講じて、而して、遊嬉歡樂を適度にする者は、必ず、盤根錯節を切るの力を有して、尙綽々餘裕あるの徒なりかし。況んや、女子は、感情強く、やともすれば、悲哀に迫り、憂鬱に鎖さるゝの弊を免がれず。故に、幼兒はもとより、妙齡の女子の如きは、其時と金との許す限り、其品位と資格とに傷けざる範圍に於て、各自、常務のいと間くには、必ず、智徳の助けとなり、又は、體育の益となるべき遊嬉をなして、心身の營養をとらん事

總論

一

す。但し、本文にあらはしたるは、はやくより傳はれる遊嬉の、今も猶行はれつゝあるなれば、うれらは省きて載せず。

一 音楽

音楽は、神代の頃よりありて、はやくの人、男も女も、先づ、悦び楽しむべき事あれば、必ず、打ち集ひて、樂を奏しけるなり。
樂器は、極めて、簡單なるものにて、笛は、竹を切りて、數個の穴を穿ちたるに過ぎず。琴のはじめは、弓の弦を並べて、弾きならしけるを、後に、板きれに緒をすげて弾けりと云へり。
太鼓、鐘等も、ふるくより行はれたるもの如し。
斯くて、支那、三韓等の交通始まりし後は、其國より、各種の樂器も渡り來りて、斯道大いに進めり。其當時より、彼の、藤氏隆盛時代にかけて、専ら、上流社會に行はれたりし、樂器の重なるものは、先づ大抵左のごとし。

横笛、篳篥、莫目、箏、指鼓、羯鼓、腰鼓、奚囊、箏、琵琶、答生、方啓、五絃、和琴、尺八等、

戶外遊嬉

を勉むべし。むかし、泰西の、ある尼寺に於て、嚴格なる法規を制し、年少の尼をして、嚴しく、遊嬉談笑等の、打ち緩ざたるとを禁じたりける結果、彼等の過半は、多病となり、憂鬱となり、妬悍、猜忌、隱險、邪智、世にあらゆる嫌ふべき事の限りを集めたる、極めて厭はしく淺問しき、性行の女子を出たすに至れりとぞ聞く。されば、衆多とくもに楽しむ、遊嬉の如きは、殊に、相互の、交際を密にして、其間掬すべきの和氣を生ずるものなり。故に、智徳體美の教育に裨益ある遊嬉は、寧ろ、實踐に疎き、學術技藝を修むるにも増ると云はまし。
然れども、若し一步を過れば、放逸遊惰の階梯となりて、甚しきは、其身を滅ぼし、其徳を傷るに至らん。女子遊嬉の選擇注意決して苟くもすべからかず。

遊嬉の苟くもすべからざることは既に陳述したるが如し。而して、其種類方法等を、逐一網羅して、掲げ示さんとすれば、到底、小冊子の能く盡すべきにあらず。且つ、其種類によりては、とても、文字に記したるを讀みしのみにては、學ぶべきにあらざるものなり。故に、是等の類は、すべて省き去りて、其容易に爲し得べき種類のみを抜きて、爰に示さんとすなり。

二 戶外遊嬉

遊嬉の種類を大別して二種とす。即ち、戶外遊嬉と室内遊嬉となり。而して、本邦に、専ら、行ひ來れるものは、室内遊嬉なりき。即ち、女兒に在りては、其極めて、幼少なる時の外

遊嬉之業

す。但し、本文にあらはしたるは、はやくより傳はれる遊嬉の、今も猶行はれつゝあるなれば、うれらは省きて載せず。

一 音楽

音楽は、神代の頃よりありて、はやくの人、男も女も、先づ、悦び楽しむべき事あれば、必ず、打ち集ひて、樂を奏しけるなり。
樂器は、極めて、簡單なるものにて、笛は、竹を切りて、數個の穴を穿ちたるに過ぎず。琴のはじめは、月の弦を並べて、弾きならしけるなり。

るを、後に、板きれに緒をすげて弾けりと云へり。
太鼓、鐘等も、ふるくより行はれたるものゝ如し。
斯くて、支那、三韓等の交通始まりし後は、其國より、各種の樂器も渡り來りて、斯道大いに進めり。其當時より、彼の、藤氏隆盛時代にかけて、専ら、上流社會に行はれたりし、樂器の重なるものは、先づ大抵左のごとし。

横笛、篳篥、莫目、箏、指鼓、羯鼓、腰鼓、奚篋、篳篥、琵琶、答生、方啓、五絃、和琴、尺八等、

戶外遊嬉

を勉むべし。むかし、泰西の、ある尼寺に於て、嚴格なる法規を制し、年少の尼をして、厳しく、遊嬉談笑等の、打ち緩ざらんとを禁じたりける結果、彼等の過半は、多病となり、憂鬱となり、妬悍、猜忌、隱險、邪智、世にあらゆる嫌ふべき事の限りを集めたる、極めて厭はしく淺間しき、性行の女子を出だすに至れりとぞ聞く。されば、衆多とくもに楽しむ、遊嬉の如きは、殊に、相互の、交際を密にして、其間掬すべきの和氣を生ずるものなり。故に、智徳體美の教育に裨益ある遊嬉は、寧ろ、實踐に疎き、學術技藝を修むるにも増ると云はまじ。然れども、若し一步を過れば、放逸遊惰の階梯となりて、甚しきは、其身を滅ぼし、其徳を傷るに至らん。女子遊嬉の選擇注意決して苟くもすべからず。

遊嬉の苟くもすべからざることは既に陳述したるが如し。而して、其種類方法等を、逐一網羅して、掲げ示さんとすれば、到底、小冊子の能く盡すべきにあらず。且つ、其種類によりては、とても、文字に記したるを讀みしのみにては、學ぶべきにあらざるものなり。故に、是等の類ひは、すべて省き去りて、其容易に爲し得べき種類のみを抜きて、爰に示さんとすなり。

二 戶外遊嬉

遊嬉の種類を大別して二種とす。即ち、戶外遊嬉と室内遊嬉となり。而して、本邦に、専ら、行ひ來たれるものは、室内遊嬉なりき。即ち、女兒に在りては、其極めて、幼少なる時の外

これは、すべてを奏したるは、男がたの事にて、女子の翫びたりしは、先づ箏、琴、琵琶、和琴等所謂、絲竹に屬するものなりしが、近世にいたりて、小鼓、太鼓、笛等をも、稀には翫ぶこととなり。三絃、胡弓は、徳川氏時代以降のものなり。舞は、今のをどりやうのもの、太古にはありしが、藤氏時代に至りては、たゞ僅かに、宮中の女翫歌など云ふものを、少女の演じたるまでなりしを、近世に至りては、舞

は、更に、戶外遊嬉の必要を認めざるのみならず。寧ろこれを避けて、勉めて、室内に、静かなる遊嬉をなさしめたりし習慣既に久しくなれり。然れども、女子體育の必要を感じるに切なる、今日に在りては、出來得るだけ、戶外遊嬉を奨励して、女子の體軀を強健肥大ならしめんことを欲する儘に、其これに適當なりと認むるものゝ種類を選びて、細に掲げ示さんとすなり。

○唱歌遊嬉

この遊嬉は、幼稚園、及び、尋常小學に入る程の幼年者があるに、極めて適當なるなり。(これは、男女兒ともに)其志かたは、唱歌の節につれて、大勢舞ひをどるさまを爲すなり。幼き人の、悦び樂しむものなりとす。これは、風琴、洋琴など

(東國にては單に、をどりと云ふ)は、専ら女兒のなすものゝやうに成りたるにより、こは、自らが翫びて、遊嬉の具となすよりも、寧ろ、他人の歡樂を助くる具となれりむがごとし。

二 歌 謠

歌謠も、神代の頃よりありて、上れる代に、最も盛んなりし、歌垣などは、男女ともに、打ち交りてなしたる。斯くて、奈良の朝より、桓武の朝にいたれる頃は、歌謠は、まこと、男子のすることの様になりて、女子が

の樂器を奏で、唱歌を助くれば、最も可なれども、普通は、たゞ、少し年かさなる人の音同とりて、唱歌を始め、幼兒をして、うれに和せしめ、皆一様に歌ひながら遊びてよし。先づ、其一二例を擧ぐれば、

池の鯉

一段

浮び出でて遊べよ

池の鯉鯉よ

たくく手を案内に

集まりてひれふれ

二段

鯉ようのひごひよ

親も子も出で來よ

睦まじくむれかて

なげてやる麩さく

右は、大勢の小供、手を引き合ひて、圓く輪の形をつくり、さ

遊嬉之類

打ちあげ諸ふことは、なくならにたり。されど、後白河の朝頃よりは、白拍子の類の女子は、歌謠することありき。

近世にいたりては、中等以上、上流の女子も、音楽に合せ、諸ふことをなせり。されど、今の唱歌のごとく、一體に行はれしにはあらず。但し、中より以下の少女等が、各自の遊嬉に、俚謠うたひしは、孰れの世にも絶えざりき。

三 詠歌

詠歌も、亦、はやくより、一種の遊嬉として、男女を通じて

て行はれたりき。そは、獨花にむかひ、月を仰ぎて、心に感の起るまに、詠み出で、思ひやる媒ちとせしのみならず、其始めは、互ひに自己の、詠歌を誦ひあげて、贈答をもなししが、後には、筆に寫して取りかはす事となり、中世に至りては、歌合、競點、各評やうのものも出で來て、これには、猶種々の興を助くる趣考もあり。文筆ある、上流社會にては、男女を通じて、此上無き樂しみとせしのみならず、中等社會にも、亦、随分に、これを概び、

戶外遊嬉

て、唱歌につれて、銘々手を靜かに打ちつく、麩を鯉に抛げ與ふる状をなし、足踏をも、打つ手と同一様になすなり。

春野の打毬

春野の小艸ふみ分けて

東に西に北南

飛ぶ毬のこくかこ

打たれつ打ちつ共々に

かちまけ競ふ樂しきよ

右も左かたのふりは、大抵池の鯉に似たり。たゞ其遊びの手は、靜かに艸を摘み、毬を抛ぐる状をなすまでなり。

又、櫻、梅、朝顔等の唱歌につれては、先づ始めに圓形を作り、それより、五瓣の花びらのやうに寄りつ、また離れつ。或はねぢ梅の花の如く。手を引きたる儘にくるくると、右に廻轉し、また左に廻轉して、終りには、更に圓形となり、一列、又

は二列となりて退く等、すべて唱歌遊嬉に屬して、運動には、極めてよきものなり。

○追羽子

追羽子、又は追羽根とも云ふ。本邦の俗には、多く新年の遊嬉となすものなれども、うのかみ支那に行はれしは、新年のみに限らざりしが如し。こは、從來の女兒遊嬉としては、極めて、運動に適當なるものなり。扱、これは、大抵、何人も知るごとく、羽根は、むくろじの實に、三葉五葉の鳥の羽をすけて、桐製の羽子板もて、上に高くつき上げつゝ、ひらくと下に落ち來るを、羽子板に受けて、つき上ぐるなるが、うは、一人にてもなし得べしと雖ども、其れにては興味薄き故に、大方、二人以上の群にて、追ひかはしつゝを常とす。故に

稀には、寒村僻邑に住まへる、
賤山がつさへに、詠歌に、情
を訴へしことさへありき。こ
は是れ、わが國の詞の和やか
にして、かな文字の寫し易き
が故にもあるべく、また、一
つには、明美なる山水の風光、
自づから、人の心をして、天
然の美術を形ち造りたるにも
よるなるべし、且つ、國歌の
性と形とは極めて、高雅優美
なるからに、専ら、女子に似
合はしきものとして、習はし
めなごせしめし故に、斯道の
堪能、殊に女子に多し。
因に記す、漢文渡來以降、詩

も、稀には、女子の歌びし
もあれども、詠歌に比すれば、
實に九牛の一毛なるのみ。歌
合等の事は後に云ふべし。

四 國見

國見は、奈良朝あたりまで
の事なり。こは、高き所に登
りて、國々を見渡したるなり。
即ち、山川村落の景色を眺望
せしなり。故に萬葉集などの
歌には、この 國見 の歌多
し。これも、男女ともにせし
ものなり。
然るに、後世に至りては、花
見 月見 雪見 など云ふ名
に變じて、國見 なる名は、

追羽子の名あり。斯くして、方分けてつく羽子は其落さずし
て、數多くつきたる者を勝とし、少なきを負とす。よりにて、其
勝敗を分くる爲に、且つは、興あるまゝに、負方の顔に、白粉
などを塗りつくるはまたしも、墨をさへ塗りて、若き男女の
打ち交り、ざれ交はずともは、慎しむべきことなり。
追羽子は、運動には、殊によき遊びなれども、女子の品格を
毀損すべき迄の戯れはなすべからず。うは、其遊嬉の技に心
を入れずなりたるにより、左様の事する様にもなりにけん。
追羽子は、往古は、男子の遊嬉に屬する蹴鞠に類したる遊び
にして、其つき方にさまざまの技術を要したるものなりと
す。例之ば、羽子板の柄にてつき、又は、側面の、極めて、幅狭
き所にてもつき、或は數回は低く、一回は高く、數回は高く、

一回は低くなどもつき、又は、最も高くつき上げ置きて、或
距離まで走り行き、舊の所に立ち還りて、其落ち來る羽根を
うけなどすることもあり、且つ殊更に左にてもつくものな
り。
數人にて追羽子するには、先づ、二人づゝなり、三人づゝな
り、源平に分けて、源氏は白の袴、平氏は赤の袴をかくるか、
或ひは、紅白の印を衣服、又は、髮等につけ、さて、源氏の第
一より、平氏の第一へ、源の第二より、平の第二へと、遣りか
はずは普通にて、巧みになすは、ひとり其れのみ止まらず、
先づ、源氏方の第一なる人、一つは低く、一つは高く、又は中
程になど、種々のつき方をして、扱、平氏方へ送るを、其受く
る方にて、亦、左様のつき方をなして順に送り、落したる

無くなりたれど、花のもと、青葉の蔭、紅葉の林、または、さまざま、四季折々につけて、あるは、山に登り、野に出で、風光を翫びしこと極めて少からず、今も猶、男女、都鄙、貴賤を通じて、楽しみ遊ぶめる、此種のもは、みな、上古の國見の名残なりかし。
五 菜摘 花摘 小松引
初春の頃、野邊、田の畔などに、出で、小女達の若菜あさるは、たゞ、單に、遊嬉とは云ふべからざるものならん。うは、神にささげ、親に奉り、自らも食する食用の種を助け

方には、何々の罰あり。曲づきを爲損ひて、たゞ、羽根を落さざりしのみ時は、何點を引くなどさまざまの志かたありしなれども、今は大抵、羽根を落さず送るをもて可とするが多し。
扱、この追羽子につきて注意すべきは、一體、羽子は、戸外にてすべき遊嬉なれども、時としては室内にてなすことあり。うは、雨の日、風強き折などは、外にてはなされぬ故に、室内にてなすは已むことを得ざれども、疊の上にて立懸ぐ時は、塵立ちて悪し。若し室内にてせんと思はば、板の間を選ぶべし。
又、羽子板は、もと、輕き木質のものを、滑らかに削りてさへあれば、其れにて可なれども、女兒が翫具なるからに、種々

んが爲もあるべし。されど、春霞やうく、棚引きりむる程、思ひくは、花染の衣着よりひて、若き女どちの若菜摘みにと出で立つは、大方實用の爲にはあらで、却つて、遊嬉の一種たりしがごとし。これは、今も猶、運動がてらとて催すことまゝあり。

花摘 上代の頃は、たゞ、野山に咲ける、春秋の花を、手づさびに摘みかはして遊び楽しむしなれども、中世、即ち、佛教の盛んに行はれし頃、歌集などに、花摘にまかりてなどあるは、みな大抵、

の裝飾を施して、彩色畫、或は、押繪などを用ふる、げにさる事なれども、此圖畫、押繪には、往々嫌惡すべき人物、形、模様を附けたるが少なからず。年少の者の眼に觸れ、耳に入ることは、勉めて、純潔清雅ならんことを要す。決して、娼妓俳優等の、爾も其粉裝の嫌ふべき形ちしたるどもを、神聖なる少女等に翫ばしむべからず。能く心すべきことなり。

○毬つき

毬つきも、亦早くよりある遊嬉なり。然れども、從來のは、大抵、綿、ばんや等を心にし、其れに白綿糸をかけ、其上を、種々の色の釜糸して、かがりたるものなり。外見は、まことに麗しく、優美なるものなれども、こは、多くは、室内、疊上にて、坐りてつくを常とすなれば、塵も立ちなどとして、餘りに宜し

佛に花奉らんが爲にて、其れ將た、かたへは、野遊の一種となり、美服を着飾り、又は、割籠さへなごをさへに用意して、所謂、花摘なる名のもとに、春の遊嬉を試みしなるべし。

小松引も、齡を延ぶてふ例しよりして、正月上の子の日に、もよりの野邊に出で、小松を引き持ち歸りて、わが庭に植ゑたるなり。宮中などにては、殊更に、御使など云ふこと承はりて、女官たちの、従者打ち連れて、出で立ちつるものなれども、これも亦、

からず。其れよりも、ゴム毬を戶外にて、立ちながらつく遊嬉を最もよしとす。但し、従來のかがり毬も、つく人、外に立ちて、板縁にむかひ、其上にてつくはよし。

扱、此毬つきも、二人又は三人幾人にても、順々につきながら、數を算へ、落したる時は、次へくと廻し、其數の多きを以て勝とす。又、これにも、曲づきと云ふことあり。毬を高くつき、其上に上りたる時、つきつくある掌を、くるりと毬にまはしてつき、又は、つきながら、其手の甲を接吻ひ、或ひは、高く抛げ上げて、落つる時に、普通の如くつくなどのまかたあり。

毬つきにも、亦能く注意すべきことあり。この毬歌といふものは、つく毬の拍手に連れて、歌ふものにて、興味を助くる

やんごと無き儀式めきたるも、其實は、初春、戶外の遊嬉なりしなりけり。其當時、中等以上の女子は、戶外に出づること、甚だ手重き習俗の頃とて、斯かる何と無き事も、若き女ごちには、いかに、面白く興ある事にも思ひたらめ。野遊なる名も、右に述たる遊びを籠めて云へるには、猶これのみにはあらず、花の蔭に暮らし、鶯の聲にあぐがれ、董菜の床に入るを惜しむなども、皆、廣き原野に春を翫びしなり。

六 櫻狩 紅葉狩

戶外遊嬉

爲にすなれば、種々の面白き文句を連らぬるは、極めて至當のことなれども、こは、子女教育の上につきて、餘りに重きを置かざりける、民間市井の、不學なる徒が作に出でたるもの多く、中には、親子同胞の前にては、殆ど歌ふに難く、聞くに忍びざる如きごもの無きにもあらず。蓋し、明治聖代教育の普及せるまくに、漸次、其種の毬歌は、あとを斷つに至るべきも、未だ全く純正なるもののみ行はれつくありとは信ずること能はず。世の母たらん人は、能く是等の點にも注意あらまほしく、且つ、物心知る程になりたる少女達は、自らも能く心して、苟且にも忌はしき歌は、決して謠ふべからず。(尙、毬歌は別條にいふべし)

○毬籠

是等は、はやくよりもしけるならめど、この名をおほせしは、桓武の朝以降なるがごとし。こは、單に、花を見、紅葉を見るを云はずして、てふ文字を附けたるは、紅葉の色よき枝を折り持て歸るの意なるからに、多くは、山深くを待ね入りて遊びたりしがごとし。されど、必ず、花紅葉の枝を折るのみが目的にもあらず、其名によりて、やはり、春秋の風光を翫びしなりけん。

七 莖狩 茸狩

是等は、前の二種よりも最も

新らしき遊びなり、就中、莖狩 のごときは、専ら、少女が遊びのやうになりしは、莖の蟲のはかなく光りて、仄かに開夜の草の葉末の露を照らすなど、自づからなる優美のさま、最も女子の心に適ひてや覺えけん。されど、こは、夜ならではなし難きなれば、心ききたる僕などを伴ふ事なりけりし。今も猶、莖狩の催し無きにはあらねど、うのかみの如き、ありさまにはあらず。茸狩 は、秋の頃、山に登りて、菌をあさるなり。こは、

毬籠は、先づ長圓形の籠(普通、紙屑籠と云ふものにてよし)を、長き棹の尖にくくり附け置き、赤白の毬を、各一つ宛入るくにて、其早く入れたるを勝とすなり。この方法は、源平兩方に人数を分け、赤白の襷をかくるか、又は赤白の印をつけて、各自、籠ゆひつけたる棹を、眞直に、大勢にて持ちさくげ兩方の間には、綱を張りて、區別す。さて、源氏は赤毬を、平氏は白毬を、わが方の籠に入れんと、高く抛上ぐるなり。是時、白方へも赤方入り交り、赤方にも白方入り交りて、入れさせむと妨げ、又は、抛けたる毬の、籠に入らずして、落つるを、我れ先きにと拾ひ争ふなり。斯くて拾ひたる毬、赤ならば赤方へ、白方ならば白方の群へ、抛げやる事なるが、味方の抛ぐるは、都合よきやうに抛げ、敵の抛ぐるは、却りて、都

合悪しきやうに抛ぐるを常とす。大抵、三度にて勝負は極むるなり。

○毬拾ひ

これは、小さき紅白の毬を、やはり、源平に分けたる人数丈積み置き(人数、極めて多き時は、三色にも四色にもして、人も三組、又は四組に分く)大抵、少女の走り進むに適度なる程の距離に、籠或ひは箱を兩方に二つ置き(三種の時は三、四種の時は四なり)源平の二組は、一列に整列し、合圖を待ちて、毬を兩手に一つ宛拾ひ競走して、設けの器の中に入る。斯くすること數回、合圖によりて、歩を止む。これも、多數の毬少しにても早く、器に充ちたるを以て勝とす。

○毬網

若菜摘に似たる遊びなれど、上代には更にある事無かりけん。近き世の事なるべし。これれも、茸狩の名によりて、秋の山ぶみに風光を既ぶなり。今も田舎には多くあり。されど、こも亦、うのかみの如く、大形なる事は無くなりたり。是等は、殊に、身體の運動にもよく、且つ面白き遊びながら、何處にてもなし得らるべきにはあらず。

八 舟遊

舟遊びも、最もふるくより行はれたるものなり。但しこれは、夏の頃、涼をもとめて棹さし出で、月のあかき夜、さやかなる光をめで、漕ぎめぐりなご、其他、何時ともわかず、海川湖上、何處にも、舟を浮べて、其風景を賞したることなりき。されど、大方は、多少風流心ある人のすさびにて、歌を詠じ、詩を賦じて興を助けたるさまにありし。さるを、近き世に至りては、館船などいふものさへ出で来て、これには、酒肴、三絃をさへ載せ、あらゆる種類の女子どもをしも、伴をひて、極めて、殺風景なる遊びをなす中に、さるべき女さへ交り

毬網は、大きな網の袋、其口の四方を、棹に結びつけて、幕の如く、高く引き張らしめ、袋の底は、紐にて結び置くなり。さて、これも、源平と方分けたる少女等、一定の距離より、合圖から合圖迄、各自、紅白の小毬を、網袋に抛げ入れ、右終りたる時、底の紐を引き解きて、紅白の毬を算へ、多きものを勝とす。やく、打毬に似たるものなり。

○毬送り

毬送りのも、源平に方を分けて、各一列に長く並び、左右の手に持たたる、小さき毬を、肩の上越して、後ろさまに、順々後へへと送りやるなり。扱、最終に毬を受けたる者、其列の側を走り進みて、設の器に入る。斯くして、一列、すべて毬を送り終りたる時の遅速を以て、勝敗を決するなり。

○轉毬

轉毬の、源平と兩方に分け、各二列に對ひ合ひて並び、大凡、直徑、尺程の、大きな毬を、毬の心は藁屑等にて作り、紅白の金巾にてくるむ。恰かも、雪轉しする如く、味方同志、此方より彼方へ、彼方より此方へと、こまどりて、廻し送る。終れば、更に舊の方へ送り返し終りたる事早きを以て勝とす。

○鬼ごど

鬼ごどは、先づ九人なり、十人なりの人、一人の鬼を定め、其逃ぐる區域と、宿とをも定む。宿は、鬼に追はると人の憩ふ所なり(樹陰、又は、軒下等便宜の箇所)。扱、鬼は追ひ廻り、子は(すべての人数を子といふ)逃げ走りて、勢ると時は、宿に入りて休息す。斯くて、鬼に捕へられたる者は、更に鬼とな

たるなど、更に往時の舟遊とは、名を同じくして、其趣きを異にすとも云ふべし。

九 鳥、蟲の音の楽しみ

これは、古代よりありし一種の遊びなり、遊嬉といふよりも、寧ろ、楽しみと慰みとかいふべきなれども、猶遊嬉の一種とみえて差支へ無かるべし。

鳥の聲を聞くことを楽しみしは、うの始めは、無論野禽なりき。(後世に至りては、籠中に飼ひて、其妙音を翫びしのみならず、何鳥の會を云ふものさへ出で来て、種々、

啼聲に階級をつけて、其巧拙を評し、優劣を競べなごすることさへあるに至りては、全く、純然たる一の遊嬉となりぬなり)。其種類は、先づ、鶯、子規より、雲雀、鶉、雁、千鳥、こま鳥等の聲を賞しき。就中、子規は、餘りに、人家稠密の所には鳴かず、稀に鳴けば、月の夜、雨の夕など、雲井はるかに、一聲二聲仄かに鳴きて過ぎたるもの、床しさに、中世に至りて、一層之を賞翫する程度を高め、高貴の男女車を驅りて、はるく山里まで尋ね入り、子規

り、捕へたる鬼は子となるなり。こは、通常の鬼ごとなるが、時としては、子は一人宛、手を組み連れて走るものあり。其れは、極めて、速かに走り難きを以て、左様の時には、早く逃げ入るに便宜なる様に、宿を近くくと定むる事なり。

○盲目鬼

盲目鬼は(又眼隠しとも云ふ)鬼ごとの類なり。但し、鬼になる人、手拭を以て、眼を塞ぎ居るを以て、容易に、子を追ひ捕ふることに難し。故に、盲目鬼は、大抵、宿を置くこと無し。且つ、この遊嬉を爲す所は、必ず、砂場、芝生等の、木石其他の障碍無き所にあらざれば危険なり。鬼なる人の、よし過ちて倒るることありても、決して、負傷無からんやうの箇所を選ぶべし。

○隠れ遊び

隠れ遊びも、必ず、一定の場所を選び置き、其範圍内に於てなすべきものなり。これも、鬼一名を先づ定めて、何分時間と限りて、他所に去らしめ置き、其間に、銘々、樹陰、物の隈などを尋ねて、身を隠すなり。さて、鬼は、此所彼所と探すに、其早く探してあてられたる人、更に鬼となるなり。但し、この遊嬉は、なるべく、深く隠れて、探し出だされじと勉むるものなるからに、幼少の女兒などは、穢き場所、危き岸などの陰をさへ、尋ねて潜り入り、時としては、衣服などをも損ひ汚す等の事無きにしめあらず。且つ、こは、運動の爲にも、餘り十分ならねば、他の遊嬉に比しては、劣りざまなるものと云ふべし。

の一聲を聞かまほしさに、馴れぬ旅籠などをさへせしこと少なからざりき。其れ將た、其聲を待つ宵、又は、待ちあかず、腕なごのつれづれには、歌を詠じ、詩を賦して、興を助くることなりけんかし。蟲には、鈴蟲、松蟲などの聲を最上としき。これも、中世に至りては、蟲選みなごいひて、なほ一種の遊嬉となりけるなり。

十 蒸物

蒸物は、今の世まで傳はりて、猶之を蒸びつゝある、このきく香の遊嬉は、うのかみ蒸

○子取り

子取りの遊嬉は、俗に、子一取ろくと云ふものなり。こは先づ、少女の一群の内、年長なる者を選び、一人は親に、一人は鬼になし、餘はみな子とす。斯くて、親の後ろ、即ち帯の結び目、袴の腰等に「子」は、五人にても、十人にても、確乎とつかまり、離れぬやうに長く繋がれば、親は、両手を廣げ、鬼は、其隙を伺ひて、子を捕へんとす。子の中にて、一番強さうなる者、最終に列なるなり。其最終の者を、鬼の捕ふるを規則とす。されば、親及び、最終になる子の、能く巧みに防ぎ逃るゝにあらざれば、忽ち、鬼に捕へられて、また、鬼とせらるべし。鬼の左へ廻り、右に走りて、子を捕へんとするからに、長き一群の左右に蜿蜒して、動めくさまは、恰かも、長蛇の

びしものとは、殆ど同物異種の遊びとなりたれば、殊更に、蒸物なるものを、籠頭にかけ、本文の香なる種類と區別すべし。抑も、上世の蒸物と云へるは、其始めは、衣装を蒸し、又物品をして、其よき香にしましめんの目的にて、其蒸りも、各自の嗜好に充てしめんが爲に、自ら、種々の藥劑、艸木の皮、實其他の物を取り交へて、細末となし、之を合はせ、之を練りて、物の内に納めたるなれども、中世に至りては、また、この、銘が調製せる

形ちに似たるものあり。是遊びをなすに當りて、鬼は「子一取ろくと叫び、親はこれに應じて、子を取つて見さいな」と答ふるなり。こも亦、砂場、廣庭等、平坦の地を選びてなすべし。

○ローン、テニス(庭毬)

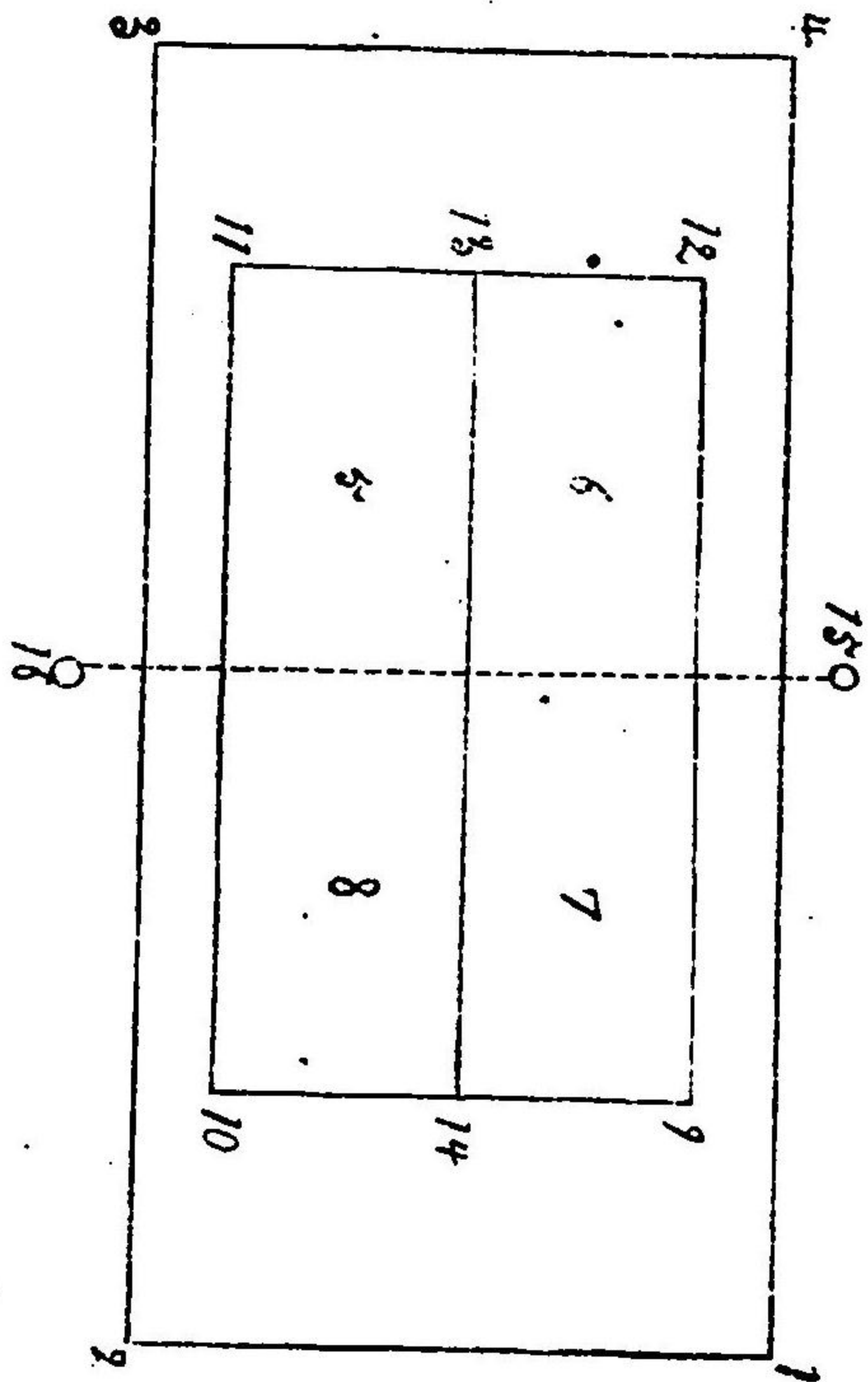
「ローン、テニス」は、老幼男女皆共に行ひ得べき極めて佳良の戸外運動的競技なりかし。而して其方法の要は、豫め地上に左の如き長方形なる界線を劃し、更に一定の高さなる長き網を張りて、之を一區に分ち、二人或は四人なる戲伴各一個の打球器を持ちて、其兩方に分れ、互ひに、球を打ち又打ち返し、敵に過失ある毎に、己れの得點を増し、一定の計算法によりて、其勝敗を決するなり。

薫物の優劣を定めんとして、薫物合せなど云へる、一種の遊びはじまり、これを薫きて、其香を嗅ぎ、善悪の判別は、最も、斯うやうのことに委しき人を選びて、其役を依頼し、其れが選にあたりて、優等の名をおはしめられしものは、世に、名香などともてはやされしなりけり。さて、この薫物合せの席に持ち出づる薫物を納むる器は、種々の寶石、及び、名作の陶器、磁器などにして、これを包む絹帛、袋やうの物より、これを着つくる、各種の花の色、枝ぶり等

多人數あらば、全員を敵味方に平分し、兩組より全時に二人宛出で、一勝負若くは、數勝負宛、交番に行ひ、後に各回各組の勝數を通算して、其全局の勝數を定むるも可なり。

「コート」遊戯場の區域は、位置の都合により時として、或一方は日光に向ひ、他の一方は之れに反することあり。而して、日光に向へる者は、球を見るに不利なり。故に、斯かる場合には、隨時其「コート」を交替するも可なり。遊戯場には平坦にして、球の跳ね易き地盤を撰ぶべし。刈りたる芝生、或は砂等礫少なき箇所を良しとす。而して、之れに圖の如き界線を畫して、尙其周圍に適當の餘地を置かしむべし。

界線は、白墨石灰、或は胡粉の溶液を以てするを最良とすれども、又細繩を張りて、之れに代ふることを得るな



り。而して、常置の「コート」にも、豫め板其狭き面を上(す)を地平に埋め置くも可なり。

十一 獵漁

は云ふまでも無く、其れを取り持たせて出だす、小女小童の衣装かたち迄も、美術的意匠を凝らして、満坐の喝采を得んと企てたる、まことに、太平の世の遊嬉にして、其美術心の養成といはんには、随分に功多かりし成べけれど、體育上に裨益あるべき、今世の戸外遊嬉に比すれば、實に霄壤の差あるものなりといはざるを得ず。

殊に面白きは、わが國上古田獵のことなり。孰れの國にて、田獵は、男子の遊びなり

まして行はるゝものなるが、
 (稀には、女子の従ふもあ
 るにもせよ) 本邦には、うの
 かみ、この 鷹狩、小鷹狩
 なごいふもの、即ち野山に出
 で、鷹を放ち、大鳥小鳥を
 取らしたる時に、女子も好
 みて、騎馬にて同行せしこと
 は、まゝあれども、向うのう
 へに、深山幽谷に分け入りて、
 猪獵せし時すらも、女子の従
 へりしことさへあり。やごと
 無き御あたりの御襖障子の書
 に、上古の風俗をうつして、
 風流たる上流の、下僕に鷹す
 るさせて、馬に乗りて、野中

「コート」の大きさは素より實際に就て斟酌すべきものなれど
 も、通常のものゝを擧ぐれば、四人にて爲すべき分は左の如し。
 (1)より(2)(3)より(4)に至る線を「ベース、ライン」といひ、其長
 さ各三丈六尺、(1)より(4)に至る線を「サイド、ライ
 ン」といひ、其長さ各七丈八尺、(9)より(10)、(11)より(12)に至る線
 を「サーヴイス、ライン」といひ、其長さ各二丈七尺、(9)より(12)、
 (10)より(11)に至る線を「サイド、サーヴイス、ライン」といひ、其
 長さ各四丈二尺、(13)より(14)に至る線を「ハーフ、コート、ライン」
 といひ、其長さ四丈二尺なりとす。然るときは、各「ベース、ラ
 イン」より各「サーヴイス、ライン」に至る距離は各一丈八尺
 にして、各「サイド、ライン」より各「サイド、サーヴイス、ライ
 ン」に至る距離は各四尺五寸となるべく、而して「ハーフ、コ

の草村に立てる園のあるにて
 も知るべし。わが尙武の氣象、
 ふりし世の遊びぐさのあと
 尋ねもて徴するに足るものあ
 り。
 漁業は、もとより、或種の人
 の營業になしたるは云ふまで
 も無き事ながら、また一種、
 男女兩性を通じて、遊び慰み
 のことになしたるは少なから
 ず。先づ其種類を云へば、夏
 の頃川邊に出で、鶉つかひ
 に鶉の鳥を放たしめ、鮎など
 を取らしめ、又は、賓客饗應
 の折などにも、庭園中の泉水
 に鶉を放ちて、小魚あさらせ、

ート、ライン」は「コート」の中心を通して「サイド、サーヴイス、
 ライン」と並行すべし。
 (15)より(16)に至る虚線は即ち網にして、其長さ六間高さ三尺
 五寸乃至四尺なるべく、又網は兩「サイド、ライン」を二等分し
 たる地點に「ベース、ライン」と並行して張るべく、而して之
 れを張るべき柱は「サイド、ライン」の外側を少しく離れて樹
 つべし。但、柱の高さは網よりも高きを可とす。
 二人にて行ふべき「コート」は四人にて行ふべき「コート」の各
 「サイド、サーヴイス、ライン」を各「ベース、ライン」にまで延
 長して、其兩外側の地を除きたるものに等し。網の長さ又之
 に準ず。されば、四人用「コート」の「サイド、サーヴイス、ライ
 ン」を豫め「ベース、ライン」にまで延長し置けば、網は長さ餘

客にも見せて楽しみしこと等あり。又、海、川に舟を浮べて網打たせたる、自ら釣を垂れて、魚を求めしもありき。但し女子の釣をなして、遊びなごせしは、上代の事にて、簾の外にさへ、容易に出でずなりぬる中古よりは、大方絶えて其事無きに似たり。而して、近き世に至りては、またく、魚釣の慰みは、女子にも多くなす事となり、なほ、自ら櫓をあやつり、櫂を取ることもさへあるにいたれる、世の變遷は、さまざまのものの上に及べるものがある。

十二 雑遊

雑遊を遊ぶは、古き世よりのことなり。其始めは、はになど云ひて、土人形の類ひを遊ぶ、其れより、紙などにもつくり、やう／＼今の雑遊人形の種類をも遊ぶけん。されど、近世のごとく、三月三日、即ち、上巳の節句に儀式だちて、雑まつりせしは、徳川氏以前にはあること無かりき。そのかみ、女兒の雑遊人形を遊ぶは、たゞいつともわかず、現今、女兒が人形を愛する如きさまなりしに似たり。

れるも差支なし故に四人用「コート」に使用のものを備ふ時
に臨みて二人にても行ひ得べし。二人用「コート」の兩側最長
線は其「コート」の「サイド、ライン」にして、又「サイド、サーヴ
イス、ライン」なり。

所要器具は、球二個「ラケット」と稱する其形宛も團扇の如
き打球器一組(四個)及び網一張なり(是等の器具は市中の體操器
球は護球を薄布にて蔽ひたるものにして、正式のもの
のは其直径二二インチ重量十五匁なり。然れども、通常
護球の中形なるものを用ふ。而して此遊戯に要する
球の數は素と一個にて足れども實際に臨みて屢々不便
を感ずることあるにより、二個或は其以上を備ふ。
「ラケット」の重量は凡う百二匁乃至百十三匁なり。然

れども、通例女子用のものは百二匁或は其れより輕き
方利あらん。蓋し「ラケット」の重きに過ぐるものは、
これを使用するに不便なり。然れども、自由に重き「ラ
ケット」を使用し得るものは、これによりて、能く勢
力ある球を打つことを得べし。「ラケット」の大小輕重
は之を使用する人によりて斟酌せんことを要す。
網は、俗に「カイルマタ」と稱する編み方を良しとす。而
して、其長さは、「コート」の幅員より稍長きを可とす。例
へば、幅六間の「コート」に長さ六間半の網を用ふるが如
し。而して、時として網の弛みを防がん爲、其中央「ハー
フ、コート、ライン」と交又せる地點に、細き鐵條より成
れる支柱を樹つることあり。又網の上面には、幅二寸五

但し、其人形を翫びしあり
さまは、中々たいそうなる事
にて、或ひは立派なる小部屋
をつくり、それが室内の装飾
にも、いろ／＼の器具調度
用ひ、且つ、其中に据うる、
各種の人形の衣装は、四季を
り／＼に取り更へて、新らし
く麗はしきを仕たてて着用せ
しむるなどさま／＼の事あり。
斯くて、是等の人形は、殆ど
人の居家處世のありさまに擬
して、或者は主人となり、或
者は主婦となり、婢となり僕
となり、各の役目を其人形
にせしむる等のことありしな

分の白布を附くるを可とす。

判者は、「コート」の外側網の一端の邊に立つに利あり。

「ゲーム」は勝敗の一段落にして、「セット」は「ゲーム」を重ねた
る結局の勝敗なり。而して、「小勝を得たるを」、「ゲーム」を
得たりと稱し、或一定数の「ゲーム」を得たるを、「セット」を得
たりと稱す。

第一に「セット」を得たる方を勝とす。而して、通例六「ゲーム」
を以て、「セット」とすと雖も、亦之れを適宜に定めて可なり。
されば六「ゲーム」の「セット」を得んには、六回乃至十一回の
勝負を決せざる可らず。

点数は、敵に一過失(但、例外あり。次に記す)ある毎に一點を
得、「ゲーム」に達すべき得点は四點以上にして、且敵より二

り。彼の、源氏物語に、夕霧
の明石姫君をいたづきおしつ
きたるありさまを記して、
「ひ／＼の殿のみやつかへ」
云々など有にても知るべし。
近き世に、豆糰と稱するもの
は、すべて、小さき人形をさ
すがごとし。然るに、はやく
行はれし、豆糰は、眞に、豆
にて作りたるにて、これは、
豆を少し濡らせ置きて、其れ
を小楊枝やうのものに突きさ
し、豆のおもてに、眼鼻を書
き、小楊枝に、紙片、帛片な
どして、衣装せしむるものな
り。今も稀には、片田舎にて

點の超過なかるべからず。而して、斯の一勝敗決すれば、判
者は「ゲーム」と宣告し、判者の此宣告によりて、戲件は一旦
其遊戯を止む。「セット」の時亦同じ。

最初に球を打ち出だすを「サーヴ」(執行の義)「サーヴ」する事
を「サーヴィンダ」、「サーヴ」したる球を「サーヴィス」、「サーヴ」
する者を「サーヴァー」といひ、又斜に「サーヴァー」に對する
敵手を「レシーヴァー」或は「ストライカー、アウト」といふ。

「サーヴァー」の「サーヴ」するに當りては、先づ自個の「コート」
の右側「サイド、ライン」と「ベース、ライン」との隅角に於て、一
足を「ベース、ライン」外に、他の一足を同線内、或は線上に置き、
其持てる球を手にて投げ上げて、其未だ地に落ちざるまでとこ
ろを打ち、以て敵の領内網を其一邊として成れる斜向の小

見ることあり。極めて、古雅にして、面白きものなりかし。又からくり人形は、もぎ、なりはひに使ひしものなれども、稀には、さるべき女子の翫びて、そが坐右に置きたることもありしがごとし。このからくり人形と云ふも、今の西洋にて物するやうの巧みなるにはあらで、たゞ、手足等に、細き紐をつけて、其れを、そが後ろより引きあやつりて、局部を動かしたるに外ならず。

十三 嫁ご

嫁ごとは、年少の女兒が打ち集ひて、家庭園樂のありさま

より始めて、朋友間交際のさまなどをも演じて、悦び樂しむ遊びなり。この遊嬉は、今も猶見る所なるが、こほ、奈良朝の頃など、即ち、萬葉集ごもにさへ、さることの見えたるがいと面白ければ、早くよりありける事ぞ知らしめんとて、此所に書き加へつ。凡そ、小供の、大人の眞似するは、昔も今も同じことにて、其髪結びやうより、衣服其他のものに至るまで、みな、年かざる人の粧ひに擬せんとし、且つその言語舉動も、すべて大人ぶりたるを悦び似

「コート」以内、即ち圖中(5)或は(7)の區域内に入らしむべし。然るときは「レシーヴァー」は其「サーヴァイス」を必ず、第一「バウンド」「バウンド」とは、球の地に落ちて跳ね上るをいふに敵の「コート」に打ち返すべし。而して其動作を「レシービング」「受くる義」といふ。

一「ゲーム」の終る毎に「サーヴァー」と「レシーヴァー」と互ひに其職を交換すべし。即ち前の「サーヴァー」代りて「レシーヴァー」となるが如し。

「サーヴァー」は自他何れも一點を得る毎に、前と全法により、左右の隅角に位置を變へて「ゲーム」に至るまで、續きて「サーヴ」すべし。而して、これ右より始むるを法とす。

「サーヴァイス」にして、正規の小「コート」内に落ちざりしとき、

或は「サーヴィング」に際して、球を投げ上ぐるも之れを打ち得ざりしとき、或は不正の「サーヴィング」を爲したる時、例へば、不正の位置を占め、不正の姿勢をとり、又は二度以上「バウンド」せし球を打ちたるが如き場合には、判者「ファウルト」(過失の義)と呼ぶ。然れども「サーヴァー」は、再び同位置より「サーヴ」することを得。然るに、又之を過てば判者「ファウルト、エゲイン」(過失を再びせし義)と宣告し、此宣告によりて、敵に一點を得らる(右方より「サーヴ」すべきに之れを左方よりしたる時の如きは「ファウルト」なり。されば二度目には正方向に行きて爲すべし)。

「サーヴィス」にして若し其入るべき敵方小「コート」の線上、即ち「サーヴィス、ライン」或は「サイド、サーヴィス、ライン」

するものなり。されば、いにしへの女兒たちが、振分髪ちりわけがみの末短すえみぢかきを、強しひて取り上げなごして、大人おとなさびしたるありさまより、衣服いふくも、殊更ことさらに裾すそ長ながきを着きて、主婦しゆふがあり様さまにならへたるごも、まことに、今日の前まへに見みる心地こころして、おかしくも亦また面白おもしろく覺たゆかし。且かつつ、その髪かみのかたちなどは、單ひとへに自みづからの毛髮けみを解とき結むすびたるのみならず、他たの布帛ぬのをも用もちひて、大人おとなの髪かみに擬なしたるごもありけんかし。

この雜遊ざいゆうび、嫁よめごとは、今いまも、なほ、女兒むすめの遊嬉ゆうぎとして行なは

或あるは「ハーフ、コート、ライン」の上うへに落おつる時は、判者はんしや「オン、ライン」(線上せんじょう)或あるは略りやくして「ライン」(線せん)と呼よび、又また網あみに觸ふれて入いる事ことあれば、「チット」(網あみ)と呼よび、共ともに「ノー、カウント」(計けい算さんなし)とす。即すなはち「ファウル」の中うちに算入さんじゆせず然しかれども、敵たき方かたにて已まで其球そのたまを受け、又または打うち返かへさんとせし時は、其その「サーヴィス」はこくに正當せいとうのものとなる。「バウンド」極きまめて少すくなくして、殆ほとんど無なきに近ちかき「サーヴィス」を「ノー、カウント」とする法ほもあり。

「サーヴィング」は敵方たかにて、未いまだ、用意ようい整ととのはざる間まに爲なすべからず。此間このまに爲なしたる「サーヴィス」は「ノー、カウント」なり。故ゆゑに判者はんしやの下した「レディー」(用意ようい)の令れいにて相方あひかた共に用意よういし、次に「プレイ」(遊戯ゆうぎすること)の令れいにて「サーヴィング」すべし。

れつゝあれども、常に「翫あそぶ」所ところのものは、單ひとへに土人形どじんがたのみならず、紙かみにて作りたるもの多く、これを號なづけて、あねさまごご、と云いひ、姨あねさまごご、と云いふなり。(なほ、ごごご、と云いふなり。)

鬼おにごごを鬼おにごごこと云いふがごご、ごごご、とは、各位各位相あひごごになすやうの意味いみなり。

十四 偏へんつぎ

偏へんつぎは、漢文かんぶん渡わた來きた以後いご中世ちゆうせい(藤氏隆盛時代とうしりゆうせい)専せんら、上流じやうりゆうに行なはれたる遊嬉ゆうぎにして、こは、荷いくも文字もじある者は、男おとこ女むすめともに翫あそびしなり。而しかして、この遊あそびは、學問がくもん、即すなはち、

戶外遊嬉

「ノー、カウント」の場合ばあひは双方ふたう共に、點數てんすうに關係くわいなし。即すなはち、其打うちを爲なさざりしものと同一どうい。

「サーヴィス」以外いぐわいの球たまは、其未いまだ地ちに落おちざると、或あるは已まに一度いちど「バウンド」せしとに拘からず。之これを打うち返かへすことを得えべし。又また之これを返かへすには、敵たかの全ぜんコート「何れの部分ぶぶん、何れの線せん」上うへに落おつるも、又また網あみに觸ふれて入いるも共に「ファウル」とならず「サイド、ライン」或あるは「ベース、ライン」上うへに落おちたるを「ノー、カウント」とする法ほもあり。然しかれ共とも、若もし全ぜんく「コート」の外そとに出いづることあらば、判者はんしやは「アウト」(外そとに出いでたる義ぎ)と呼よび、これに依よりて敵たかに一點いんを得えらる。

球たま、若もし樹木じゆもく、其他その他場外ばがわいの或物あるものに觸ふれて、後入のちいるは、打うちつ者の過失あやまちなり。然しかれども、一度いちど内に落おちたる後のち、外物がわいぶつに觸ふれたるを

智育の助けとなりしもの如し。先づ、其方法は、いろいろの文字の偏を、かくし、旁のみを見せて、其偏を、木偏とか、手偏とか、火偏とか、土偏とか當てしむるにて、これも、かるた遊びの如く、一坐の人数、一人々々云ひ當て、其當りたる數を取り、多きを勝と定むることもあり。又、左右に分けて、同じ數の人員、各組をなすつゝ、勝敗を争ふこともありしなり。

十五

韻ふたぎ 韻ふたぎも亦、中世偏つぎのごとく行はれたる遊嬉にし

て、これも、文字を覺ゆる助けとなりしものなり。されど、偏つぎは、たゞ、文字だに少し覺ゆれば、試みらるゝ遊びなれども、韻ふたぎは、古詩を多く知らざれば、爲すこと能はざるなり。何となれば、其方法は、先づ、古詩の韻をかくして、他の句のみを示し、此韻は何なるかと當てさするなり。例之ば、

九月九日望郷臺

といふ詩なれば、この臺なる韻字をかくして、

九月九日望郷

とのみ見することなり。但し、

返さざるは、對手の過失なり。故に、各敵に一點を得らる。尙、未だ「バウンド」せざるも、必ず「アウト」なるべき球、若くは、場外の或物に觸れて入りたる球を、判者の呼ぶ「アウト」の聲に先だちて、敵手之れを打ち、又は打ち返さんとせし時は、其球は、こゝに正當のものとなる。

敵より來れる球に、身體衣服、若くは、所持品の觸れたる時、球の網を超ゆる前に之れを打ちたる時、網に近く立ちて球を打ちしに「ラケット」の一部、若くは全部、網を超えて敵の「コート」に入りしとき、球を打つに「ラケット」にてせざりしとき、「ラケット」にて二度球に觸れたるとき、是等の場合には、常に敵に一點を得らるゝものとす。

「ファウルト」なる球は打ち返すに及ばず。されど、必ず

「ファウルト」なるべしと思惟ひし球も、地に着けば、意外にも、正當の球たることあり。油斷す可らず。球は「サーブ」より引續きて、相互に打ち返すべく、而して、之れを爲すには、總て此規則によるべきものなれば、時として、未だ「バウンド」せざる「サーブ」を打ちたるも、其他如何なる場合を問はず、二度以上「バウンド」せし球を打ちたるも、或は、又假令、正法によりて打ちしも、其球の網の前に落ちたる。若くは打たんとして能はざりしが如き、是等は皆敵に一點を得しむべきものなり。相互に打ち過ちたる球は、次の「サービング」の爲め、隨意の方法によりて「サーヴァー」の許に集めざる可からず。されば、豫め、數個の球を備へ置かば、機に臨みて、數個

斯くのごとく、誰れも知りたるごとき詩は、推し當てにも、誰れ人も、云ひ當てつべきなれば、なるべく、人の知らざらんやうなる古詩を求め出づるなれども、りれも、亦、餘りに、作者も不明にて、詩も拙きやうなるは用ひず。古詩の甚宜き中にて、ありふりぬやうなるものを選ぶをよしとすなり。其當てたる數の多き者を以て勝と定むること、前の偏つぎと均しく、一人々々宛も、亦、幾人か、方分けしても行ふことなり。詩作の殊に流行せし時代に於て

を全時に拾ひ集め得べく、以て幾分か其煩勞を除くことを得べし。これ球は少なくも、二個以上を備ふべき所以なり。

此遊戯は二人にてなすも、四人にてなすも、其規則相同じ。たゞ一人法ならば、各一人にて敵に當るべきに、四人法ならば、各二人共同して、之れをなすと「コート」の大小形状とに少差あるのみ。即ち四人法の場合には、甲と乙一組となり、丙と丁、又一組となりて互に敵味方となる。されば、此場合の一人の得點、或は過失は、即ち其組の得點或は過失となるなり。而して何れの組より、先づ「サーヴ」すべきか、或は、何人が、最初の「サーヴァー」たるべきかは隨意の方法によりて定むべし。

最も有益高尚の遊嬉なりけんかし。

十六 雙六

雙六は、もと、印度の遊嬉なるよしにて、彼の國にては、波羅塞戲と云へりしよし、物の本に見えたり。其れ、漸くに支那に傳はり、かこにては、箸を折りて數取りとせしよし。りのかみは、雙六と讀まざして、すくろくと讀めりき。この遊嬉は、更に支那より朝鮮に傳はり、朝鮮より、日本に傳はりつるなりとぞ。りの方法は、先づ、二人相對して、木盤にむかふ。木盤

四人組の場合に於て、先づ甲乙の組より「サーヴ」すべしと假定すれば甲は先づ圖中の(1)より(5)に「サーヴ」し「レシーヴァー」は丙、次に(2)より(6)「レシーヴァー」は丁、次に又(1)より(5)と續けて「ゲーム」の結局に至るべく、次回には丙(3)より(7)「レシーヴァー」は甲、及び(4)より(8)「レシーヴァー」は乙に「サーヴ」し次に乙、次に丁と、順次交代して「サーヴァー」となるべし。

戲件は、網の兩側各「コート」に分れて、其敵に對すべく、而して「サーヴ」する時の外、適意の處に停止、或は奔走して可なり。時として、身を場外に出ずも可なり。然れども、概して「サーヴィス」を受くるには、其入るべき小「コート」の近傍に在るに利あるべく、又實際上一組中の其二人

には、各々十二の格あり。また各々十二の駒を並ぶ。双方白と黒とを以て分けてり。さて、二箇の采を竹の筒に入れ、双方、かはるく振り出たして、其出でたる數ほど、格を數へ、自己の駒を、敵の格中に乗り入る。斯くて、互ひく、相競ひて、進みもて行きつゝ、すべての駒を、早く敵の格中に乗り入れをはりたる者を以て勝とすなり。

は各左右に分れて位置すること多し。されば其「サーヴァー」たる場合には「サーヴィング」毎に「甲乙若くは丙丁、互に其位置を交換することあるべし。」
四人法の場合には、敵より來る球を、味方中の一人打ちて當らざれば、他の一人更に之れを打つことを得べし。
判者は、何れにか、一方一點を得たる毎に、双方の得數を計算比較して呼ぶ。例へば「ワン、ジエロ」「一、零」「スリー、ツー」「三、二」等の如く、數の多きを前にして、其少なきを後にし、又双方共に一點若くは二點ならば「ワン、オール」「一、一」若くは「ツー、オール」「二、二」といひ、共に三點に達すれば之れを「ヂュース」「二様の義」といふ。

を勝せしが、近頃に至りては、其方法もさまざまに變りたるが出で來ぬ。されど、竹筒に采を入れて、其數をかぐへ、其れが多寡によりて、進み進まず定むること、すべて、むかしの雙六の規則によれるものなり。

十七 石なとり

石なとりは、先づ、丸き小さき石の大きさ、大抵同じ程なるを集めて、これを唯今の取てだま、取るやうにして取るなり。今の取てだまの取り方に、始め先づ一つを取り、掌中の片方に握み置き、

能はず。即ち「ヂュース」以後、一點を得れば、これを「アドヴァンテージ」或は畧して「ヴァンテージ」利益の義といひ、「ヴァンテージ」以後、更に一點を得ざれば「ゲーム」を得ること能はず。故に已に「ヴァンテージ」を得るも、次に敵に一點を得らるれば、又「ヂュース」となる。之れを要するに「ヂュース」以後、敵の未だ二點を得ざるに先だちて、自ら二點を得るか或は、又敵の尙未だ三點を得ざるに先だちて、自ら四點を得ざれば「ゲーム」を得ること能はず。

數の多きを前に呼ぶ法は、これ最も多く用ひらるるものなれども、未だ此遊戯に慣れざる者は、例へば「スリー、ツー」「三、二」といふ時の如き自他何れか三點にして、何れか二點なるを知り難きことあり。然るに茲に數

次に取るものは、手の掌中なる玉に障へぬやうにすべふ取り方あり。これをどは、この石なとりより来たれるものにて、手の始め石を既びたればこり、ある時には、掌中なる石に打ち當て、音を出だし、ある時は、これを打ち當てずして、音を立てぬ等のことをせしなれ。即ちこの石なとり、段々にかはり進みて、今のお手玉は出で悉つ。この方法も、亦次第々に進化して、さまざまの仕様を試みるに至れりと云ふ。左もあるべし。

の多少に拘らず「サーヴァー」の方の得数を前きに呼ぶ法あり。例へば「サーヴァー」の点数敵より多きときは、矢張数の多きを前きにする法と同様となるべけれども、若し敵より少なきときは「ワン、ツー」「一、二」或は「ツー、スリー」「二、三」等と呼ぶが故に、毫も右の憂あることなし。されば、初めて此遊戯を行ふ者には、「サーヴァー」の得点より前きに呼ぶ方可なるが如し。而して、斯の方法にては、相手の一方「ヴァンテージ」を得たるとき、若しこれ「サーヴァー」の方ならば、「ヴァンテージ、イン」といひ、又若し「レシーヴァー」の方ならば「ヴァンテージ、アウト」といふ。

「ヴァンテージ」より「デュース」となりて、勝敗永く決せざる

石なとりの遊びは、もと、河原に集へる男女の小供が、彼の波にさられたるさざれ石を拾ひて、何きはなしに、投げあげ投げ取り、拾ひ取り、打ち當てなどして遊びしを、つひには、よき程の小石拾はせて、やんごと無き家の小供さへ、室内に既ふこととなり、斯くする程に、自づから、一定の規則も出で来たるなりとす。

十八 彈棊

彈棊 手のかみは、たぎとつめて云へり。これは、今俗に既ふ彈き將棊といふも

ことあり。故に或法にては、各對手共に三點、即ち初度の「デュース」となり、次に一方一點を得て「ヴァンテージ」となり、次に他の一方一點を得れば、これをも「ヴァンテージ」を得たりとして、「ボッス、ヴァンテージ」兩方に「ヴァンテージ」ある義と稱し「ボッス、ヴァンテージ」以後、更に一點を得たる方を「ゲーム」を得たりとす。而して、これ一般に用ひらるるものにして「ゲーム」を早く決する法たるなり。

例へば、乙一失せば、甲に十五點を與へて、乙に得点なく、次に又乙一失せば、甲に猶十五點を與へて合計三十點なれども、乙に得点なく、次に甲一失せば、乙に十五

好法師が書きたる、つれづれ
艸にも出でたり。おもふに其
頃の遊嬉なりしなるべし。こ
れに類似の遊びは、今もあれ
ども、全くこれと均しきもの
はあらず、且つまゝこたての名
も、今は絶えて聞かず成りぬ。

二十 賽の河原

これは、石なとり に用ふ
る如き、丸き小石を、始めに
數幾つと定め置きて、さて、
平らなる板の上に、いかやう
にても、各目の欲するまに
く、塔の形を積みなり。
其始めに定めたる數だけ、み
な、他の人よりも早く積みを

票を有することあるべし。

鐵門は、太き通常の火箸位の鐵條を門狀に曲げ造る。

起程標及び回歸標は長さ凡そ二尺五寸(二フィート半)

許にして、直徑其上端の最も太き所凡八分(二インチ)許

なる圓錐狀の木柱なり。

二個の標柱の上部には青、桃、黄、樺、赤、綠、白、黒等の
八色を相重ねて帶狀に塗る。

球、槌の柄、及び記票には、標柱に準じて個々各異の一

色を附し、又球の彩色は減却し易きものなるにより、周

圍に帶狀淺溝を彫りて之れを塗り、或は白黒等色の一

字を彫刻し置くことあり。

遊戯場は、平坦なる芝原或は砂礫少なき地面を選び用ひ、其

形は方にして一千坪以上なるを可とす。但し、之れを縮少し
て行ふも差支なし。

門の配置法は、概ね次の如し。而して數字の順序は、起程標

より回歸標に至りて再び起程標に歸るの方向を示す。但し、

第六圖はW即ち「ウ井ーニシグ、ペツグ」に至りて息む。又各

門の距離は、一樣なるべく、其距離は場所の廣狹に關すと雖

も、通常六尺乃至一丈とし門の總數は十個、九個、六個等なる

こと圖の如し。

この場所は、なるべく廣きをよことす。何となれば、場
所廣ければ、運動自在にして體育上にも、十分の裨益あ
ればなり。然れども、本文にも云へるが如く、規定の場所
の如き廣場ならざれば、行ひ難しといふにはあらず、其

二十一 貝あほひ

貝あほひは、近き世に至り

て、貝合せと呼ぶことなりぬ。されど、古への貝おほひの事なり。其方法も多少の變りはあれども、大抵ひとつものなり。
貝おほひは、先づ、蛤貝の、なるべく大きなもの、其大ききも、大方同じ程なるを選びて、奇麗に磨き、貝の内部に彩色して、片方には、古歌の上の句、片方には、古歌の下の句を認め置くなり。斯くて、貝は、甲の方を出だし、うつ伏せて並べ置き、是れと彼れと、目早く見てとり、己れが方に在る貝と合はせて、

れよりも、いか程狭き所にて、門と門との間を縮めて立つれば、この遊びを爲すを得べし。
さて、演者の棒を持ちて、毬を打ちあてんとする時は、多少體を伏しめにせざるを得ざれども、なるべくは、身體を餘りに屈めずして爲すやうに、習慣つくべし。殊に、他の演す間、これを傍觀つゝ待つほどは、能く姿勢を眞直になしをること肝要なり。
すべて、ローンテニス、クロツケー、追羽根、毬つき等は、みな、腕の力を増進する點に於て、大いに益あるものなれば、體育上、極めて宜き遊嬉なり。さればこそ、場所も、なるべくは、廣くして、彼方此方と走り廻るに便する時は、亦、足の働きをも助くるが爲によしとはいふなれ。

合ひたるは取り、取り損ねたるには罰あり。この並べかた、うのがみは、中々むづかしき方則ありて、取り方等も、極めて、禮儀正しきものなりしがごとし。これも、歌がるたの如く、各一人づつにても、亦、左右と多人數の方分けても取りて、うが勝敗を争ふことも、亦、歌がるたに類似のものなり。
貝おほひの貝は、極めて麗はしき裝飾したるもあり。亦、内部には、繪を認めたるもあり。これを入る貝桶、亦甚だ美麗高雅なるものにて、女

此遊戯に二様の方法あり。則ち、第一法は、各人個々に他人を敵として競ふにあり。第二法は、總遊戯者(四人以上なる時)共同なる敵味方に分れ、其組の球の悉く循環し終るに、其遅速を争ふなり。而して、孰れの方法を取るも、可成一人の判者を置きて戲場を整理するを可とす。
各人の出演すべき最初の順序を定め、第二法に於ける組分をなし、遊戯の當否を視察し、競技の勝敗を定め、争ひの起るに際して、之れを裁決し、各球の門を通過する毎に記票を掛け進む等は判者の責任なり。(若し判者を缺く時は適宜是等の處置をなすべし)。
第一法 各演者は、過失ある毎に他人と交代し、標柱の色の順序に循環して行はんが爲めに、先づ其取るべき色を定め

子が室内の装置には、缺くべからざるものとして、用ひられし時代もありきかし。故に、貝桶の紐の結びかたなども、禮法の家々によりて、各一定の法ありしなりけり。

二十二 針打

針打とは、先づ、木綿のくけ針に、白赤等の色を分けて、絹糸、各三、三四筋づつをどほし、其さきは長く総のやうにして切り揃ふ。總糸の長さ、大抵、二寸ばかりなり。斯くて、半紙やうの紙、銘に、一帖づつなり、二帖づつなりと数を定めて持ち出だし置き、

次で其色の球と槌とを取るべし。

各演者は、起程標より槌柄の長さ丈なる距離に、其球を置き、先づ、第一門に向ひて、之れを打ち、幸に通過すれば、又直ちに第二門に向ひて打ち、順次進みて、若し過つに至らば、續きて打つことを止め、以て再び己れの順番の來るを待ち、斯くの如くして、第一番に全門を通過し、起程標に歸着したるを最優とす。但し、第一法に關する諸規則は、其組の仲間を助くる事の外、第二法に掲ぐるものに同じ。

第二法 此法に於ては、各組一人宛、迭に一色を問したる色の球及び槌を取るべし。例へば、甲組は、青(1)、黄(3)、赤(5)、白(7)、を取り、乙組は、桃(2)、樺(4)、綠(6)、黒(8)を取るべし。乃ち此各色を標柱の色に照合して、其順序に一人宛出演するも

先づ、この遊嬉を始めんとする時、其各自持ちたる紙の中より、三枚づつとり、四枚づつとりを出だし、拾人ならば、紙數四十枚と重ね置き、源平と組分けたらば、白總の針五人、赤總の針五人一組とし、一人づつならば、一人づつに打つなり。針を紙に打ちて、刺されたる程の紙をとり、我が得分とす。打ちかたは、先づ、針の尖を前齒にくはへ、總糸の所を、右の人指と拇指とにてつまみ、ねらひを定めて、重ねたる紙の上に打ち當つるなり。其針を引き上げ

のとす。

第二法に於て演者の目的とする所は、第一自己の球をして、門を通過せしめ、第二敵方の球を打ち飛ばして其進行を妨げ(以上二處置は、第一法にも適用す)第三味方の球を助けて、其進行を速むる等にあり。今左に此遊戯の規則を擧ぐべし。演者は、敵味方を問はず、他人の球を打つことを得(例外は後に記す)而して、其當りたる時は、己れの球を運びて、他の球に接觸せしめ置き、下の三様の所置を撰行することを得。(第一)一足を己れの球の上に置き、己れの球を打ちたる力を他の球に傳へて、之れを隨意の方向に打ち飛ばすべし。(これ敵球に對するの策)然れども、若し過ちて己れの球を足より外すか、或は、他の球の位置變らざる時は、再び己れの球を

る時は、うつと、總糸の端をつまみ、静かに引き上げるものとす。是時、少しにても、針に指を障ふるは、針をして、紙に深く刺し込むかの疑ひあるを以て、罰あり。この遊嬉は、専ら、やゝ年かざる女兒の物するを常とす。うは、針を取扱ふなれば、自づから危険を避けて、幼き者には、既ばしめざりしなるべし。彈菜、まゝこたて 等も、みな、勝者は、敗者の石を取るなれども、其れは、遊具の物のみにて、取りもし取らるゝなればよし。これは他の物

打つことを得ず。第二、打ちたる球を、其位置に残さんと欲すれば、これ敵味方に對して、共に施さるべき策。唯、之れを動かす丈、己れの球を軽く接し置きて、己れの球のみを打ち放つべし。然れども、若し、此時、他人の球の位置を變へたる時は、最早次撃をなすことを得ず。第三、打ちたる球、打られたる球を兩個共に同方に打ち送ることを得。但し、此場合にありては、次撃をなすことを得ず。然れども、若し己れの球、當路の門を通過したる時は、定規に従ひて、尙一度打つことを得。これ専ら味方の球に對するの策、即ち、相助けて、進行を計るにあり。而も、此處置は、一球必ず當路の門を通過すべき心算あるにあらざれば、取らざるを可とす。何となれば、過ちて己れの球當路の門を通過せざりし時、次撃をなすことを

を賭けてすなれば、みやびならずとして、やむごと無き方にては、既ばしめざりしなるといふ事物に見たり。

二十三 枕拍子

歌謠に合はせて既びしは、徳川氏以降のことなりしやうなり。されどこの種の遊びは、早くより行はれたるなりけん。と覺ゆ。其故は、つげの小枕など、歌にも詠みしは、最もふるき時代の事にて、其枕といふは、即ち、木片を長方形に切りたるものにて、大抵これを枕に用ひ、上流の人は、うれに、絹帛をも纏ひ、又は

得ざればなり。故に、先づ、味方の球を打ち飛ばして、當路の門を通過せしめ、然る後ち、續きて己れの球を通過せしむる方安全なるが如し。

敵の爲めに打ち飛ばされたる球は、其行きたる位置に止め置き、更に順番の來るを俟ちて處置すべく、又甲球乙球を打ち、乙球轉じて丙球を打ち、由て以て丙球の位置を變へたる時の如き、乙球は固より定規に従ひて處置せらるべきも、丙球は直ちに元在りし位置に復さざる可らず。而して、これをなすは判者の任なり。

演者は、其過たざる以上引續きて、數個の球を打つことを得。然れども、己れの球をして、其次の門を通過せしめざる場合に於ては、同順番中、再び同一の球を打つことを得ず。

袋やうのものをも製して覆ひ用ひたるが如し。然るに、余等が幼き程、祖母なる人の、長方形の木片のふるびたるを持ち出で、「こは、わが母刀自の翫ばれし、枕拍子の具なり。我れも、幼け無き時習ひつれば、教へまぬらせんかと云はれたる、其時代を考ふれば、今より、百有餘年前には、大いに、江戸市中などに、流行せし遊嬉なりけんと思ゆ。但し、前述のごとく、枕といふ名を負はせたる、木片を見れば、俗にいふ小枕といふもの（布片にて、つくり

未だ第一門を通過せざる球は、他の球を打つことを得ず。又他より打たるることなし。蓋し、球をして、未だ第一門を通過せしめざる演者は、未だ遊戯の件中に入らざる者と認む。故に、第一門を通過せしむる時、若し過ちたる者は、其球を取り上げ以て再び己れの順番の到るを待つべし。

一門を通過せしめしものは、尙一度打つとを得。一撃にして二門を連通すれば、續きてまた二度打つことを得べく、他人の球を打ちたる時も亦同じく二度打つを得べし。即ち、他の球を打ち飛ばしたる後、尙一度打つことを得。之れを解釋すれば、演者は、一度己れの球を適宜の場所に打ち送るを得。而して、己に一度打ちたる球は死にたるものとし。たゞ當路の一門を通過し得たる時、則ち始めて蘇生せるものとす。故に、

尙一度打ち進むを得。之れに同じく、一撃二門を通過すれば則ち一度死して一生を得たるものとす。故に、尙二度打ち進むを得るなり。

演者其順番中球を打つことを止めざるを得ざる場合に到れば、當路の門を通過するか、或は他球に打ち當てたる場合の外、其球は直ちに其位置に止めらるるなり。

演者は、己れの球を打つに門又は他の球に向つてせずして、場所の或部分に之れをなすことを得。

往路にありて、己に回歸標に最も近き門を通過したる球は、一度回歸標に打ち當つべし。然れども、其附着して止まりたる時は、再び順番の到るまでは其球を打つことを得ず。又其打は算入せず。故に、次回には、之れを打ち離し置き、更に其

たる小き袋)を附けぬ、全くの木枕を使用せし頃よりのものとし覺ゆれば、其始めの時はいつと知り難きなり。さて、この枕拍子の翫びかたは、場所は、板縁等をよしとす。人は、兩々相對して各々、兩個の枕木を、左右の手に持ち出で、双方より二個づつ、即ち四個を對坐せる中央に、真直に積むなり。枕木の大きさは、大抵、堅、金尺六寸位、直徑、三寸五六分方形のものとし、四隅は、面とり持ちよきやうによく削りたるものなり。斯くて、これ

をなすには、先づ、兩人にて、定めたる歌を誦ひ、其節につれて、枕木を翫び、或ひは、自己の左右の手に持ちたる、枕と枕とを打ち合はせ、又は、上さまに抛げ上げて受け、板敷に拍子とりて打ち當て、あるひは、對ひたる人と人との枕を打ち合はせ、なげ交はして、取り換へなごすなり。然れども、まことは、別に、今一人ありて、琴を弾き、歌を誦ひて、兩々相翫ぶ枕木の拍子に合はするものなりとす。而して、三味線の流行、やうく盛りになりては、地を彈

次の順番に於て、打ち當て、然る後始めて歸路に就くことを得。往路にありて、己に回歸標に最も近き門を通過したる球は歸路再び其門を出づる迄は、他の球に打たるることあるも、他の球を打つこと能はず。乃ち其球は睡眠の姿として存せらる。循環を終りたる演者(球の起程標より回歸標に至りて、再び起程標に最も近き門を通過したる者)は、起程標を打ちて遊戯を退くか、或は適意の間標柱を打つことを止めて、漂泊者となることを得べく而して「ローヴァール」は、其順番中總ての球を打つことを得るが故に、其味方に屢々大なる裨益を與ふることあり。循環を終りたる演者は、己れの球を打つに己れの槌を以て

くに、琴を用ふることを廢して、三味線にかふることをなれりと傳ふ。げに、左もあるべし。其歌の調子の極めて緩く優なる、決して、三味線より出でたるものにはあらずして、琴より出でたるを證するに足るべし。今爰に、枕拍子に用ひたる歌をあげて例せんぞす。

三日月は、其れを見る間に
入間野の、尾花が招きとめ
たやら、まんざら左様じゃ
あるまいけれど、あのむら
雲が恨みジャエ。合ちよつ
と假りたや風の手を、

すると又他の球に打たれたるとに拘らず、一度起程標に當りたる時は、遊戯の仲間より退かざる可らず。他の球を打ちたる球は、之れを死球と稱し、其打ちたる球を打ち飛ばさざる間は、正しき遊戯中の球と見做さず。即ち手中にあるものとす。されば、己れの球は門を通過すと雖も打ちたる球を打ち飛ばさん爲に歸らざるを得ず。故に、門を通過せしものと見做さず。之れに同じく、若し己れの球にて他の球を打ち、爲めに己れの球跳ね返りて、標柱を打つも、これ球を打てりといふべくして、標柱を打てりといふ可らず。然れども、己れの球にて、同時に二個の球を打ちたる時、或は、甲より或は乙より先づ打ち飛ばすは隨意なり。球は、打たるべくして押さる可らず。即ち、其音を聞き得べ

この歌を以て想像する時は、
 こは餘りにふるき調子とは覺
 えず、大抵、元祿年中頃のも
 のなるべしと思はるゝなり。
 これ必ず、枕拍子の今めき進
 歩したる後の作なるべし。
 斯くの如く、枕拍子の歌詠は
 やはり今様體のものなれば、
 何にても、適宜の歌をとりて
 手づけはせられたるならん。
 坐して振ふものなれば、十分
 なる身體の運動には適せざる
 べきも、手腕の運動には、隨
 分に可なるべきものなりと覺
 ゆかし。

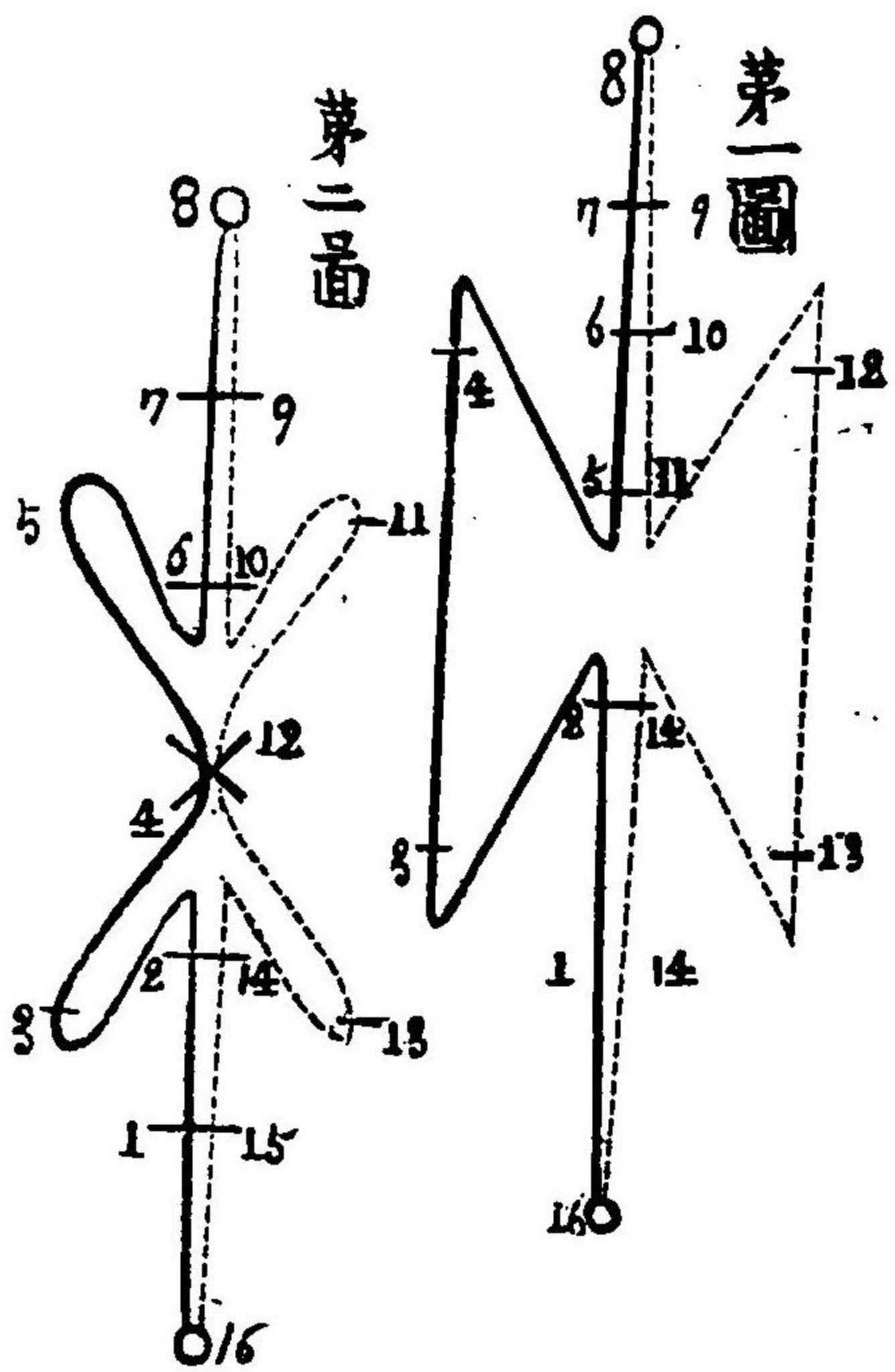
二十四 唐扇

扇を翫びて、遊嬉の具とせ
 しははやくよりのことなり。
 幼き小供を遊ばしめんが爲に
 扇の骨と骨との間に、細き棒
 を突きさして、くるくると廻
 はし試みたるなどの事、物に
 見たり。今も小兒をあやす
 として、能くなすことなり。
 然るに、何時の世よりか、唐
 扇の遊びといふこと出来ぬ。
 即ち、名のごとく、もとはは、
 唐土の遊嬉の我が國に傳はり
 來しなりと云ふ。左もあるべ
 しと覺ゆれば、ふるくよりの
 事なるべけれど、能く其方法
 を傳へ、何某の殿にて、誰く

きを可とす。然れども、槌の頭を地上に置きて不意に之れを
 進むるは妨げなし。又球を打つには、槌頭の表面を以てすべ
 し。決して、其側面或は柄等を以てすべからず。

打ちたる球の門下に止りたる時、其通否を判定せんには判
 者其門の上部より之れに接して、槌柄を垂下し試むべし。球
 若し槌柄に觸るれば、其球は通過せしものと認定す。(或法に
 は通過したるや否や
 によりて通否を決す)

此遊戯の名稱は(Croquet)(佛)にして「クロケット」にあ
 らず「コロケット」にあらず、又彼の「クリケット」(Cricket)
 なる遊戯とは、大に異り。人、往々惑ふことあるにより、
 茲に一言す。蓋し、「クロケット」なる語は、物相當りて憂
 々音あるの意義を有せり。

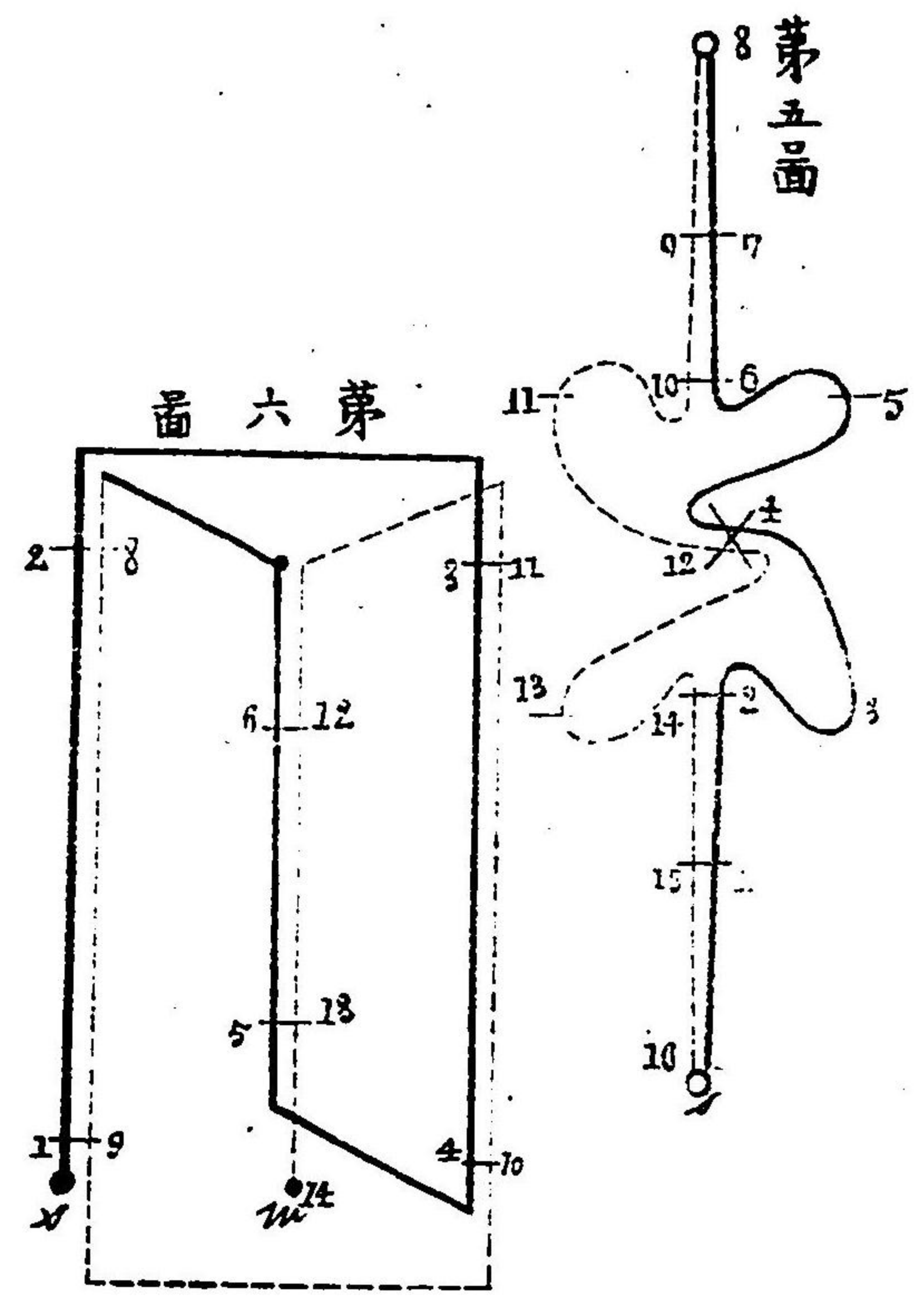
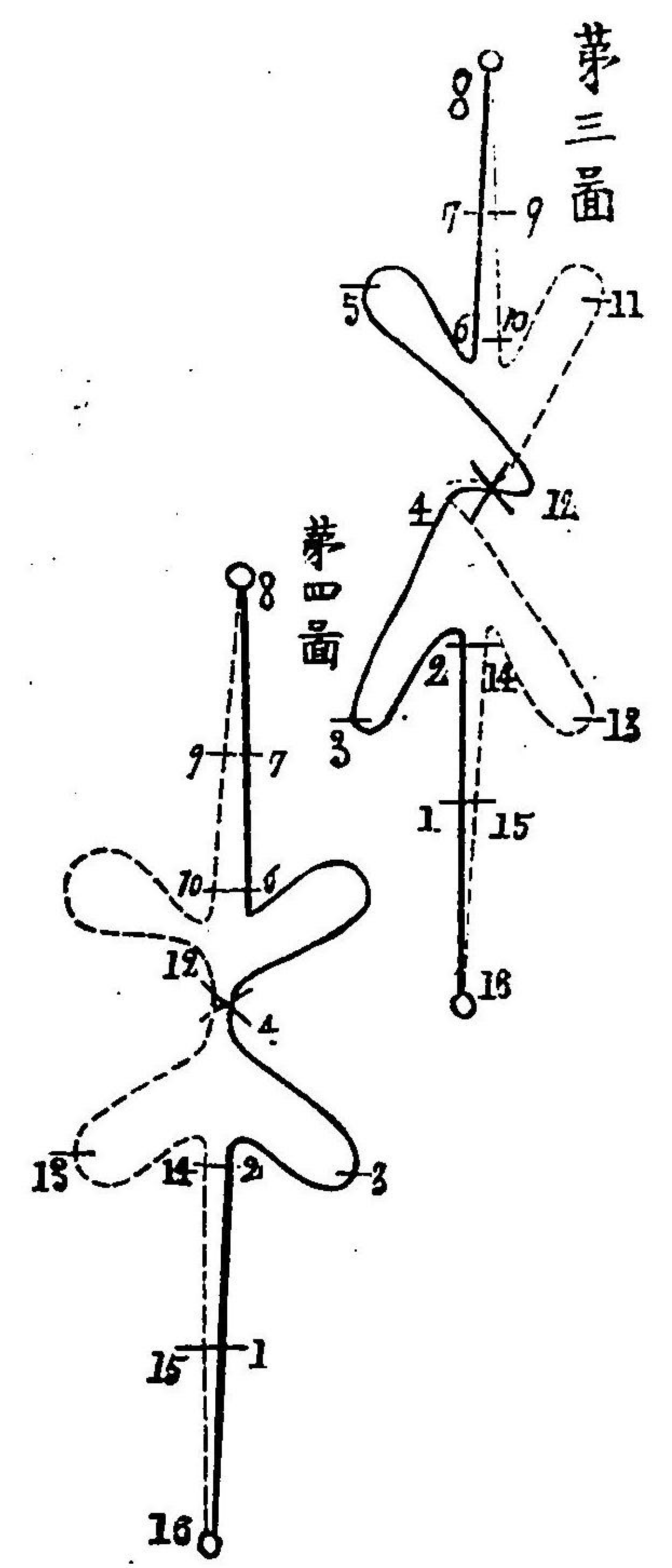


遊嬉之棊

が遊びしなど、明らかに傳はれるは、徳川氏以降の事なり。この遊びは、専ら、中等以上の女子が室内の遊嬉として、行はれたりしものなり。さて、唐扇の具は、先づ、普通の扇子一個（親骨も、平骨ならぬ、普通の骨なるを可とす）銀杏の葉がたなる、厚紙に帛片を張りたる、其莖やうの所の下には、大抵貳錢銅貨程の重みと大きさを要する、小さき丸き臺を附く、これも、帛片にて張る、其銀杏の葉形の左右のつまには、小さき鈴を附く。總體の大きさ

は、堅、金尺三寸五分位、横五寸位のものなり。これを納むる小箱は、大方桐製なるを普通とす。箱の高さは、堅八寸位、横直径四寸位、方形のものなり。これ、被せ蓋の如く製したり。外に、源氏五十四帖の圖一枚となり（圖の説明は別記す）。其技を行ふ時は、銀杏葉を、箱の上に据う。斯くして、これを爲す人は、三人なり、五人なり、番を定めて、互み代りに、扇を飛ばして、この銀杏葉を打つなり。距離は、大抵疊を横に、三疊許り隔てた

戸外遊嬉



るを普通とし、打つ人の態度は、先づ、左の手を確乎と、左の膝の傍に突き、身體をまっすぐにして坐し、少し、體を伏せめにし、右の手は、あふむけて、四つの指をさき、りつと扇をうけ、母指のさきにて、要の所、其のさきを持ち、ねらひを定めて、軽く、箱上の銀杏葉を打つなり。斯くて、規則の通りに打ち當つれば、幾度にも打つことを得。はづるれば、順次、他の人へ扇を渡して代る／＼打つなり。さて、定めたる度數充つれば、兼ねて數取り置きたる印につ

○輪取り

豫め地上に若干数の輪を各適應の距離に圓狀に排置し、戲件は皆其外周に並び立つなり。但し、輪の數は人數よりも一個丈少きを要す。さて、音樂に連れ歩みて、輪の並べる外周を環りつゝある程、突然音樂の停止する(音樂は時に長く時に短く、或は急或は緩演者其何時停止するかを計り難き様に奏すべし)と共に直ちに止りて、各自一個の輪を取らんことを努む。然れども、必ず、一人輪を取り得ざる者あり。而して、此者は即ち其罰として列外に出ださるゝなり。但し、其退く時一個の輪を持ち去る。斯くの如く續いて同じ法を反覆すれば、人數及び輪の數共

きて、勝敗を定む。この規則といふは、源氏五十四帖の圖につきて云ふなり。この圖はたゞば、桐壺といふ圖は、桐の葉の落ちたる形とし、それを何點と定む。かくて、銀杏葉と扇との落ちやうにて、其圖の形ちに適ひたれば、これは、桐壺なりとして、何點を演者に附すといふやうなる趣考なり。而して、點の最も多きをよしとし、其高點は、例之ば、銀杏葉の鈴の、打ちたる扇の骨に挟まり、葉は、箱の中途にかゝり、扇は、面白き位置を取りて、箱の上に

に減じて、終に一個の輪を二人にて相争ふに至らん。而して、其勝ち得たる者を最優とすなり。

されど、又列生を番號の順序によりて、隔一に奇偶(或は紅白)の二組に分ち、其中にて何れの一方、他よりも先きに、或一定數例へば、五人の列外者を出し、方を負けとするか、或は、又双方共に三人の列外者を出し、より以後は常に他の一方よりも二人多きに至らざれば、負けとせざるの法によりて、之れを行ふこともあるなり。

○柱環り

柱環りは、一種の音樂調和的共同運動法にして、女子の遊戯には最も適當なるべく、且つ、其出來上り甚だ美觀を呈するが故に、頗る興味を感じるものなり。(此遊戯法は、素と西洋

とまるるなど、殊更に、手を以て作りても、容易になし難きやうの形ちの、打ちやうによりて、自然に出来るなどは、極めてよき形ちとして、最高點に定め、かねて、何と源氏名を附して、圖にあらわれあるなり。斯くて、判者は此圖をひろげて、演者の打つ毎に、圖を照らし合はせて、桐壺、帚木、空蟬、夕顔、とやうに呼ぶを、筆者、片端より記してもてゆくなり。これは、其演者、打つ毎に立ちて扇子を取り、次坐の人にまはすこともあれども、正しくすれば、

の「メイポール、ダンス」五月柱の舞蹈なるものを想像して、小野泉太郎氏の新たに案じ出だせるものなり。戯件は、凡う十六人とす。但し、之れを増減するも差支なしと雖も、其全数は必ず偶数ならざる可らず。今、假りに十六人として、此遊戯を説明すべし。

例へば、先づ、高さ凡三間、直徑凡三寸以上なる圓木柱を樹て、又、其頂上には、直徑凡一尺なる厚き圓板を戴かしめ、又此圓板の周圍より、紅白の布、其幅凡五寸長さ通例柱と等しきものを、兩色各八本宛相並べて垂るべく装置す。布を掛くるには、左の二法の一を選むべし。

第一法、紅白隔一にす。即ち、紅一、白一、紅一、白一等相並ぶ。第二法、紅白相分つ。即ち、紅八、白八、平分に相並ぶ。

ぶ。

次に、戯件、柱を中心として、圓形に相向ひて整列す。而して、各人は、豫め己れの番號を知り居るべし。次ぎに、音楽に連れ、皆前みて、順次各一本の布の端を取り、次に一齊に舊位に退歩すると同時に、左の二法の一によりて側面す。

矢どりの如く、扇子どりの役、別に在りて、打ちたる扇子を拾ひて、順く、演者にまはすことなり。これも、大方、右腕の動きと、視力との用に供するのみなれども、女子が室内の遊嬉としては、随分に面白かるべし。己れ、幼なかりし程は、この唐扇の具は、わが家にもありて、をりくりに、大人なる人の試みられし、中に交りて、邪魔したる事もありしが、今は絶えて見ず成りぬ。

二十五 扇合せ

扇合せには、數種あり。先

戸外遊嬉

(甲) 奇数の者偶数の者相互に反對に側面す。例へば、一番三番等は左向し、二番四番等は右向す。即ち、一番と二番、三番と四番相向ひ、二番と三番、四番と五番相背す。

(乙) 全員半分づつ、同方に側面して、他の一半と反對に向く。例へば、一番より八番までは右向し、九番よ

づ其一種は、題を定め、歌を詠じ、左右に方わけて、白き扇面に記し、判者に批判の詞を請ひて、これに記さしめ、左右の詠み人居ながれて、其歌を批評せしむるもの、扇合せの名を負ふすれども、こは、もと、歌合せの巻に記すべきを、扇に代へたるなれば、歌の遊びに屬すべきものなり。
又一種は、これも、歌合せのごとく、先づ、左右に、偶數に人員を分けて、扇に、種々の新意匠を凝らしたる繪を、あがしめ、定日に、集會の序

り十六番までは左向す。即ち、相隣れる一番と十六番は相向ひ、八番と九番は相背す。

(甲)何れの方法を取れるも、布は常に圓の外側に當る方の手に持つべし。

次に新なる音楽と共に、各自其方向に可及的大圓形に行進す。(速度は稍早き方を可とす)其法、例へば奇數の者は、先づ、外方に、次に内方に、偶數の者は、先づ内方に、次に外方に、兩者相避けつゝ、柱の周圍を環る。而して、其外側に避くる際には、臂を伸して、高く上げ、内側に避くる際には、之れを前に下ぐ。

注意 行進中、頭及び上體は正直に保つべく、且臂を伸して、布は常に張り居らざる可らず。

斯くの如くすれば、柱は漸々布にて編み包まる。其結果左の如し。

- (1) 布を第一法に掛けて、(甲)の側面法を爲したる時は、第一圖の如く、
- (2) 布を第一法に掛けて、(乙)の側面法を爲したる時は、第二圖の如く、
- (3) 布を第二法に掛けて、(甲)の側面法を爲したる時は、第三圖の如く、
- (4) 布を第二法に掛けて、(乙)の側面法を爲したる時は、又第一圖の如し。

適當の時に達すれば、音楽運動共に停止すると同時に、皆己れの方角を轉じ手を替へて布を持ち、新なる音楽と共に奇

に持ち出で、最も、斯道に老練なる人を請じて判者となしこの繪の意匠より、筆づかひ其他に至るまで、善惡巧拙を判断せしめ、勝かたは、負かたの扇子みなを取りて、更に勝かたよりは、負かたにても、一個につきて勝ちたる扇子を與ふるなり。この扇にゑがくは、勿論、自ら爲すをよしとすれども、我れは、圖案者となりて、他の繪畫師にゑがうすることもありて、こは、歌とは、大いに、其趣きを異にせり。但し、これも、歌合せと均しく、まことは、繪合せ

せに属すべきものなり。今一種の扇合せは、これぞまことに、扇合せの真相とも云ふべきものなれども、これは、餘り多く行はれしを聞かず、こは、恰かも、いにしへの、薰物合せに、いみじき名香を集めて、其内より、最もよきものを選び取り用ひたるが如く、扇の製作に新意匠を求めたりしなり。さて、この扇合せの志かたは、やはり、繪やうを選びしと同様に、左右に分けて、種々の扇子を集め、其意匠と、實地とに就きて、判者に巧拙を定めしめ

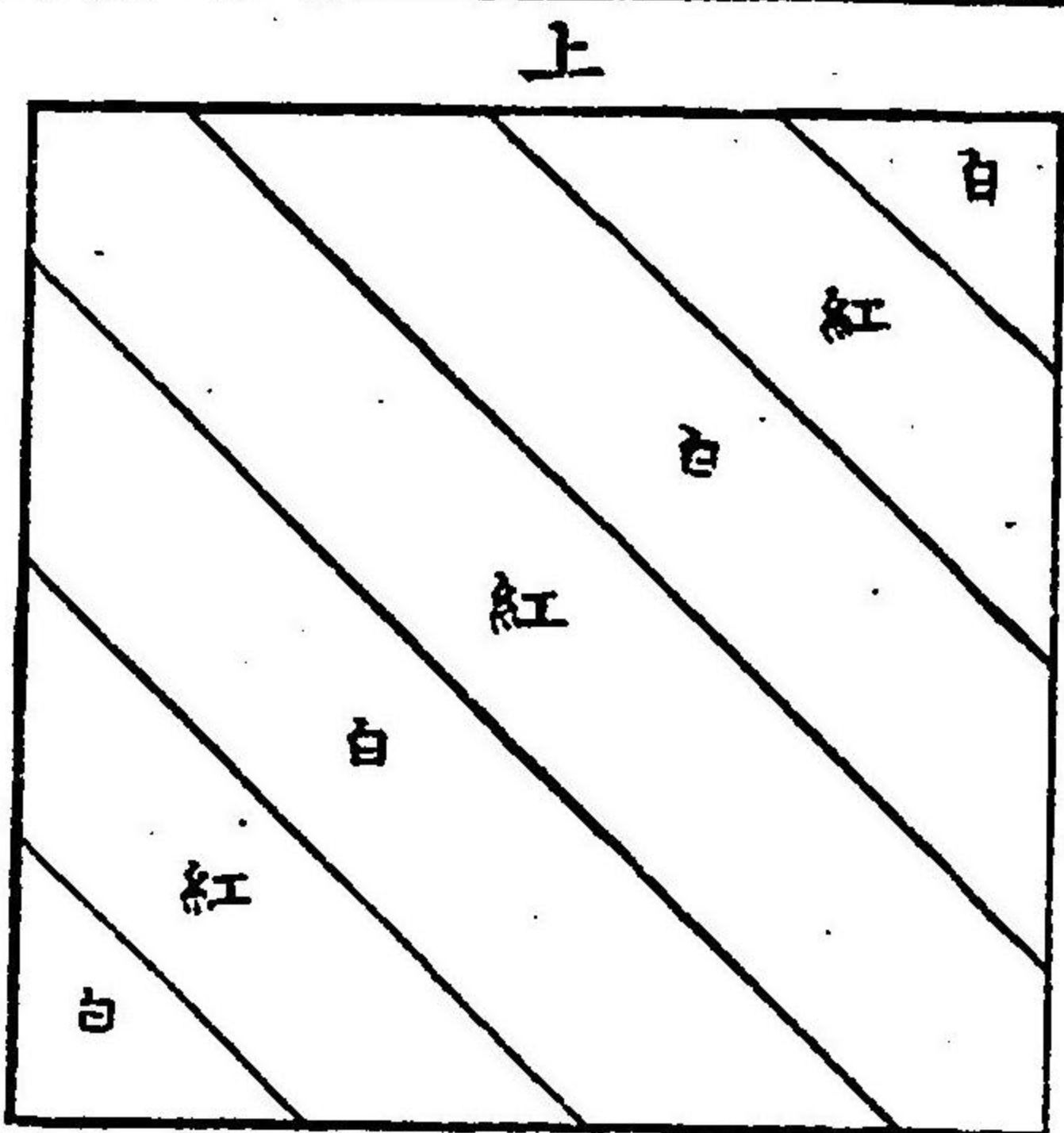
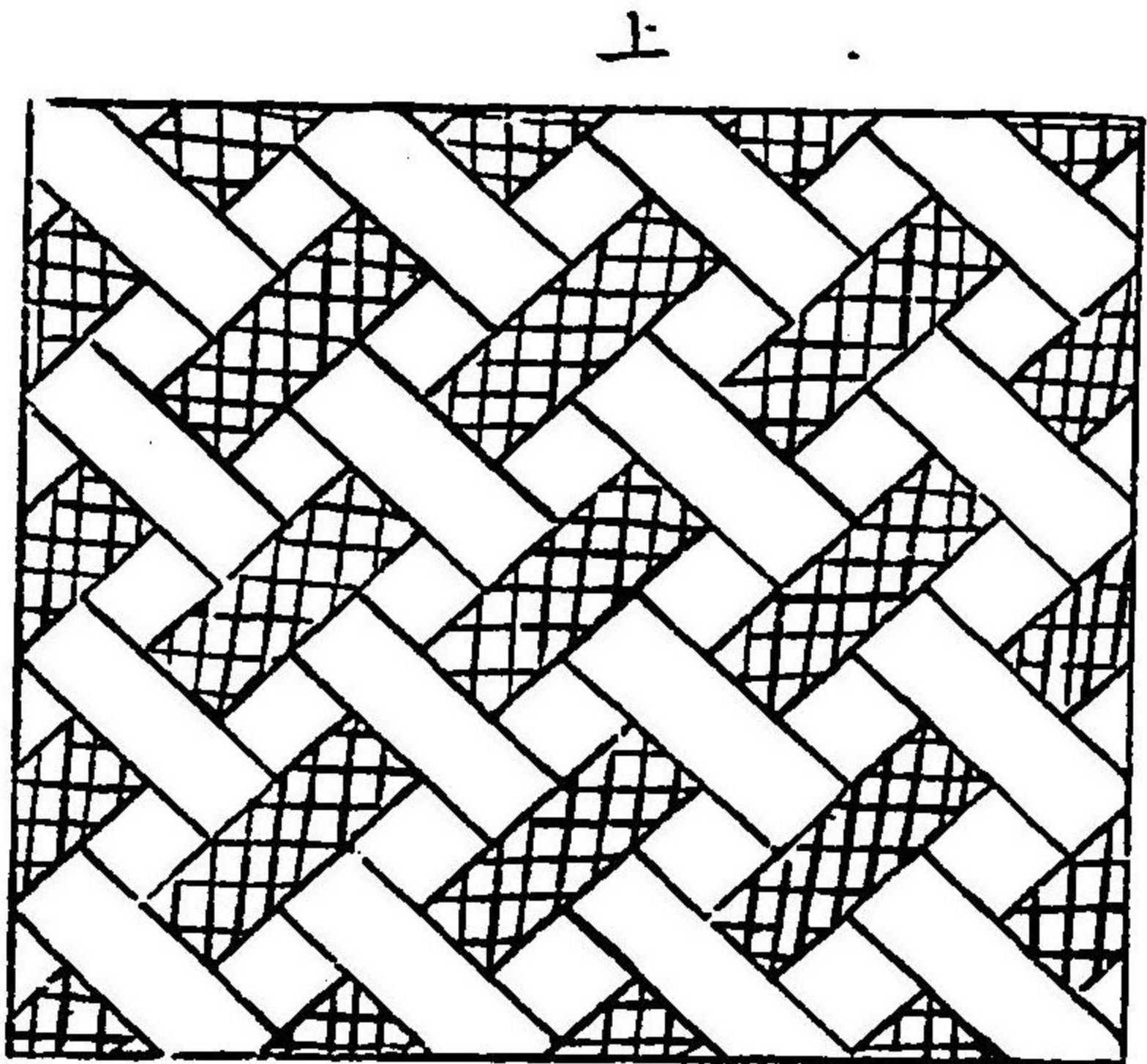
数の者は、先づ内方に偶数の者は、先づ外方に避けつゝ前と同法に前めば、編みたる布は自ら解くるなり。斯くの如くして編みたる布、全く解け終れば、音楽運動共に停止し、更に音楽の合圖によりて、皆同時に布を放つ。

柱の形を方形にし、或は其高さより太さを増減し、或は布の長さより幅を伸縮するが如きは、固より不可なし。布の紅白を黄緑其他に更へ、或は各色の敷を不同にし、或は其並べ方を種々に變へて行ふ事を得。布の色の種類を増し、随ひて其並べ方をも益多様にすれば、以て、猶幾多の編み方を見ることを得ん。

音楽は、進行曲中適意のものを選ひて可なり。

以上述べたる所は、此遊戯法の大要なり。若し、夫れ布の敷

しなるべし。即ち、骨は、煤竹、青竹、又はさまざまの種類の竹、象牙、塗骨もあるべく、蒔繪、透彫、浮彫もあるべし。絹、紙も、亦、これに準じて、白紙、色紙、金銀砂子、無地、泥引等、或ひは、要に蝶鳥を附し、總を装置しなど、こころづくに調じ出で、其意匠と技術とをや争ひけん。これら、みな合はせて、扇合せの名を附されたるなり。因に記す。扇子に物好を凝らしたるは、藤氏隆盛時代のことにて、武家専制時代より以後は、大いに其跡無



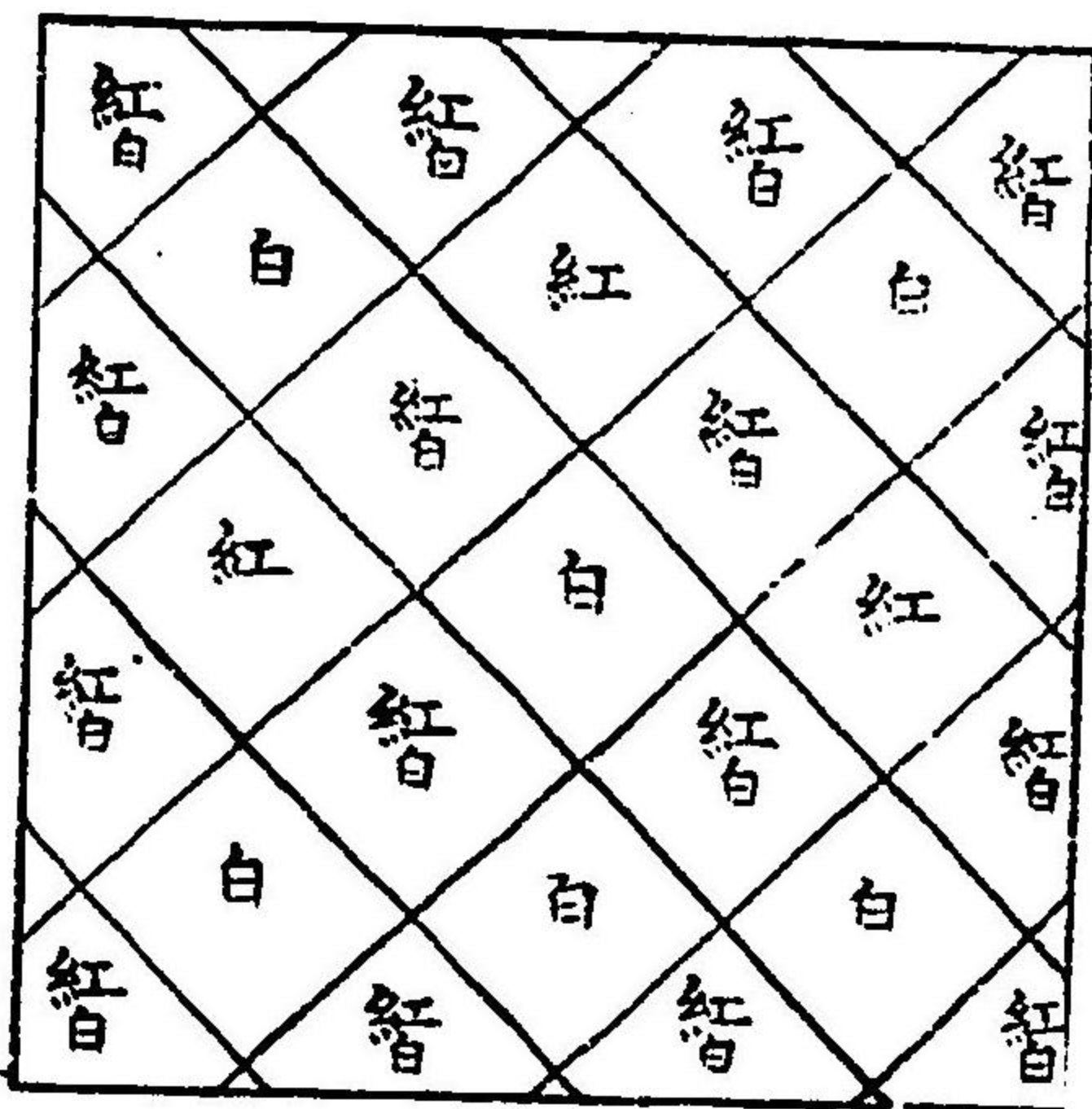
遊嬉之乘

くなりたり。徳川氏驕奢時代と云ひける頃だに、扇子の物好き、構造は、遙かにりのかみよりも劣れりしを覺ゆ。然るに、近來、泰西の風俗輸入し來たりしより此方、また、扇子の物好きは大いに進めるも奇なり。其大ききも、いにしへのは、殊に大きなりしが、爾後漸次に小さく成りもて來しを、彼の、女子が西洋服装に用ふる扇子の大きなる、殆ど、上れる代のもの均しく成りにたる、時の變遷は、幾廻轉して、更に、もとへ戻

れるやうのことあるこゝいどをかしくも、怪しきものにはあれ。木製の扇、絹張の扇、またみを上れる世の風にして、近世には却りて稀に見るところと成りしを、現今また、泰西の俗を追ふて、更にこれらの製作多く成りぬ。要の所につくる紐も未かこりあれ。殆ど、上代の遺風とも云ふべきさまの、更に、西洋風とかはりて、入りもて來つゝ、漸く其かたに變りゆくめり。色形の配合等も、わが古代なるは自然に出で

戶外遊嬉

第三圖 紅白紅白三分



○梯子登り

梯子登り、又梯子鬼ともいふ。この遊嬉は、先づ、砂上に長く梯子の形を畫し、其中央の所、左右に外へ、半月形を畫し、これに、鬼と定めたる二人を立たしめ、衆多の子は、一人づ

く、其梯子を走りて過ぐるなるが、其過ぐる時、鬼は左右より手を伸ばして、走り過ぐる子を捕らへんとすなり。斯くして、捕らへられたる子は、鬼となり、捕らへたる鬼は子となる。若し、捕らへ得ざる時は、何時までも、鬼たらざるべからず。其梯子の長さは、大抵四五間にして、其幅は、左右より手を伸ばして、やうく、中央を走り過ぐる人の捕らへらる程なるを度とす。而して、左右の鬼は、半月形の輪の外へは、一歩も出だすことをゆるさず。若し、この規則に違ふ時は、たとへ子を捕らへ得るも反則として、退けらるるなり。

○富士見西行

この遊嬉は、先づ、五人なり、七人なりある人數の中にて、一

と妙に、彼れが今様なるは
學理に出で、美なり。これ
將た、相互比ぶれば、同一
理なるが面白き事なる。

二十六 繪合せ

繪合せは、彼の藤氏隆盛時
代男女を通じて、専ら上流社
會に行はれし遊嬉なり。

これは、歌合せのごとく
自ら繪畫をものして、他と優
劣を競ひしこともあれども、
多くは、我れも繪がき人にも
繪がよせて、勝敗をくらべし
事多きに似たり。この遊嬉は、
ことに、美術的のものなるが
ゆゑに、りの繪やうの麗しく

めでたからんことを欲して、
其技をきうひしのみならず、
これを入るゝ箱、これをつゝ
も絹帛よりはじめて、其装置
は云ふまでも無く、りれを持
ち、出でしむる女の童の衣装
など、折から所からに似合は
しく、且つ其新奇美麗をきう
ひしと、すべて、歌合せの時に
記したるが如く、殊に最も其
艶を凝らしたるなり。これは、
りの繪合せの奉行に選まるゝ
人、最も斯道に堪能にして、
且つ美術の意匠亦優れたらん
ことを要す。何となれば、新
古の繪畫を、左右と組み

人を西行法師と定め、他は、みな五分間ばかり、他所へ避け、
更にもとの所へ立ち歸り來て、甲の人より、斯くのごとく問
ひかくるなり。

西行さんく、今日は富士に雲がかかりましたか。

西行と成り居る人答へて、

左様、少しかかりました。

問

何方の方へかかりました。

答

南面の風、晴、一部曇

の如く答ふる時は、問ひをかけたる甲の人は、その答へによ
りて、考へ、どちらの方に雲はあるべしと押しあつるなり。

て、この西行は、先づ始めにみなの方へ行きたる後にて、
手早く兼ねて、砂の中に置きたる富士形の紙の上に、木の葉
を置き、其上へ更に砂をたほひ置くなり。而して、其答へは偽
りは云ふべからずと雖ども、なるべく、問ひ手にわからぬや
うに答ふべし。但し、これは、多少氣象の事を心得置かざれば
わからず。そは、日々の新聞につきて、天氣豫報を知り置く時
は、大抵、氣節によりて、何月位には、何方の風なれば、何の方角
より雲起りはじめむべしと云ふこと、豫めわかるなり。而して、
西行は、時としては、今日は夕立なれば、方角定まらずなど
云ふ時は、問ひ手は、種々に詞を設けて、西行の詞を釣り出
だし、其詞のもやうによりて、推測を下だす事なり。この、砂
中の木の葉は雲に擬したるものなり。

合はせて、其優劣をさだめ争うはしむるなれば、其繪の筆力の價大抵兩々相對して、餘りに、大差無からしむべきは云ふまでも無く、其圖がらより其裝飾の具より、なにもく、すべて、優美高尚ならんことをつとむ。うのかみ、上流の婦人には、繪畫書法に巧みなる人少なからざりしかば、男子も、また深く女子の妙手なるなどには、心づかひして、いたく意匠を凝らし、筆力を健ならしめんとつとめたることなど多かりしなり。されば、畫の巧拙を論じたる

○蟲選み

蟲選みの遊嬉は、先づ一群の人、花園、芝生などに出で、一人を、蟲選みの使者と定め、他は、銘々に好みの蟲となる。たとへば、甲は鈴蟲、乙は松蟲、丙はきりくす、丁は轡蟲、などく定め置き、さて、これは使者に知らせず。使者は、手拭にて眼をかくして、待ち居る時、よし、といふ合圖に連れて、少し隔たりたる艸村に、リンくく、チンチロリン、ガチャくく、などく、蟲の音に似せて鳴き居る邊りに行き、其聲に耳を傾け聞くなり。もとより、蟲となりたる者は、なるべく、平素の聲色と違ふやうに、作り聲して鳴き居るなり。而して、使者側によりて、耳を傾けると同時に、みな鳴きやむなり。使者、更に今一度鳴けよと云ふ時、三聲

は云ふまでも無く、其圖につくるべき事柄の如何をさへに評論して、善惡を争ひけらし。「大宮人はいと問あれや」と諷せられし頃、餘りに、文藻詞花に耽りて實學を忘れたるは、口惜しき限りなれど、また一方より云へば、斯くの如く、上流の人の、文學美術に熱中したる結果は、たしかに斯道の進歩を促したるや疑ひをいれず。

○鳥買

この遊びは、重に、芝生、砂地等の廣場にてなすをつねとすなれども、時としては、室内にてもなすことあるなり。先づ、總人數の中より、鳥の買手一人と、鳥屋の主人一人とを定め置き、主人にあたりたる人、餘の人數に、鶯、雲雀、白鶉、など、其他何にても適宜の鳥の名をつけ、自分の左右に立たせ置くなり。さて、鳥買は、鳥屋の用意よきを見て、

二十七 物語合せ

物語合せも、繪合せなどの遊嬉に似たるものなり。これは、ある物語の全部を擧げて持ち

出で、合はせ争ふこともあれども、先づ大抵は、好みの物語の中より、更に一部分をぬきて、手跡うるはしき人をして、其文章を書かしめ、其繪も、圖がら面白くして、名ある畫師に畫がくしめなご、極めて、ごまぐの心ばへを加ふるとなり、さて、其れに用ふる紙の質より、(絹地等をも用ふるは勿論のこと)あるひは、巻に製せしめ、帖に調せしめ、紫檀、黒檀、黒柿、又は、蒔繪、彫刻等、いろくの意匠を凝らしたる、臺に載せなごして、設けの席に持ち出づると、すべて、繪

主人の前に立ち、良き鳥を買ひたきむねを述べ。主人、鳥買の客を引きて、鳥と號けたる人の前に立たしめ、これは、鶯これは、雲雀など、一々に指點す。客、其聲を聞かんことを所望すれば、主人鳥に命じて、鳴けく と云ふ。其時、鶯は、ほうほけきやうくと鳴く眞似をなし、雲雀は、ちいちくくと鳴く眞似をなす。客は、彼れか是れかど選みて、つひに、自分の好みの鳥の名を云ふ。主人これを聞きて、籠を取り出だす時、過ちて鳥を逃したる状をなし、其鳥にあたれる人逃れ走ること、定めの場合を三回して、もとの鳥屋に歸るまで、客捕らふること能はざれば更に鳥買となりて、また他の鳥を買はんとすなり。若し幸ひに捕らへ得れば、其捕らへられたる人、更に鳥の買手となる

なり。(但しこの場合は、始めに畫して範圍を限り置くものとす)。

○競馬遊び

合せの時にかはると無し。斯くて、判者は、其物語の趣向、文章、文字の書きやう、散らしやう、及び、繪やうの善悪巧拙等を考へ定めて、批判の詞を下だすとすなり。其物語の巻は、たとへば、源氏物語の花の宴に、榮花物語の月の宴を比ぶる類ひのごとし。其詞を抜きたる類ひを云へば、

一番 左 源氏物語朝顔

の巻
暗う成りたる程なれど、にび色の儿帳のすきかけあはれに、追風なまめかしく吹きまほし、けはひあらまほ

競馬遊びは、まことの競馬にはあらず。たゞ競馬に擬して競走するものなり。其志かたは、先づ、八人の員數なれば、四人は馬となり、四人は乗手となる。馬は走り、乗手は馬となりたる人の、帯又は、袴の後ろ紐を兩手にて、まつかりと捉へて、同じ場所より、一二三のかけ聲とくもに走り行きて、定めめの所に達すべし。一人にて走るなれば、容易けれども、二人相連なりて走る故に、中々意の如く走られぬなり。斯くて、其勝敗は競馬の如く、第一番、第二番、第三番、第四番と到着順をつくべし。随分に運動になりて、年少者にはよき遊び

し。すのこはかたはらいたければ、南のひさしに入れば奉る。宣司たいめんして御消息聞ゆ。今更にわかしくしき心地するみすの前かな。神さびにける年月のらう數へられはへるに、今は内外もゆるさせたまひけんぞう頼み侍りけるとて、あかすおほしたり。ありし世はみな夢になして、今なんさめてはかなきにやと思ひたまへ定めがたくはへるに、らうなごはしづかにや定めきこえさすべうはべらんときこえ出だしたまへり。げに

この遊び、運動會など云ひて、晴やかにす時には、銘、赤、白、青、黄等の色分けしたる襷などもかくるなり。また、源平と二つに分けて、各々、三組づつとか、四組づつとかして、紅白の襷のみ用ふることもあるなり。かやうの時には、襷と同じ色の旗をつくり置きて、到着順に其色の旗をふるなり。(男兒は、まことの馬しても、競走すべけれども、普通、男兒として、この遊嬉を試みんとする。時は、俗に肩車といふもの、即ち馬になる人の肩に乗り、其頭部を兩手にてさぐり、馬になりたる人は、其乗手の兩足を確乎と捉へて走るなり。)

○籠の鳥

こり定めがたき世なれど、はかなき事につきてもおぼしつかけらる。人知れず、神のゆるしを、待ちし間に、こらつれなき、世を過すかな。今は何のいさめにかたせたまはんとすらん。なべて世に煩はしきことさへはべりし後、さまざまに思ひ給へあつめしかな。いかでかたはしをだにぞ、あながちに聞給ふ。御よういなごも、昔よりも、今ますこしなまめかしきけさへうひ給ひにけり。さるはいといたう

籠の鳥は、先十人なり、十五人なりの中より、兩人を撰び、之を鳥と定む。場所の中央に、立たせ置き、掛りの人は、其周圍に立ち廻りて、手と手を組み合はせつと、居るなり。偕、其鳥の周圍を、一列に廻りながら、籠の鳥へ出るなら出て見やれ。といひながら、烈しく廻ること、三四回にして、急に立止まるを度として、中の鳥になり居る人、兩方の手を合せ、眞直に、延ばして、其列の何方にても、然るべしと思ふ處の、人と人との間に、突き入る。其時突き入れられたる人、敏捷に體と體とを密接せしめて、其手を突き入れられざる時は、鳥なる人は更に元の場所に歸りて、初めの若く廻轉の止るを待つなり。かくして、雙手の都合よく、人と人との間に、突き入

過し給へど、御くらぬのほ
 ぎにはあはせぬり。
 まてよの、哀ばかりを、
 とふからに、ちかひして
 とく、神やいさめん。
 とあれば、あな心う。うのよ
 のつみは、みなしなどの風
 にたぐへてきとの給ふあい
 ぎやうもこよなし。見う
 ぎを神はいか侍りけん
 ぎ、はかなきことをきこゆ
 るもまめやかにいとかたは
 らいたし。よづかぬ御あり
 さまは、とし月にうへても
 物ふかくのみひきいり給ひ
 て、えきこえたまはぬをみ

れらるゝ時は、其人は、左右に開きて、籠の鳥を外に出すなり。
 而して、其間を開けられたる人は、代り々々に、鳥となりて、
 中央に立ち、元の若くして、幾回も走廻り遊ぶなり。之れは、
 格別趣味ある遊びならねど、芝生などにて、行ふ時は、運動
 になりて、良きものなり。

○蛇行進

蛇行進は、元纒昇りと名づけたる、遊戯より、出来るものな
 るべし。これは、まづ、人数三十人あるときは、十五人づつ一
 組として、両方にわけたき、(運動會などの時は、赤白の襟を
 かけて、左右に分く)平らなる砂地の場所に、中二間程明け
 て、篠竹を浪形に二列に立つること、長さ大凡そ七八間より、
 十間迄とし、(篠竹の長さは、人の長げより、稍長きを良しと

奉りなやめる、すきくし
 きやうになりぬるをなご、
 あさはかならずうちなげき
 てたち給ふに、よはひのつ
 もりにはあもなくこうなる
 わざ成けれ。よにあらぬや
 つれをいまずとだにきこえ
 さすべくやはもてなし給ひ
 けるとて、出給ふなごり所
 せきまで例のきこわあへ
 り。おほかたの空もおかし
 き程に木の葉の音をひにつ
 けてもすぎに物物の哀より
 かへしつゝ、うのをりく、
 おかしくも哀にもふかく見
 て給ひし御心ばへなども思

す)分れたる二列は、各帯の結び目、或は袴の後の處を、兩
 手にて、確乎と捕へ、一、二、三の合圖と共に、一勢に走りて、
 浪形なる篠竹の間を、走り行くなり。扱、前面の定め、の場處
 に、早く達したる者を、勝者と定む。此進行に、最注意を要す
 べきは、其繋がりたる、人と人との間の、切れぬ様にすること
 となり。一人の人、過つて一度手を放つ時は、勢倒れざるを
 得ず。而して、更に起直りて、先者に逐及ばんとする間には、
 必一方の列の爲に、先を越さるべし。故に手の放れざる様に、
 注意すべきなり。

○花の競争

花の競争は、先、蛇行進の若く、あるたけの人数を左右に分
 ち置き、場所には、其達すべき距離の處に、細き篠竹の、長

ひいて聞えさす。心やましくてたち出給ひぬるは、ましてねがめがちにおぼしつゞけらる。とくみかうしまおらせ給ひて、朝霧をなかめ給ふ。かれたる花ももの中にあさかほの、これかにはひまつはれて、あるかなきかにさきて匂ひもことにかはれるをらせ給ひて、奉れ給ふ。けさやかなりし御もてなしに、人わろきこころ侍りて、うしろでもいとどいか御らんじけんとねたくされど。

みしをりの、露わすられぬ、朝顔の、花の盛り

大凡う一二尺なるを立て置き、其傍に、こより二本づつを備へ置くべし。扱、左右に分れたる人数は、兼て用意し置きたる花の枝を、合圖に連れて手に持ち、この花は何にても良し。假令ば、春ならば、梅、櫻、山吹、躑躅の枝、秋ならば、女郎花、桔梗、藤袴、菊杯、何にても、其季節の花を、適宜に得らるべし。而して、左右は、色或は花の種類を分けて、一目判然と分る様になし置くべし。かくて、一列の人は、劣らじ負けじと走り進みて、前面に立ちたる篠竹に、わが持ちたる花の枝を立てつゝ、こよりにて、一ヶ處を括り、倒れぬ様に爲し置き、更に元の位置迄走り歸るなり。或はまた、更に合圖に連れて、前面まで走りゆき、其花の枝を取りて、元の如く走り歸ることをもなすなり。是れは、普通の走り競ど、同様な

は、過やまぬらん
とし頃のつもりも哀とばかりはさりともおぼしきるらんやとなん、かつはなききこへ給へり。おとなび給へる御ふみの心ばへに、おぼつかなからんもみまらぬやうにやとおぼし、人とも御すなりとりまかなひてきこゆれば、

れ共、花の枝を添ふる故に、多少の趣味を生ずるものなり。

○庭作り

秋はてゝ霧のまがきにむすぼくれあるかなきかにうつるあさかほ
につかはしき御よろほひにつけても露けく、そのみあるは、なにのおかしきふしもなきを、いかなるにかお

此遊戯は、元幼稚園にて、幼児に砂の山を作らしめたるより、工夫したるものなり。こは極めて、趣味多くして、且衛生に可なれば、年少の女子が、弄ぶに適當なるのみならず、大人なる人も試みて可なり。

之れは先、箱庭に用ふる薄平たき箱、又は砂鉢様の物に、土を入れて、自ら山水の形を作り、小さき木草を植え或は泉水を掘り、橋を架し、茅屋を造り、又は田の面の形状を寫して、稗播きをなし、芥人形を配置するも可なるべし。斯して、段々上手になる時は、秘藏の幅中なる、各種名家の山水を摸して種

きがたく御らんずめり。あをにびの紙のをよびかなるすみづきはまもふおしくみゆめり。

右狭衣

藤の志なひ

少年の春は惜しめども、とまらぬものなりければ、やよひの廿日あまりにも成りぬ。御前のこぢちなにど無く、あをみわたりて、をぐらき中に、中島の藤は、松にそのみおもはず、咲きかゝりて、やま子規待ちがほなるに、池のみぎはの八重山吹は、井出のわたりに

くの面白き景色を作るを得べし。殊に夏期など、小さき秋草を植ゑ、細かき木を集めて、深林原野の状を形成り、うれに、水を宜き程に灑ぎて、床に据ゑ、又は暖爐の前に据ゑ置くなど、最も趣味ありて、面白きものなり。殊に之れを造らんとすれば、假初の漫歩にも、木の萌芽、草の根など、自ら堀り取りて、培養し置かんのも出で来て、傍へは植物學の助けともなり、且衛生の爲にも、此上なき利益を得ること多し。

なほこの外にも、女子も、いと間ある毎には、植物の培養に心を寄せて、庭園ある邸ならば云ふまでも無く、市街の住居にても、盆栽の植物を培ふは、頗る、智育、體育の上にも裨益少なからずして、且つ、少しもてあつかひ馴るれば、存外に、趣味多きを感じるものなり。腦力を使ふ人、及び、婢僕を

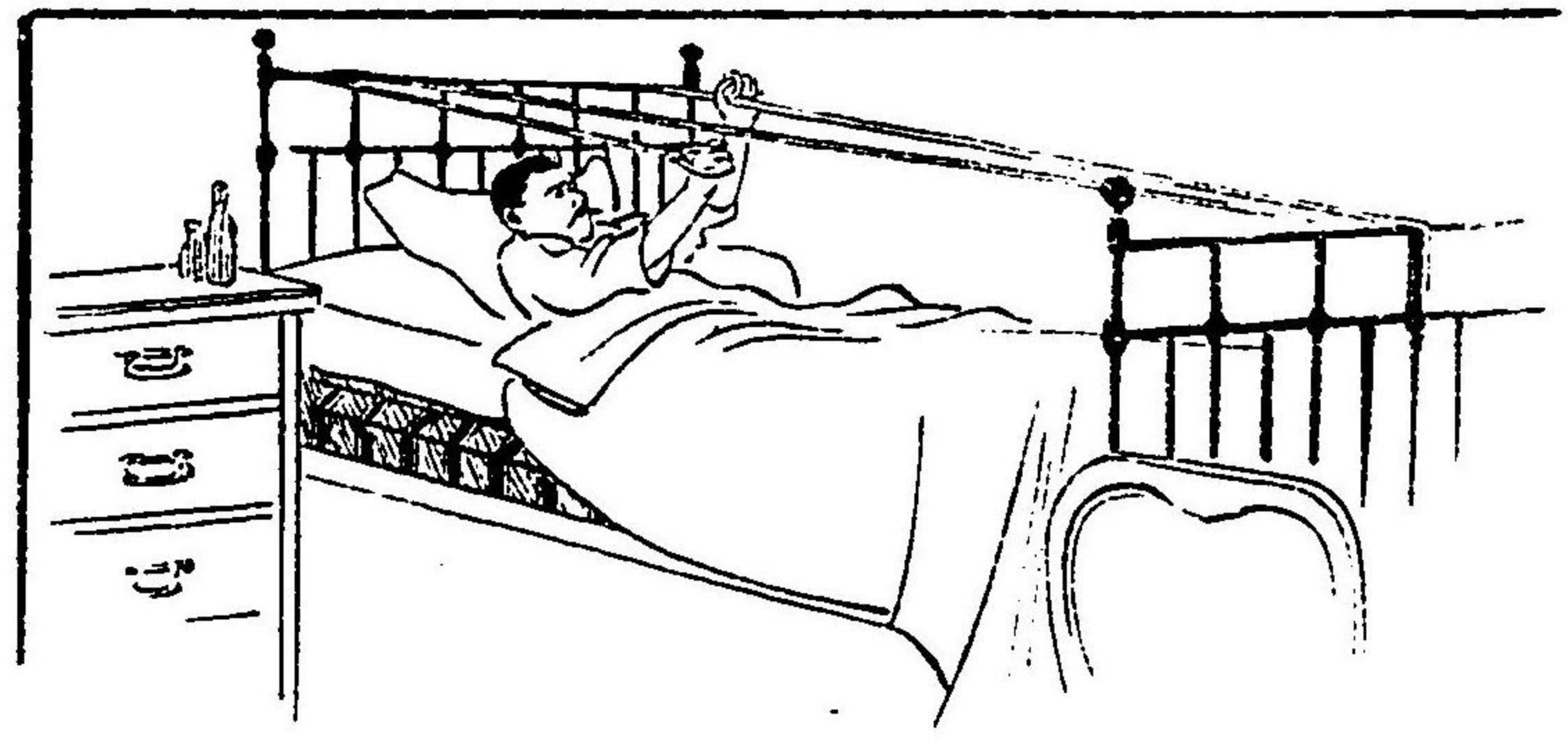
許多召し使ふ人などに取りては、勉めて、かやうの事に意を用ふべきなり。

三 室内遊嬉

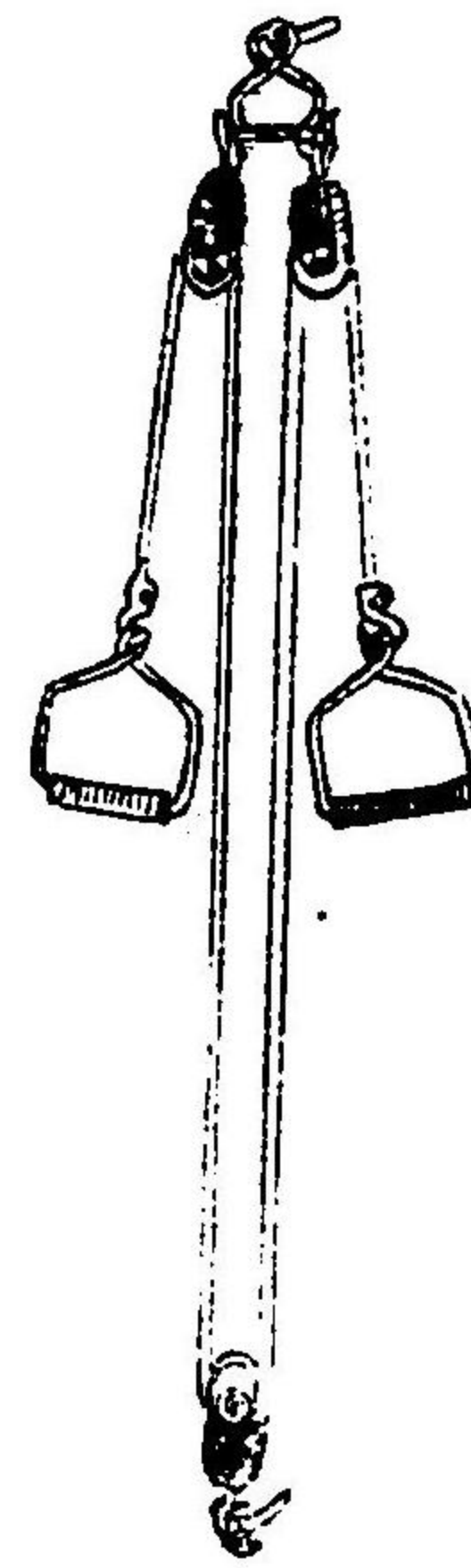
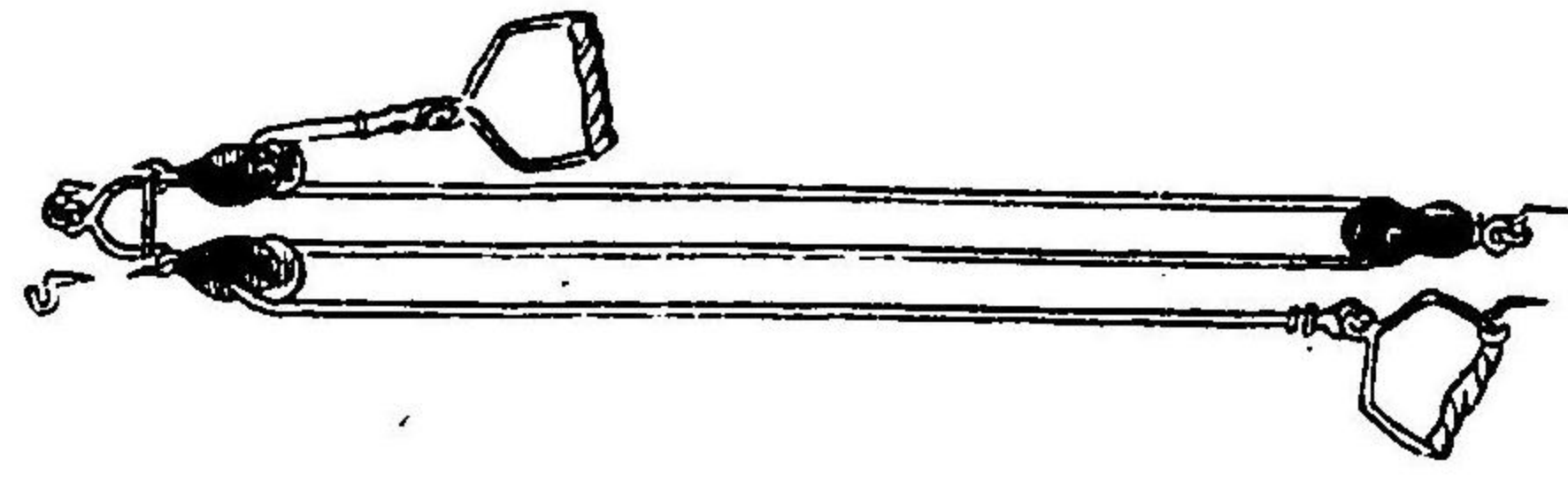
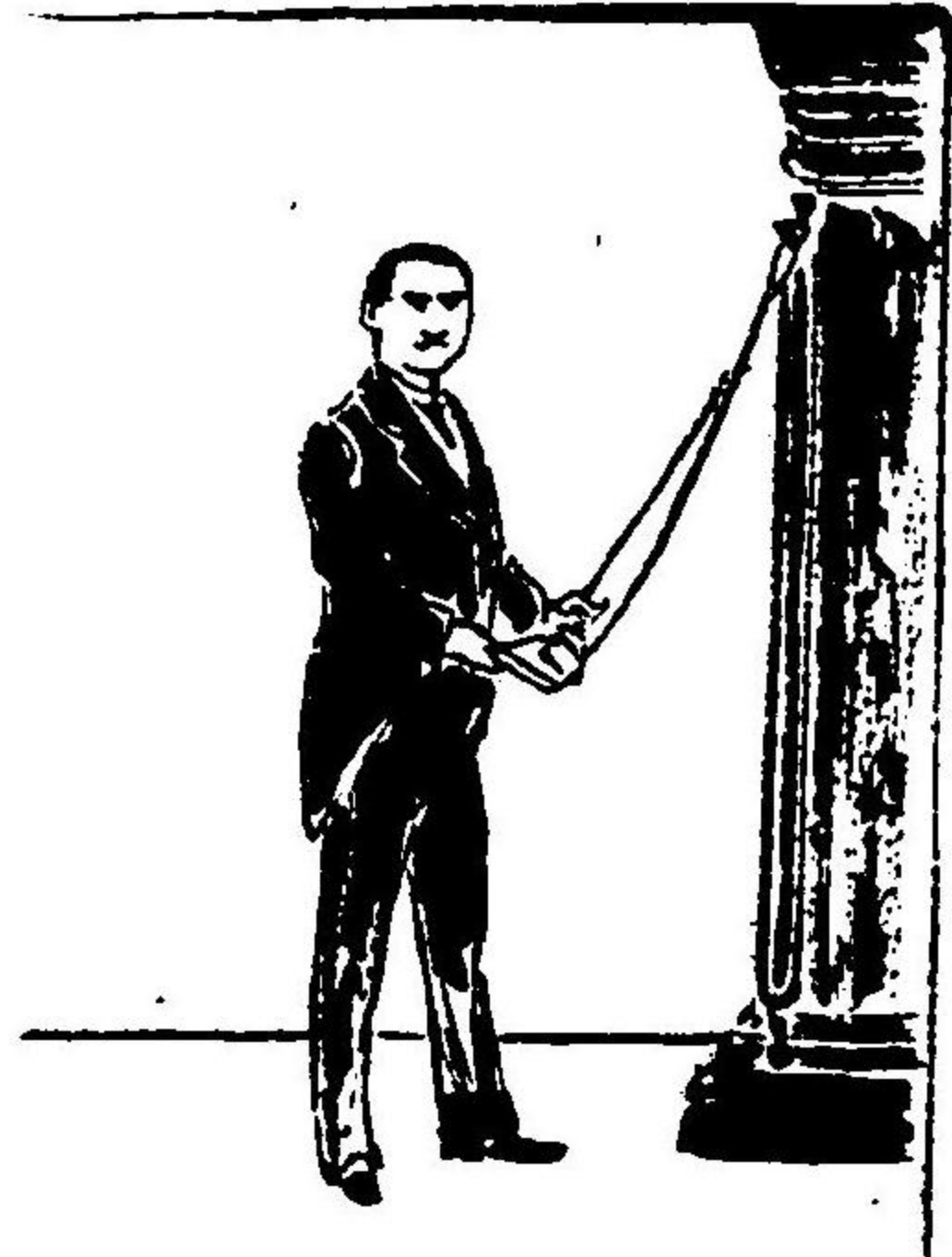
○フウ井トリー 體操

フウ井トリー 體操機械の構造は、上下三個の滑車、即ち、まろくながき護謨製の紐、手柄、及び上下の子ヂを有する鈎より成り、上部に在る二個の滑車は自由なる轉鑲を附しめられども、これに反して、下部の滑車は動かさず。こは、紐の縫を防がん、がためなり。護謨製の紐は長さ一定せず。その緊張力の強弱も種々あれば、それは體操者に適當するものをもとむるを良とす。此ひもは下部の滑車よりはとまりて、並列して上昇し、

ことならず、見わたさるゝ夕ばえのをかしさを、ひと見たまふも飽かぬば、さぶらひわらはのをかしげなるして、一枝折らせたまひて、源氏の宮の御かたにもてまわられたまへれば、御前に、中納言、中將などやうの人々、さぶらはせたまひて、宮は、手習ひ書などをかきすさびて、添ひふさせたまへるに、うの花の夕ばえこりつねよりもをかしくはべれ。東宮の、さかりにはかならず見せよとのたまはするものをとて打ち置きたまふ



上部に至り左右の滑車の上をへて、猶紐にあまりあれば、下降して、その末端は、手柄につらなれり。手柄は、五角形をなし、手に握る所は、自由に動くべき、なめらかなる木を附す。この器械にもちひたる金は鐵なれば、時々轉鑲に油をうくがされは、軋音はげしくして、自然器械を損すべし。此器械を据



を、宮少し起きあがりて見
おこせたまへる御まみつら
つきなごのうつくしさ、花
のほひ、藤のまなひにも、
こよ無く増さりて見えたま
ふを、例の胸ふたがり増さ
りて、つくづくまぼられ
たまふに、花こう花のど
り分き給ひて、山吹を手ま
さぐりしたまへる御手つき
のいとちもてはやされて、
世に知らずうつくしげなる
を、ひとめも知らず、わが身
に引き添へまほしくおぼさ
るゝづいといみじきや。
二番

つくるには、まづ如何なる方向に對しても、障害物なき床あ
る室内をゑらむべし。ことに、空氣の流通よき窓にむかひて、
體操をなす時は、一層こちよきものなれば、從て運動も活
潑になす事を得るなり。前にも記しごとく、此器械には
上下二個の子ヂあれば、いづれの場所へも、持ち行く事を得。
上部の子ヂは、體操者の身長に依りて高く、あるひは低くな
すものなり。下部の子ヂは、床よりおよそ二寸上、又は直ち
に、床に附着するもさまたげなし。この體操器械は、たえず腦
髓をつかふものにおいては、もつとも必要なるものとす。又
病者にも利用するを得るなり。寢臺の種々なる部分に便宜
に従ひ、また醫師の命ずるまくに、滑車を附してのち、これ
を使用せしむるべし。體力弱き病者の爲に、輕き器械をもえ

左 更科日記

清見が關、鳴海の浦
清見が關は片つかた海ある
に、關屋などもあまたあり
て、海までくきぬきしたり。
烟あふにやあらん。清見が
關の波も高くなりぬべし。
おもしろきこと限り無し。
田子の浦は波高くて。船に
て清ぎめぐる。沼尻といふ
ところも、するくと過ぎ
て、大井川といふ波あり。
水の世のつねならず、すり
になどを濃くして流したら
んやうに、白き水はやく流
れたり。いみじく煩ひ出で

らむ事を得るなり。まづ、この體操をなす時にあたりて、最も
注意すべき事は、いかなる方向に運動する時も、此器よりは
なるゝ事六尺以上なるべからず。然らざれば、器械を損する
のみならず、身體大につかれて、全體を終ふるまでには、た
へがたきにいたらん。之に反し、體操者に適當なる距離にて、
程よく運動すれば、欠乏したる血液を補ひ、明白なる思想と
新奇なる觀念を生ずる、他の器械をもちふる比にあらざる
なり。此體操の方法は種々あれども、今こゝには、其一二を
あぐべし。
第一背を體操器械にむけて演習するなり。體操者は、まづ姿
勢を正しうし、兩手柄を握りて腕を下方より上方にあげ、水
平にし、またもとの位置に歸りし時に呼吸すべし。この演習

遠江にかゝる。小夜の中山など、越えけんほどもおぼえず。いみじく苦しければ、天龍といふ川のつらに、假屋つくりまうけたりければ、其所にて日頃過ぐるほどにぞ、やうくおこたる。冬深く成りたれば、河風はげしく吹き上げて、堪へがたくおぼえけり。うの渡りしつゝ濱名の橋につきたり。濱名の橋下りし時は、黒木をわたしたりし、このたびは跡だに見えねば、船にてわたる。入江に渡し

によりて運動する部分は、二頭筋胸部及び双肩の前面なりとす。

第二兩腕を頭上にあげ、前方にて水平になして、一回呼吸し、のちもとの位置に歸る。運動部分は、兩手、前腕、胸部及び腹部の筋肉なりとす。此外、體操器に面するもあり。また側面にたつもあり。手柄をあしにかけてなすもあり。かく多くの運動方法あれども、此主とする所は諸部の筋肉を發達せしむるにあり。此體操術は、時間と氣力とを多くもちひずして、充分なる運動をなし得らるゝを以て、他物にまされりとす。(こは、室内體操と名くべきものにて、遊嬉の中に入るゝは、いかにそや覺ゆれど、こも亦、自ら試み習ふ時は、一種の趣味を覺ゆるもの故、強ひて、室内遊嬉の一つに數へたるも體

橋なり。外海はいといみじくあらく、波たかくて、入江のいたづらなる洲ども、ともものも無く、松原のしげれる中より、波のよせかへるもいろくの玉のやうに見え、實に松の末より越ゆるやうに見えて、いみじくおもしろし。うれよりかみは井の鼻といふ坂の、えもいはずわびしきにのぼりぬれば、三河の國の高師の濱といふ。八ッ橋は名のみして、橋のかたも無く、何の見所もなし。二村山の中にまゐりたる夜、大きな柿の木

育に裨益ある遊びを、女子に勧めんとする、老婆心に外ならず)

○玉突

此遊嬉は、室内遊嬉の内にては、最活潑なる業にして、極めて運動に可なり。故に泰西にては、好みてある室内に、玉突臺を据え付け置き、夕食後などには、家内の老幼男女打交りて、此遊嬉をなすこと多し。勿論公共の玉突場に於て爲すは、大抵男子のみとす。然れ共、この遊嬉は、其器具に、多少の費用を要し、又其場所を多くとるものなれば、何人も覺え置きて、翫ひ得らるべしとも、おぼえね共、吾國にても、近來は、往々、玉突臺を据えおける家庭を見るに到りたれば、其仕方の概畧と、要なる器具とを示しおくべし。

の下に庵をつくりたれば、夜ひと夜庵の上に梯の落ちかゝりたるを、人拾ひなごす。宮地の山といふ所こゆるほど、十月晦日なるに、紅葉してさかりなり。嵐こり吹き来ざりければ、やち山までもみち葉の散らで残れる。三河と尾張となる、まかす、がの渡、げに思ひ煩ひぬべくをかし。尾張の國、鳴海の浦をすぐるに、夕汐たみ満ちにみちて、今宵宿からんも、ちゆうげんに沙みち來なば、こゝろへ過ぐれば、

玉突臺は、英語に「ビリアルド、テーブル」と云ふ。大きな物は、大抵、長さ十一「フジョート」九「インチ」、幅は五「フジョート」十一「インチ」半にして、高さ三「フジョート」と云ふなり。されど、室内に据うるものは、之れより、小形なるを普通とす、臺面は、滑かなる大理石をもて作り、其上を緑色の羅紗にて蔽ひ、臺縁は、弾力性のゴムにて作り、臺面と同じ羅紗にて、之れを包む。玉は、象牙にて作り、直径凡そ二「インチ」八分の一を普通のものとする。突棒は、長さ四「フジョート」七「インチ」より、五「フジョート」迄とす。重きは、十五「オンス」より、廿「オンス」迄の間を可とす。但女子の用ふるものは、なるべく軽きを選ぶべし。重きに過れば、手腕早く疲れて、衝突力の強弱を定むること克はずと雖ども、亦余りに軽きに過ぐれば、狙ひを過つ

あるかぎりはしりまごひすぞぬ。美濃の國なる境にすのまたといふわたりして、野上といふ所につきぬ。

右 いさよひ日記

箱根山、伊豆の海

廿八日伊豆の國府を出で、箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、玉くしげ箱根の山をいうげどもなほ明けがたき横雲の空足柄山は道遠しとて、箱根路にかゝるなりけり。ゆかしさよりのなれの雲をうば立てしよりになしぬ

ことあるものなれば、突棒の重き輕さは、各自腕力の強弱に従ひて選ぶを良しとす。突棒の先に付きたる皮を「タツプ」と云ふ。之れは玉を突く前に、折々用意の鑢にてこすり、白聖を其上に塗るは、玉の滑らぬ爲なり。姿勢は、尤正しきを良しとす。玉の突方は、普通右の手にて、突棒の本の處を持ち、左の手の甲の上に、棒の先を載せ、親指にて軽く棒を支へ、狙ひを定めて突く可し。突き玉と指との間は、凡そ六七「インチ」程離るべきよしとす。または、掌をふせて、棒の先は、中指と人指との間に通し、親指にて、軽く棒の上を支へて、突く法もあるなり。玉を突かんとするには、初めに能く狙ひを定め、扱眼は、當玉に注ぎて突き出すべし。扱、四ツ玉突とは、赤玉二ツと、白玉二ツとを用ふるものな

足柄の山

いとさかしき山をくだる。人の足もとがまりがたし。湯坂とがいふなる。こえはてたれどまた麓にはや川といふ川あり。まことにはやし。木のおほく流るゝをいかにとくへば、海人のしほ木を浦へいださんとして流すなりといふ。あづま路のゆさかをこえて見わたせばしほ木なる。早川の水湯坂より浦にいであ、日くれかゝるに、なほとまるべきところをほし。伊豆の大

り。白玉二ツは勝負を爲すものゝ、各自の持玉にして、乃突玉なるものなり。この二ツの玉を區別し易からしむる爲に、一ツの白玉の兩端の黒點を付す。故に之れを假りに黒玉といふ。先初めに、各自の持玉は、臺縁の中央より、凡う五寸程の處におき、其前方五寸許の處に、わが玉二ツを置き、扱後わが持玉を、敵の持玉なる白玉にあて、夫より他の赤玉の一ツに當つるなり。突初めの時は、わが玉より、白玉にあつることを得ず、且三回までは、白玉に當らざる時は、突直すことを得るなり。

四玉の勝負點數は、通例六十三點より百點とす。されど、突人の巧拙により、其點數を増減することも不可なし。其點の取り方は、白玉と赤玉とに當つれば、二點、赤玉二ツに當

島まで、見わたさるゝ海づらを、いづことへぞ、知りたる人も無し。海人の家のみぢある。

海人のすむりの里の名も、あら波のよするなごさにて宿やからまじ。

まりこ河といふ川をいそくらくてたどり渡る。こよひはさかほといふ所にさかまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

右の如く、左右のつがひは、大抵つきくしかるべきものを選び合はすること、なほ歌合せのごとし。而して、また

つれば、三點、白玉と赤玉二ツ、都合三ツの玉にあつれば、五點を得るなり。臺盤の外に、玉のうれて落つる時は、取りたる點數は、無効なるものとす。

狙ひを定むる時に、過ちて突玉を動かし、他の玉に觸しむれば、二度突直すことを得ず。

突棒を以て、二ツの玉を一時に推出すは、陸軍突といひて、無効なり。持玉を取違へて、突きたる時は、點數無効となるなり。

三ツ玉突は、赤玉一ツと、白玉二ツとをもてなすものなり。得點數は、只一點のみにして、赤玉より白玉にあつるも、白玉より赤玉に當つるも、同じく一點なり。三ツ玉突は、玉數少

なきゆゑに、玉離散し易くして、甚突き悪し。

この他「ブル」突、別種「ブル」突との仕方あり。又、英吉利風

時としては、殊更に、異種のものを含ませて、その優劣をあらうふこともあるなり。さて、その批判の詞は、大方先づ、作者の人物を評することもあり。或ひは、其物語の主意を云ひて、よしあしを論ずることもあり。且つその抜きでかゝげたる詞につきても、此所はをかしく、彼所はいかにうや覺ゆるなども記し、又は、その詞の文字の書きざま、散らしやうより始めて、書から筆づかひの如何は更にも云はず、うが軸、あるは、双紙の裝飾、それを納めたる

亞米利加風、佛蘭士風など、多少の相違もあれども、委しく説明すれば、中々紙敷を多く要するゆゑに、茲には先玉突の仕方の概畧と、其器具の畧圖とを擧ぐるに、止め置くべし。之れだけを覚え置きても、他にて爲す玉突を見て、其勝敗いかんを分りて、面白かるべし。尙自己の家に設けて、此遊嬉を爲さんと欲せば、宜しく、其道に巧みなる人にも學ぶべく、又玉突術等の書物に由りても、其委しきを知るべし。

なほ、玉突の遊嬉に似せて、木製の小さき球を、滑らかなる臺の上に置き、これを指さきにて弾きあつること、恰かも玉突の棒にて突くが如くして、勝敗を争ふこともあれども、こは、お弾きに類似のものにて、餘りに運動の爲などには益すること少なし。但し、これは、極めて、簡畧にて、誰れにても

容易なすを得べし。その臺は、平たき大盆をも代用するを得るなり。

○椅子とり

この遊嬉は、十人以上二十三人迄にて、爲すをよしとす。こは、輪どりの遊嬉に似たるものにて、まづ椅子を、其場の人數よりも、一つ少なく併べて、其周圍に皆立ちならひつゝあるなり。さて、それを始むる時は、一二三の調子をとりて、歩

き初むるなり。(ピアノ、オルガン等の樂器を用ふれば殊によし)斯して、間斷なく椅子の周圍を旋り居るに、調子をどる人、止まれと言ふや否や、直ちに、椅子に腰を掛るなり。(音樂あれば急に樂器を弾き止むなり)しかする時は、中にて、誰か一人は、椅子に腰を下し損ねて、さまよふものなり、其者

箱、載せたる臺などまでの心しらひをさへに云ひて、勝負をあげつらふことなり。是等は、最も高雅にして、且つ面白きありびなれども、うを批判する人は、ここに、博識有職の人たらざるべからざるなり。但し、この遊嬉の物に見えたるは、歌合等のごとく餘りに多からず。

二十八 調度の好み

天然に美術心の深かりける、吾が邦民は、いにしへより、調度什器の珍らかに麗はしきどもを愛し翫びつるは、また實に、古代よりの事なりしが

如し。近來、其道の人々が、古墳を探り、舊穴を穿ちて求め出でたる、各種の器物の中には、決して、衣食住の爲、已む無き實用に供したるならんとは思はれざる、玩具やうの物の、まかも、小兒の遊びとして、餘りに念の入り過ぎたりと覺ゆるものも、往々にして、見出づるを思へば、わが民は、早くより、調度を排べて、遊び楽しむやうの心深かりけんと思はるべし。然れども、單に、今の棚飾り、床飾りやうの物を製作せしめて、遊び楽しみしは、足利將

は、其場よりはぶき去らしむ。さて、一人づつ少なくなる度に、一つづつ、椅子を取のけ取りのけ、して、残り二人となりたる者の中、終りまで、椅子を取りえし者を以て、勝負となし、褒美を遺す仕組なり。

此の遊嬉は、勿論西洋風の室内に限る遊びなり。雨降りつゞきたる時など、戸外の遊戯出來難き時には、運動の一助となりて可なり。

この椅子とりを應用して、坐蒲團に代へ、恰も椅子のごくして、腰かくる代りに、急ぎ坐蒲團の上に坐するしかたもあるなり。然れども、疊の上にては、ほこり立ちて妙ならず、やはり、板敷のところか、又は芝生等にてなすをよしとす。

○歌がるた、詩がるた

軍以降のことにて、其前にも稀れには、之ありしならぬと、大方は、物を入る器、物を載する臺などの料に意匠をこらし、敷奇をつくしたるにて、且つ、佛供養の爲に、さまざまの調度つくり出でしめしこと多し。こは、其名は、佛の爲と云へども、其實は、自らの眼を悦ばしめし具に供されたるが少なからざりけん。

是等調度を飾る爲に、女子は、さまざまの色糸して、あげまき結びなどして飾りをし、うが巧拙善悪を評しあひて、一つの慰みとせしこともあり。

歌がるたは、單にかるたと云ふべし。歌がるたと云ふは悪しと云ふ説あれども、歌がるたは、もと松明より出でたるなりと云ひ、殊に、類似の名の自づから音相ひ通ひたるやも知り難けれど、兎に角、外國語のカードに似たれば、吾が國のと區別せんとすれば、是非とも、通俗に呼べるがごとく、歌がるたと云はざるを得ず。

歌がるたは、徳川氏時代に盛んに行はれて、今も猶、新年の頃、むねど、少女の遊嬉に屬するものなり。この遊嬉は、女兒が古歌を暗誦して、自然に、其詞と調子とを覺ゆるには、便りよきものなれども、多人數一室に集まり居て、爾も、うつぶきて視力を凝らし、互ひに負けつ劣らじと、雌雄を争ふなれど、健康上には餘りに宜しからず。且つ、遊嬉の興に入るまゝに、思は

兎まれ、うのかみの女子は、殊に優雅を尊びつるからに、調度の好みに心を入れて、一つの楽しみとせしことなど少なからず。所持の調度を、床、又は、棚に飾りて、色と形ちとの配合のよしあしを品評せしは、餘りにふるき事にはあらざりけん。こは、茶事など云ふもの流行著るくなりたる頃より、斯道に心よせの友達打ち集ひて、其什器の配置につきて、互ひに思ふよしをも論らひなごして遊びたりけん。されど、こは一種、茶事に属す

ず夜を更かして、睡眠の時を妨ぐるなど極めて不可なり。この戯をなすものは、能く心すべきことなり。

歌がるた遊嬉の方法は種々あり。先づ、百人一首、或ひは、古今集の或部分を抜きて、かるたに書き、上の句と下の句とを頒ちて、下の句を取るを普通とす。この読みかた、取りかたも、歌の全體を讀みて、並べ置きたる下の句を取るものと、上の句のみを讀みて、下の句を取るものと、又下の句ばかりを讀みて、下の句を取るものとあれども、この遊嬉をして、古歌の暗誦に便りすとならば、無論上の句よりして、前體を讀むをよしとす。

さて、歌がるたは、五人なり、六人なり、人員だけに、札の數を分ちて、銘々に取りたる數の多き以て、勝とするものあり。或

ることなりといふも妨げなからん。

二十九 こまの子の遊び
こまの子の遊びとは、羽子の遊びのことなり。即ち、こまいたとは、羽子板のこと、こまの子とは、羽子のことをなり。室町將軍の頃の年中行事に見えたり。この羽子は、男子の専ら翫ぶなる、蹴鞠の遊びより出でたるものなるべしといふ説あり。左もやあらん。うのかみ翫びたるは、極めて、蹴鞠のまかたに似たり。今はやうく異様に成りにたるがごとし。さてこの こま

ひは、我が所持の札を早く取り終りたるを以て勝とするものあり。或ひは、二組三組と分けて、勝敗を争ふものあり。源平などと號けて、二組にのみ分けてなすもあり。最も興味を感じて、競争の激しきは、この源平の取り方とす。又、百人一首などを翫ぶには、役ものとして、雪月花などの歌をどれば、何枚と餘計に敵に送るを得ることあり。また、うへ山風の歌と、乙女の姿 どの歌を最もよき役歌とすなど、なほさまざまの規則あり。又古今集の四季の歌取るには、彼の三鳥の傳授とことごとくしく云ひたる、もくちどり よぶことどり いなおほせどり を役ものとして、別にすること等もあるなり。又時としては、勝者には、殊更に賞品を出だし、負かたには、罰として、賞品をいだしむることもあり。又一人々々

いたにゑがきたるは、大方、殿さま督さまなりき。かみさまは、令夫人の義なり。こは、兩々相對して遣りかはす時、一方は男子の書、一方は女子の書をゑがきたるにて即ち夫婦相ひむかへるさまにかたどれるなりとぞ。こきの子をつくは、蚊をやらふまじなひなりと云ひ傳へたるもはやくよりの事なるがごとし。今もなほ、蚊の出ぬまじなひと云ふ所あり。
こきとは、胡鬼と書くよじに云へり。
羽子に用ふる羽は、うのかみ

に分けて、取り争ひ、第一番の勝者は、最終の敗者に命じて、一技を演ぜしむる等の事あり。
近來にいたりては、詠史、新題其他珍らしきものを選びて、歌がるたに製するもあり。
詩がるたは、重に、少年男兒の翫びなりしを、維新前後、自づから、文連振興の期に際し、女兒も、亦多少、漢文字を學ぶもの出來しより此方、女兒も、唐詩選、聯珠詩格などを、かるたに調製して翫びしもありき。其取りかたは、歌がるたとかはること無し。然るに、近頃に至りては、また、詩がるたは少なくなりて、却りて、外國語の單語を、從來のいろはがるたの様に製して翫ぶものあるにいたれる、こも亦、風俗變遷の一現象ならんのみ。

は、多く雉の羽を用ひたるものなりと云へり。
支那にて用ひたるは、鶏の羽なりとぞ。

三十 卵槌の遊び

卵槌、又卵杖とも云ふ。勿論、卵槌と卵杖とは、うの製作のかたち少し違へり。卵杖は、杖の形に作り、卵槌は槌の形ち、即ち撞木のやうに作るなり。こは、もと、正月十五日に、逐鬼のためとて、几帳又は、柱等にかけたるなるが、何時の世よりか、これにて、子無き婦人の腰を打つ時は、子産むものなりと云ひ傳へた

因に記す。いろはたごへがるたは、最も、年少なる男女の小供が翫ぶものにして、こは大抵、犬もあるけば棒にあたる論より證據など云へる諺を、かるたに書き、別のかるたには、たご、いろなる、かな文字のみを記し、其れに尙其意をあらはせる繪圖をゑがき、未だ文字を讀み習はぬ小供にも、繪の見覚えによりて取らるゝやうになしたるものなり。
これに習ひて、動物、植物、其他の物の圖をゑがくせ、其名は文字に書きて讀み、取らしむる事等をもすなり。
又、歌題かるた、謠曲がるた、など云ふものもあり。
西洋がるたは、いさゝか思ふむねあれば、爰にははぶきて載せず。

○お弾き

る所より、まじなひの爲とて、若き婦人の腰を打ちつるなり。然るに、その始めこり、まじめにもしつれ。遂には、一つの戯れわざとなりて、若き女は、手にく卵槌を持ち、友だちを追ひまはりて、打たんとするに、左はさせじと、みな逃げ隠るなり。男をさへず打つめる」とは、枕双紙にも見えたり。

三十一 ぶりくの遊び
ぶりくの遊びも、卵槌に類似なるものよしなれども、こは、打毬のかたより出でたりと云ふがまことなるべし。

杖の形ちは、卵槌に似て、撞木がたのものなり。これをもて、木製の毬を打つ。打ちたる毬は、目的の所にまで遠く走り達するを要するものなり。但し、ぶりくは、卵槌などよりも、遙かに後のものなるよし。

三十二 花かづら
花かづらは、別に取り分きて遊嬉の一種をかづらふべき程のものならぬども、こははやくより、若き女兒の、野山に出で、さまざまの花の若枝を折りて、鉢巻のごとく、頭髪に巻きつけ、又は、挿頭にも

お弾きは、もと、彈基の遊嬉より出づ。故に、うのかみは、碁石をもて、其遊具に用ひたるなれども、今は、碁石にかふるに、キシヤゴといふ、小さき貝殻をもて、これに充つ、キシヤゴの大なるは、團平キシヤゴと言ひ、小なるものを、單に、キシヤゴと呼ぶ。さて、其遊戯の仕方は骨牌の如く、其處に集へる人數の各自に、キシヤゴを、五十づつなり、百づつなり分配てなすもあり。又は、源平と、二ツに組を分けて、其勝敗を争ふもあるなり。キシヤゴは、まづ、各々(源平二ツに分ちたる時は、双方より出すのみなり)十づつとか、十五宛とか、キシヤゴを出しあひ、順番を立て、第一番の人、まづ是を弾き、過つ時は、其次に送る。斯くして、場中のキシヤゴ盡くれれば、更に、キシヤゴを出しあひて、弾きを爲す事、始めの如し。斯

くして、十回なり十二回なり、爲し終りたる時、各々のキシヤゴの數を算へて、最も多き者を第一の勝とすなり。其弾き方は、多少の差違あり。まづ集めたるキシヤゴを、双手に掬ひ載て、定め場所に撒き、其密接したる物は、取りのけ置きて、次の人に渡すもあり。又は、次の人をして、更に、其場中に撒かしむるもあり。斯て、キシヤゴは、一ツづつ弾きて、目的のキシヤゴに當れば、其弾きあてたるキシヤゴを取るなり。若し、當らざる時は、次の人にまはし、次の人、集めて、撒くこと初めの如し。又キシヤゴの、目的の物のみに當らずして、他のキシヤゴにも當る時は、おやつと號して、これまで取りためたる物も、皆拂ふことなり。(おやつとは、八つありの義なり)

さして、飾りの具にも供したりけん。さるを、小供等は嫁さまごとの如くして、花かつら、互ひに美しきを多くせんとして、競ひ遊びしもありしならん。枕双紙にも、彼の翁丸といふ犬に、柳のかづらさせ、桃の花ささせなどして、戯れ遊びしさま見えたり。うのかみ、貴女は、よく好みて、猫を飼ひたるよしなるが、ふるき繪巻物の中の圖に、をかしげなる猫の首に、花かつらまどひて、若き女のわらはの既び遊び居るかたをまがきたるを見しことあり。是等み

又、おしきりと號して、其弾かんとする兩個のキシヤゴの中間に、小指をいれて、しきる眞似をなす事あり。其時、小指のキシヤゴに觸ると時は、弾き損ねたる時と同時に、次ぎの人にゆづるものとす。
おはじきも彈棊の如く、キシヤゴを、一列にならべて、ねらひを定めて、弾き當つることをもなすなり。
お弾きは、是までは、疊の上にて、爲し志を常とすれども、こは、骨牌の如く、うつむきて爲す物故に、身體の爲、宜しからず、同じくは、卓又は、普通の机の、方形に廣き物を擇ひて、其上にて爲すを、最も適當なりとす。

○お手玉

お手玉の遊嬉は、もと、品玉の遊嬉より、出でたるものなり

な、翁丸といふ犬に、柳のかづらさせたるにひとしく、わが手飼の猫などにも施して見しなるべし。上代は、往々、女子の頭髮には、生花をかづらし、又は、かざしもしたるやうなれども、中世より以降は、さること絶えたり、(但し近來はまた生花をかざすものあり)

三十三 菖蒲の遊び

菖蒲を既びしは早くよりのことなり。これも、其始めは、悪魔をやらふ爲とて、薬玉につくり、軒を葺き、几帳、御簾などにもかけたりけんを、五月五日には、人に文やるに

と傳ふ。さもやあらん。古代の物は、猶圓形の小石を玩びたりしなり。今は、小さき袋様の物を以て、其具にあつ。右は、方一寸二三分より、二寸弱なる、長方形の袋を縫ひ、まづ、其口より、小豆を入れ、然る後、其口をも締くるなり。(小豆は、大抵其小囊より、半分強なるを度とす)是に用ふる布帛は、上等なるは、縮緬、次は絹、次は唐木綿等を以ても造るなり。色は、種々あれども、大抵お玉に用ふる物は、別色とす。數は、まづ、五ツ以上より、九ツ位までを適宜とし、猶其上は、十三も十五も用ふることなり。是も、座中の人數、三人なり五人なり圓座してとり、取損ねたる時は、順次、其次々に廻すなり。其取法は、所によりて、極めて、一様ならずと雖ども、まづ、其大方を示せば、最初に、お玉と定めたるものを、上方に投げ

も、菖蒲を添へ、且つは長き根を悦びたるより、先づ、菖蒲引きなどいふことさへ出て来て、人々、はるかに沼水の汀にあさりて、葉色うるはしく、根の最も長きを選びて競ひ引きけん。斯くて、其引きたるは、樂玉につくり、軒に背きなごせしなり。又、菖蒲を櫛の形ちに切りて、頭髮にさじ、あるは若葉よきほどに摘みて、袖、肩等にもつけ、其れをつくるには、さまざまの色練して、結びなごせしよしなり。近き頃まで、五月五日を菖蒲の節句とてなへて

挙げ、其落ちざる間に、餘りの七ツなり、九ツなりを、片手に集めどりて、上方より落ちくる玉を其手に受く。次は一ツ々どり、其次は二ツづくとどり、斯くして、皆を取る。これを、お一トお二タと稱ふ。又、お玉を投げ擧げ置きて、一ツを手に取り、一ツを投げ落して、お玉を受くるをおさくらといふ。おさくらは、もと、おさくらとほしといへるを、今は畧して、おさくらといふなり。思ふに、こぼれ櫻の意なるべし。又、お玉を投げ擧げて、一ツ々手に受け納むるを、おつめといふ。其他種々の取り方ありて、一循すれば、別に數どりして、定め、の、六回なり、十二回なり、速く其定め、の數に充たしめたるものを、第一の勝者となすなり。是も亦源平と號して、二ツに組を分ち、勝敗を争ふことあるは、恰かも骨牌に似たり。お

佳例の一つとせし頃までは、なほ、軒に背く菖蒲は長きを誇り、且つ、其葉を切りて矢筈がたをつくり、女子の頭髮にさじ、また、葉のやはらかき所を細く裂きて、丈長のやうに、髪にもかけたるなり。こは戯れ遊びの具にのみ供したるにはあらず、彼の悪魔は菖蒲の匂ひを忌み避くるものなりと云ひ傳へたるより起りて、一つは、まじなひやうの心よりもてはやしたるなるべし。

三十四 菊の遊び

菊は、もと漢土より移し植る

室内遊嬉

玉は、其取る時、大抵口に唱ふることあり。お一トお二タお三イお四、或は、お一ト櫻、お二タ櫻の如し。一種を、取終りたる後、お玉を投げて、手の甲に受け、更に攪むを、とんきりといふ。是等の唱は、皆其玉を玩ぶに調子よきを以てなるべし。お玉の遊嬉は、目の活動及び右手の活動に於て、多少の裨益ありと雖も、普通は、大抵疊の上に玩ぶものなるが故に、塵埃を立たしめて、呼吸器のために宜しからず。故に同じくは、お弾きの時の注意と等しく、廣き机の上にて、玩ぶを宜しとす。又存外に視力を使ふものなれば、あまりに、長時間玩ぶは不可なり。よく注意すべし。

○雙六(新式)

たるなりと云ふ。げに、今、世にもはやさるゝ所の、各種の菊は、大方舶來のものなるべきも、なほ、わが國にも野生のものは、兼ねてありしが如し。さて、菊を翫びはじめしは、なほ、漢學隆盛の頃よりなりけん。菊を折り、菊をかざして、千歳の色を愛でたりしは勿論のことにて、なほ一種、菊のきせ綿といふものありしなり。これは、菊の霜にあひて、早く移ろはんことを惜しみて、菊花の上に綿をねほひたるなりと云へど、霜を防ぐには、うのかみも、

昔時、行はれし雙六の遊嬉は、今たえて世に行はれざる物となりたれば、古代の遊嬉の中に算へて、蓋頭に掲げ置きつれば、此には載せず。即ち、今言ふ所のものは、普通に玩ばるゝ道中雙六、飛雙六の類なりと知るべし。道中雙六は、昔時の雙六の遊戯に、極めて、近きものなり。是は、まづ、京都と言ふ所を、紙の中央に取り、其他、東海道の宿驛を、周圍に畫きつゝ、振出しを右側の隅とし、日本橋の景色を圖し（今稀に、西京を振出しとし、東京を上りとして、中央に圖したるもあれども、多くは、飛雙六の方行はるゝ賽は、少なき筒の中に入れて、振るを本義とすれども、唯、手しても振るなり。賽は、大抵二個を用ふ。双六の勝負は、第一に、上りの場所に達したる人を一番上りと稱し、第二に達したる人

今世の如く、霜おほひといふものをなしたるが如し。きせ綿の起りは、霜をねほはんのころなりしにもあるべけれど、きせ綿を翫びし頃は、全く、菊の花をいたはる爲にはあらず、其移しの香をもてはやしたるならん。菊花の盛りなる頃、夕暮に、思ひくの花の上に、摘みたる綿をねほひ置き、さて、翌朝にいたり、これを取り入れて、料紙の箱にも入れ、衣の中にも置きて、香をなつかしみたりけん、當時、高雅の嗜好思ひやるべし。これに比ぶれば、今

を、一番上りと稱す。第三第四皆是に準ず。而して、一番上りは、第一賞を得、二番三番は、第二第三の賞を得るものとす。飛雙六は、種々の新工夫をなして、陸軍双六、海軍双六、英雄双六、美人双六、處世双六など、其種類は、枚舉に暇あらず。まづ、其例を擧ぐれば、處世双六は、振出しに、男女の小兒を畫き、上りに、人世富貴榮耀のさまを圖し、而して、振出しにて一をふれば、小學校とか、二をふれば、動物園とか、三を振れば、怠惰とか言ふ様に、規則を定め置きて、其目に從ひて、此處彼處と、飛び行くなり。雙六は、何種に限らず、其これを爲す者の姓名を、小札に書き、まづ、初めに、振出しの所に集め置くものなり。

○福笑ひ

の世に成りて、あたら盛りの花を摘み、枝を折り、あらゆる形にしたる人形の衣装調度に飾られ、あやしのなりものに囁し立てられて、心無き人の俗眼を悦ばしむる具となりたるよ。菊も心あらば、何とかは覺ゆらん。隠君子など云ひて、世の塵に汚れぬものに云ひ思はれけん。一つ物としも思はれぬ哉。

なほ、うのかみは、菊の宴を開きて、詩を賦し、歌を詠じ、あるは、絲竹管絃の遊びをも、この花のもとに催して、興を助けたりけん、例を擧ぐれば、

數へ擧ぐるにいと問あらず。

三十五 雪の遊び

雪の遊びは、最も古くより行はれしことなり。こは、たゞに、降りつる雪の氣色の面白きを見て、風流の道を翫びしのみにはあらず、これにて、雪の山、雪の岩、雪佛などをまつくり、又は、雪まろばしをし、雪打などをしして、遊び戯れたりしなり。雪の岩に花をいろどりつくるなど、萬葉集に見えたるは、雪にて作れる岩の上に、いろくの造り花を立てなどして翫びたりしなるべし。

福笑の遊嬉は、まづ、お太福の面の形を、紙に圖したるを廣げ、別に、目は目、鼻は鼻、口は口、眉は眉の形を、厚紙にて切り抜きたる物を備へ置き、座中の人、代る々々盲鬼の如く、手拭にて眼を蔽ひ、介添の人より、是は目、これは鼻と言ひて、其渡す所の者を手に持ち、片手にて面の圖を探り、大抵此の邊に置けば可ならんと、考へたる所に、目鼻をならぶるなり。斯くて、ならべ終りたる時蔽ひたる手拭を取りのくるなり。扱圖面の上にならべたる目鼻の適宜の位置にあるものを、優者となして、褒美を與ふるものとす。而して、其ならべ方の、時として、鼻の目の方向につき、目の鼻の位置に轉ずる等、極めて、其形の可笑しきがあるために、大に座興を添ふるることなり。

又、一法は、前述の、お太福の圖よりも、猶廣き紙に、面を圖し、兼ねて、壁などに張りつけ置き、例の如く目を蔽ひ、一二間離れたる所より、探りゆきて、此の掛圖の上に、目鼻を配置する事あり。此の目鼻の切り抜きには、小さき止針を挿し置き、此の圖上に刺すなり。是は、小さき圖を、下に置きて探るよりも、位置の取り方、猶一層難かしき故に、目鼻奇妙の所につき、大に、可笑しき事あるなり。是も、褒美の與へ方は、前に同じ。

○茶坊主

茶坊主も、亦、福笑に似たる遊嬉なり。座中の人々の中より、まづ、一人を鬼と定め、別室に待たしめ置き、残りの者は、各々適宜の場所に座を占む。而して、用意宜しきよしを鬼に報

又、枕双紙には、雪の山を、御苑につくらせて、これが、幾日ばかりを有つ可きかと思へる、日敷の長短につきて、人々をわけごととして興じつる事など書きたり。されば雪の山、つくりしことも、はやくよりの事なりけん。山のかたちは、勿論、うの作る人の心にて、目に近く見る山々のたゞずまひをうつし、又は、書やうによりてもつくらせけん。されば、かゝる形ちを取り分きて云ふよしも無けれど、先づ大方は、富士の山の形ちをつくりたるものごととし。

ずれば、鬼は、手拭にて目を蔽ひ、茶臺を持ちて、着座の人々の前に出で、座したる人の膝をさぐりて、誰某と其姓名を言ひ、お茶上れとて、茶臺を前に置く。此の姓名の主に當りたる時は、其人、更に代りて鬼となれども、當らざる時は、幾回にても、順々にめぐりて、其姓名を言ひ當つる迄、鬼たることを免がれず。さて、其膝を探る規則は、帯より以下とし、徐かに一二回撫るものとす。是より越ゆる時は、異例として、退ける。然れども、鬼は、膝の格合と衣服の形状とによりて、速く其主を察知するものなるが故に、人々は、鬼をして、他室に去らしめたる後、或は、羽織をぬぎて膝に當て、他の袖の端を引きて蓋ひ、又は、座布團を以て包むなど、種々に工夫して、其誰たるを知らしめざらん事を力むるなり。

○豕の尾

こは、今も、小供の打ち寄りて、雪の山、つくるを見れば、大抵、富士の山の形ちが多きなり。うは、富士の雪の面影を、目の前にうつすが面白きと、且つは、其作りかたも却りて、容易ければなるべし。雪佛をつくりし事も、はやくよりなりけん。新拾遺集に雪にて、丈六の佛をつくり奉りて、供養すとてよめる。

膽西上人

いにしへの鶴のはやしのみゆきかと思ひとくにすあはれなりける

室内遊嬉

この遊嬉は、まづ座中の人敷の中より、一人の鬼を作り置き、残りの人皆圓形に座す。扱、鬼は、手拭なり、手巾なりを長くより、豕の尾の状を作り、座頭の人より、順次に豕の尾々々と呼びて、其手拭を見す。其呼び聲は、或は低く、或は高く、顔の形も種々に變へ、つとめて、其豕の尾を見せらるゝ人の笑ふ様になすなり。扱て、此の規則は、鬼、豕の尾を呼ぶこと三度に於て、猶、其人笑はざる時は、更に、無詮なりとして、次の席に移るなり。かくして、巡り行くに、其笑ひたる者は、頁として、代りて鬼となることなり。

○花の名

この遊嬉は、室内にても戶外にても、爲す事を得べし。まづ、

みの雪佛は、今の如く、達摩のみをつくるにはとまらざして、各種の佛をつくり、且つ、これは、遊嬉のみにあらずして、この雪佛を供養などもしけん。うは、雪にもかひて、罪障消滅を希ふなどいふこともあれば、雪にて佛つくりて、供養せしと云ふも、げにさることゝぞ覺ゆる。さて後は、やうく、雪達摩つくること流行して、今も猶、これつくり翫ぶなり。眼には切炭を入れ、眉には杉の葉をはさみ、口にはへの字なりの枯枝等をもて、うの形ちを

座中の人數、十人あれば、十人各々自ら好みの花の名をとりて、自らの名とすなり。例へば、梅、櫻、藤、山吹、燕子花、薔薇、桔梗、牽牛花、藤袴、菊、女郎花等、何にても、あるべし。斯くて、第一座の人を、まづ、鬼と定め、其人三尺ばかり席を進みて、他の名を呼ぶ。例へば、「梅々々」の如し。斯く、二度呼ばると間に、其梅と呼ばれたる人、一度「梅」と答ふる時は宜し。周章て、鬼の、三度呼び終る迄答へざる時は、其人、負けとなりて、代りて鬼となるなり。然れども、其呼るゝ間に、一度答ふる事を得れば、鬼は、負けとなりて、幾度にも續くるなり。其呼び方は「梅」なる人の、顔を見て呼ぶ時は、其主速く心付きて、梅と答ふる故に、鬼は、大抵、しかせずして、「梅」と呼ばんとする時は、却りて、他の人の顔を見、さて、反對に「梅」と呼

ぶ故に、やともすれば、答後るゝ事あるなり。

○花競べ

作るなど例のことなり。人々打ち集ひて、我れ劣らじと、組を分け、大きなるを作り争ひたるなども、ありきとぞ。雪まろばしも、古へよりありしことなり。源氏物語などにも、雪晴れ、月明らかなる夜に、女の童を庭に下り立たしめて、雪まろばしさせたることあり。其頃の遊びにもやありけん。女の童に、雪まろばしさせしつることは、この外には餘り多く見えず。男子どもにもまろばししめて、貴人、これ見はやしけるなるべし。

この遊嬉は、昔時の花合せ等の餘波なるべし。花合せは、人數を左右に方わけして、其左右の人、各種の花を撰び採り、うれに歌を添へて、歌合せの競争の如くして遊びし事なり。花競は、まづ十人の數なりと假定すれば、是を、左五名、右五名と分ちて、別に、一人の判者を定め、さて、其席上へは、例へば、左方は、細き白のレブンを結びて胸に標を付るとか、右は、赤きレブンになすとかして、兼て、定め置きたる、一番二番の、番號の名を呼ばると毎に、左右より、各好みの花の枝を持出づ。さて、各其花の特所を言ひて、劣らじ負けじと争ふなり。かくて、左右の人の、其言はんと欲する所の物を言ひ

今も雪のあしたには、年若き子女打ち集ひて、雪まろはしすなり。されば、近世に至りては、雪まろはしと云はずして、雪ころがしと云ふ。又、これをつまめて、雪こかしと云ふ所もあるなり。雪打もまた、はやくよりありしなれども、うのかみは、すべて、男子のものせしなりけり。禁中には、衛士又は舍人などの集まりて、雪打の遊嬉せしこと、ものに見えたり。されど、徳川氏時代にいたりては、將軍、及び、諸侯の奥にて、女中たちをせし

終りたる時、花は、兼ねて定めある臺、又は、廣蓋の上に置く。判者は、是を見て、批判の詞を下し、左は勝とか、右は勝とか定め、或は、左右ともに優劣なしと認むる時は、持と定むる等の事もあるなり。其一二の例を左に掲ぐべし。

一番左

八重櫻

左方は、左の八重櫻を持ち出でて、判者の方に向ひて、座の中央に立つ。(座禮なれば座すべし)

右

牡丹花

右方の人、亦、右牡丹花の枝を持ち出でて、左方の人と對ひあひて、判者の方に對ひて立つ。

められしことまばくなりしよし。維新の前頃は、四海、波やうやく騒がしく、殺氣宇宙に満ちて、血腥き風の吹き起りうめたる程なりしかば、遊嬉のごときも、自づからあらくしくや成りにけん。ある大諸侯の奥に、雪打の遊嬉を催されしことありき。雪は前夜より、降りしきりて更にをやみも無かりければ、此容子にては、明日も猶やまざるべし。早天より、奥向の女中、若き者は、みな出でて、雪打せよと、殿の仰せ出だされけるに、當時のこととして、

さて、左右ともに一禮すれば、左方の方は、右方の人に向ひて曰く、

我は實に櫻の花を愛す。櫻は即ち我國の名花にして、たえて外國に其比を見ず。さればこそ歌にも、

志きしまの大和心を人間は

朝日に匂ふ山櫻花

と、詠めり。實に、うらくと長閑かに晴れ渡れる朝、高嶺に咲き匂ひたる櫻の、旭日に匂へるは、何かは是にしくものあらん。まして、九重の殿の守とえらひ植ゑられたるも、此上なき花の名譽ならずや。如何に。

右方、又誇りがに、牡丹の枝を、指し示して曰く、

御身は、櫻を以て、我國の名花なり。外國に比類なしと

女子も、何と無く、心たけく成りて、左様の遊びを好めるが多かるに、なほ、第二の命令には、左右二つに分けて、一方は、徳川將軍がた一方は、長州公（即ち、今の毛利公）方を定めらる（其頃、恰かも、長州征伐といふことある時にて、邦内の人心、徳川氏と毛利氏と、ひいき二つに分れたる頃なり）然るに、この殿は、徳川氏の支族にして、奥方は、毛利公と姻戚をりければ、奥向何と無く、さめき渡りて、殺氣を生じぬ。斯かりければ、其夜は、

人々一睡もせずして、用意をどこのへ、翌朝は、定めの時より、表づきの女中、奥方の女中、左右に相ひ分れて、雪打ををしけるに、表づき少し負色に成りければ、殿はやつきと成りて、近習、小姓の若者を召び集へ、授兵として出だされけるに、奥方にも、其義ならばと、奥附の老武士を驛り催して、表奥、男女老若入り亂れて戦ふ程に、或ひは、雪に埋められて、氣絶するもあり、或ひは、崖より轉び落ちて、手を負ふもあり。始めは、一時の遊嬉として催され

言はるれども、今學問の道開けて見れば、外國にも、たえて、無しとは言ひ難し。況や、其咲く時は麗しけれど、嵐もまたで、心短かく散るは、耐忍の力に乏しと言はるる、我民生の缺點にも似て、あまりに面白からず思はる。うれよりも、我が愛する牡丹花は、花中の王、富貴の花と稱せらるる程ありて、其花輪の大なる、其枝ふりの雅なる、實に見るからにうち笑まるる心地して、いと可愛たしども可愛たからずや。さればこゝ、揚貴妃も、此花に我容姿を比べて、其美を誇れりといふ。さもあるべし。我は、櫻の盛り短からんよりも、廿日草と呼はるる牡丹花の、盛り久しきが勝れりと覺ゆ。如何。

左方曰く、

御身は、牡丹の富貴なる名に迷ひて、我國の名花を下しめ給へども、國を傾け、城を傾けたる妖婦、揚貴妃が聲にならひたるも忌はしからずや。況して、其香のうとまじさ、あまりに、大きな花のさまのこちたき、到底櫻の優美高尚なるに比ぶべくもあらず。殊に、我が手折れる八重櫻は、伊勢の大輔が、いにしへの奈良の都の八重櫻

けふ九重に匂ひぬるかな
こ、かしてき御前に奏せられたるも面正しく、霞の間より、さど匂ひこぼれたる、紫の君にようへられたるもなつかし。斯くても猶、牡丹花を優れり、と争ひ給ふ

たることも、つひには、まこと
の争闘となりて、何時果つ
べしとも見えず。侍醫は手負、
氣絶者の看護、診察を續く委
ねられて、目をまはす騒ぎに、
此事はやくも、重職どもの耳
に入り、これは怪しからぬ殿の
御振舞かな。よし無き御戯れ
に、御親族の平和を害したま
ふのみならず、つひには善か
らぬ取沙汰の公儀に聞えまわ
らすともあらば、由しき
御家の大事にも立ち至るべし
とて、此義速かに諫争に及び
ければ、殿もやむを得ずして、
勝敗を見はてぬ程に、本意な

右方猶曰く、

おほけなくも、かしてき御前わたりを引き出で、花
にこりなし給ふは、卑劣ならずや。殊に、八重櫻は、一
重の、山櫻など言ふものよりも、更に雅致なく、趣味
なく、恰も店頭に買ふ造り花の簪の如く、紅粉厚らか
に装ひたる田舎娘の如く、櫻は、八重に至りていよ
く其價值を失ふものと言ふべし。我は、富貴の名に
眩するにあらず、富貴の眞價を貴ぶなり。強兵も亦富
國ならざれば能はず、強兵なるにあらざれば、何とて
國威を輝す事を得ん。近來支那問題の如き、又以て富
國強兵に基すること、極めて重大ならずや。嗚呼、富貴

富貴、富貴の花、しかも盛り久しきは、まことに以て、
深く頼むに足るべし。

左方曰く、

然り、御身も、自ら言るが如く、此度の支那の内亂に、
我國威を輝かしたるものは何、即ち將卒の死を見る
こと、歸するが如く、即ち櫻の散りかた潔よきが如き
に習へばなり。我國の名花、櫻の心を以て、武士の心と
す、又潔よからずや。

かくて、相方、辨論終結する時、判者立ちて、批判の詞を
下して曰く、

大和心の花に匂ひ出たる櫻、富貴の色に富める牡丹、
其花のさまも、主の詞の文も、何れをいづれど、優劣

げながらとめしめられきと
ず。是等は、時勢の然らしむ
るにもよりしなるべけれど、
雪打 などの遊嬉は、活潑に
して、身體を鍛錬するには悪
からねども、勝敗を争ふこと
烈しきものなれば、よきほど
にせざる時は、あらぬをも
引き出でつべし。こは、今も
行はるゝ遊嬉なれば、因みに
爰に記して、参考の一つとも
せんぞすなり。
又雪にて種々の器具やうの物
を作りたるも、ふるくよりの
事をりしが如し。雪燈籠は、
雪にて石燈籠の袋やうの物を

つくり、其中に火をともして据ゑたりき。これも、諸侯の大奥などにて翫びたりしなり。其他さまざまの形ちをもつくりたりけん。

雪女 もまた、雪連摩のごとくつくりて、翫びしことなり。其當時の發句に、

雲となり雨となる身の雪女

など云ふがあるにても知るべし。

三十六 こまの遊び

こまの遊び も、はやくよりの事なり、和名抄には、こまつくりとあり。こまは、

こまつくり、又は、こまつぶり。なども云ふなり。獨樂狗 とも書けり。太平記などには、童のこまはして遊びけるよしをも記せり。こまの翫具も、外國より渡り來たるものなるべし、唐土の書にもこまのことは見えたり。こまの廻しかたはさまざまあれども、指のさきにてまはすもの、こまの上部に、紐をくると巻きつけ、其紐を引き解きてまはすものを普通とす。其大きなものは、直徑貳尺にわたるものもあり。かやうの物は指さきにてま

室内遊嬉

更にわき難けれども、猶判者が、古代なる心には、花は櫻に人は武士とかや、言ひけんまくに、君の爲國の爲に死をだも辭せざる日本男子の潔よき働きを、日毎の新紙に見るにつけても、猶其基たるべき富の源、つくらの心を忘るゝにはあらねど、目の前に潔よきが嬉しさに、大和心の花を以て、勝れりとは定め置きてん。我田に水の誹りも如何はせん。

判者の批評終れば、左右共に一禮して、勝方の人は、臺の上へ上げたる我が八重櫻の枝と、負方の出したる牡丹の枝とを持ち歸りて、兼ねて、用意し置きたる左方の花瓶に挿し、右方勝ちたる時は、勿論、左方の出したる花をとりて、右方の花瓶に挿すこと左の如し。此の如くし

て、終結し、花の枝を多くとりたる方を勝方とす。

○國めぐり

國めぐりの遊嬉も、やはり、戸内にては、戸外にては、爲すを得べし。まづ、總人數、七人とすれば、六人の人は、大抵、二三期程づゝ離れて、めぐり立ち、一人は、鬼となりて、中央に立つ。其六人は、例へば、一人は日本、一人は英吉利、一人は魯西亞、次は佛蘭西、次は獨逸、其次は亞米利加等、何國にても、各々、適宜の名を附すべし。さて、其日本なる人、英吉利と呼ばて走り出づれば、英吉利と呼ばれたる人も、すぐに走りて、日本なる地位に入り、日本と呼ばれたる人は、代りて英の地位に入るなり。鬼は兩人の行き違ひさまに走るを見て、日本なり、英吉利なり、何れになりとも早く其地位を取るなり。而

はし能はざる故に、兩の掌にてよりてまはすなり。小きものは、豆つぶよりも小きるあり。徳川氏時代にいたりては、一種 こまはしなる技を演じて、世渡りする者さへ出で来て、今より七八十年前には、こまはしに流行せしよしなるが、これは極めて奇妙なる所作をなし、細き糸の上に こま をまはしながら何處までも渡らしめ又は、高き階段をまはりながら登らしめ、或は、神殿やうの小さき宮に こま のさきにて燈明をつけしむる等、其

して、其取られたる人は、更に代りて、鬼となるなり。されど、鬼の走りて、何れかの地位に入ること遅ければ、幾回にても、もとの中央の地位に返りて、其地位に代るを得るまで、鬼となる定めなり。

○文字鎖

文字鎖の遊嬉は、元來、往時の詠歌の文字鎖より出たるものなるべし。即ち、歌の文字鎖とは、「春かすみ、かすみていにし」がねは、「身をつくし心つくしに、等詠みて、調子を圓滑にしたるものなり。而して、遊嬉の文字鎖は、大抵一字づつを重ねて行くを常とす。

まづ、其方法は、座中の人數だけ、圓く輪座して、首座の人より「天に口なし、人を以て言はしむ」といへば、其次の人は、む

技術の種類、かづへあぐるにいと間あらず。今も猶、手づま師 なるものと内に、こまはし ありて、この技を演ずると無きにもあらねど、其當時のごとく、人のもてはやすを少なき故にや、技もまた、其頃よりは却りて劣りたりと、この道に委しき人の談りしとありき、左もやあらん。されど、小きこまは、其形ちも極めて愛らしく、何と無ければ、をかしき玩具の一つとして置くべきものなりと覺ゆ。

三十七 道中籠

なる文字を承けて、「むかし々々、山媪金時の物がたり。」と言ふに、また次の人、終りのりなる文字を承けて、「綸言汗の如し」と言ひ、次は、志を承けて、「まわん坊の柿の種子」等、すべて、格言、俚言などの言詞を取りて、文字鎖りになしゆくものなり。さて、順番に當りたるも、行きつまりて、文字を承けて、損むたる者を負けとして、其座を除かれ、最終まで残り止まりて、能く承け得る者を、勝とは爲なり。

今一ツの方は、歌、或は詩を用ふ。是も前述の如く、

秋風の吹きあげにたてる白菊は

花かあらぬか浪のよするか。

と言ひて、次に廻せば、其次の人これを承けて、

かすが野の若紫のすり衣

道中籠は、もと童謡に在りしものを取りて、遊びの一つにせしなるべし。これは、徳川氏時代に出で來たる事なるがごとし。こは、先づ、二人の年かざる人、兩方の腕に兩方の手をかけて組み合はせ持ち、其上に幼き子を、馬に乗るやうにして乗らしむ、或ひは、肩車といふやうにしても乗らしめ、又は、普通に背負ふことをもすなり、斯くして、この兩人は、道中籠や、からかごや、行くより戻りは軽いナ。といふ歌をゆるく誦ひながら、

志のぶの亂かざり志られず。と言へば、また次の人は是を承けて、

すがるなく野邊の萩原朝たちて

旅ゆく人を何時とかまたん。

と、やうに承けつゝ行くなり。

詩も亦是に等し。但し、詩は、全句を抜きて同字を求むるは、

少しむづかしき故に、大抵一句々々宛を抜きてまはずなり。

たとへば、

愧爾東西南北人

と云へば、次の人、

人日題詩寄艸堂

と云ひ、又其次の人

堂塔入雲烟

など、いくつにても續け行くこと、なほ前條の歌のごとくなるべし。

○歌まはし

體を左右にゆすり、幾組にて、一列に調子を揃へて、定めめの場所までいたり、其載せたる子を下ろせば、戻りは、幾た年かざる人ばかり、幾人にて一三の駈け聲と、もに、走り歸るなり。斯くて一番早く歸りつきたる人をもて、勝と定むることなり。この 道中籠の歌はもと、行くより戻りは安いナ。とありしなれども、この遊嬉は、その行く時には、小供を乗せてしづかに行き、歸る時には、小供を下ろし置きて、一人走り歸る定めなる故に、

歌まはしの遊嬉も、文字鎖の如く、歌の最終の文字を頭に承けて、次々にまはし行くものもあれども、歌の語尾には、大抵なり、けり、の如き、假名にて止めたるもの多きに、頭には、りと承くるものは、俳諧狂歌の他には、殆ど皆無なるを以て、歌まはしは、文字鎖にはせず、たゞ、大方まづ、季節、物名、詠史等と、其種類を限りて、なすを常とし、猶其區域をせばめては、春の花の歌、日本の詠史、等と定めても爲す事あり。例へば

みよし野の山邊にさける櫻花

この歌の末をかへて
行くより戻りは軽いな。
とじたるなるべし。

三十八 うなぎの瀬の
ぼり。

うなぎの瀬のぼりの遊嬉
は、大抵、男兒のなすものなる
がごとし。(幼き女兒がなし
たるもあるよしなれども)こ
れも亦前條の 道中籠と 同
じ時代のものなり。
先づ、小供大勢、其帯の結びめ
の所を左右の手にてまつかり
と捉へ、次々順々にかくのご
とくして、一人づゝかはる
くぐに、

雪かどのみずあやまたれける

と言へば、其次は

君ならで誰にか見せん梅の花

色をも香をも知る人ぞ知る

と言ひ、又其次は、

かはづなく神なび川に影みえて

今かさくらん山吹の花

なごく答へて、順次に廻しゆくなり。

○火まはし

火まはしは、觀世より、又は、線香に火をつけて、是も題を限
りて、物の名を言ひ、順次にまはしゆくに、其持ちたる火の
消ゆる時は、其持主を以て、負けとする事なり。然れども、火

うなぎの瀬のぼりくぐと云
ひながら、其各自の肩の所を
這ひのぼりて、末より尖まで
達すべし。この時、みな前者
は、頭をふせて、龜の子の状
をなすなり。これは、最も速
かにのぼり終るものをもてよ
しとすなり。

三十九 いもむしやこ
ろく

いもむしやころくも、前
條の うなぎの瀬登り と同
じ頃のものなり。これも、各
自の帯につかまりて、まやが
み居りつゝ、
いもむしやころく

を遊ぶことは、年少の小兒などには、あまり好まじからぬ事
なるが故に、今は大抵是を爲さず。唯其區域を限りて、言ひ
まはしを爲すを普通とす。即ち、各種の物の名を呼びてつぎ
くぐに廻すなり。

○植物まはし

植物まはしは、單に植物の中として、爲すことあり。又は、其
中より、更に、木とか、草とか限りて、なすこともあり。まづ
木と限りたるものとすれば、最初の人、松といひて次にまは
し、次は梅、次は櫻、次は檜、次は横、次は杉といふ様に、答へ
ゆくこと、歌まはしの如し。植物まはしは、大抵、年少の小兒
が、物の名を知るため、即ち、智育の一助として爲すに可な
り。

とゆるく誦ひながら、一盤に人々の體を左右にふりながら歩み行くなり。これは別段、何といふ趣味も無く、勝敗も無し。小供の遊嬉なり。

四十 つばなぬこく

つばなぬこくの遊嬉も、前段のものと同時頃に行はれしなりと覺ゆ。これは、先づ、この遊びをなす、小供一列にかみ居て、

つばなぬこく
と誦ひながら、つばなをぬく状をなすなり。其中に一人鬼と定めたるものゝ名を、假に山のおこんと號く。山の

おこんとは、山の狐といふ意なるよし。さて、右の如く誦ひ遊ぶ程に一人の人、これ、何と云ひて、人指と稱指とにて、まろき玉の形ちをつくりて、鬼に見す。鬼これを見

寶珠の玉

と云ふと同時に、一同立ちて逃ぐるを、鬼追ひ驅けて、捉ふるなりとぞ。

四十一 植物の遊び

前に、櫻狩 紅葉狩 あるは若菜摘 花摘等のことを載せつれば、いさゝか重複の嫌ひ無きにあらねど、これは、や

○動物まはし

動物まはしも亦、植物まはしの如く、單に動物のみ限りて爲す事もあり。又は、獸、鳥、魚、虫などゝ限りて爲す事もあり。凡て、植物まはしと異なることなし。

其他、英雄まはしなど言ふものも、是等と等しければ、省きて載せず。

○つご字

つご字は、多少文字を知るものならでは、爲し難き遊嬉なり。この遊嬉は、まづ、座中の甲座の人、十字の字を書きて、次に人にはす時は、次の人、更に冠を書きて、其次にまはす。其次の人更に其下に、糸の字を書きて、次にまはす、其次の人更に呂の字を書きて次にまはす、次の人更に土の字を書きて、

其次にまはす、次の人更に、巨の字を書きて其次にまはす。斯くして幾個にても、まはし々々して、最終に、文字の工夫つかずなりたる人は、其場より除かるゝなり。故に、最も多く、文字の數を知りたる人は、最終に残りて、勝者となるなり。是は、高等小學年齢位より以上の小兒は、男女とも、もてあそびて、随分に、智育の助けとなるものなり。文字はいくつにて、豎にも、横にも、亦筋違にもつゞけてよし。

○字直し

字なほしの遊嬉も亦、文字と圖畫とを、習ひ初めたる人の爲には、大いに興味ありて、且つ、繪畫の意匠を養ふには裨益ある遊びなり。其方法は、まづ、白紙の上に、山の字を書きてまはせば、次の人、細く、其文字に筆を加へて、天狗の面の形を

その趣きを異にすれば、一切、植物に關すること就きての遊嬉を此所に集め載せんとすなり。

先づ、春の頃は、さきに掲げたるごとく、櫻狩とて、櫻を見はやし、歌を詠じ、詩を賦じ、又は、其花の枝を折りて家づとにもて歸り、友だちにもおくりたるなどは云ふまでも無く（櫻のみならず、其他の花にても）、これが散るを惜しみて、花びらを拾ひ、箱に入れ、水に浮べなごして遊ぶ、又は、花ずりとて、さまざまの帛、紙などに摺りもし、

押しもせしことあり。又、春の光を愛すとして、此所彼所の野山の氣色をうつし、さまざまの花の木どもをままた、庭園に掘り植ゑさせて、りの盛りを飯び、あるは、遊びの舟の上に、花の枝を折り葺かせて、池の面を漕ぎめぐりなごもしけり。（うの當時、女子が衣装、すなはち、小袢衣、袖、汗衫などより、物かく料の紙、又は扇、其他のものにも、重ねの色目といふことありて、いろくくの植物の花の色、葉の色等に似せてつくらしめたるなども、みなこの

作り、次の人、更に、田の字の形を書きて、次の人にまはせば、次の人又更に是に筆を加へて、衛士の冠を作る。斯くして、文字を種々の繪様に作る。其繪に作る時加ふる筆は、可成筆數を少なくして、最も良き圖柄となりたるを、最上點とす。こは、往昔の、蘆手より、工夫したるものなるべし。今左に二の例を擧げん。

此の遊嬉は、同じ様なる年齢の者の爲すのみに止まらず、極めて、年少なる小兒に、何にても、畫少なき文字を撰び適宜に書かしめて、年長なる人、是を繪にとり直して遣す時は、小兒等は、大に興味を感じて、喜び樂しむものなり。



植物を愛で好めるころより
 や出で来にけん)
 花の散る盛りには、朝掃除を
 さへにぞおめて、散りしく花
 を踏みなぞして遊び興じたる
 も、まことに風流の、心志ら
 ひなりきかし。
 花の枝は、さまざま折りて、
 花瓶にさくせたる趣きなれど
 も、今のごとき、何流なご云
 ひて、枝を撓め、葉をすかし
 なごしたる、生花等のことは
 無かりき。これらは茶事に伴
 ひて、足利時代より、やゝ類似
 のもの出で来たれども、全く
 當今のごときは、徳川氏時代

○ぬき歌

ぬき歌の遊嬉は、もと、各評より出たるものなり。(各評は社
 中の詠歌を、取集人の手に委ねて、無名の歌巻を作り、是を、
 總體の人数に配分ちて、各自、善しと思へる歌に點をつけ、
 秀逸の歌を抜き、是に景物を添へ、開卷の席上にて、詠み
 人の姓名を盛り、其景物を配つことなり)
 抜歌の方法は、まづ、新刊雑誌の中に、掲げたる高點の歌を
 集め(雑誌は、二種以上、四五種までを止りとす)これを、取
 集人の手に寫し、無名の歌巻を作りて、人数の總てに配り、
 さて、其中にて、各自の、善しと思ふ歌を抜き、景物の包紙に
 は、番號と、己が姓名とを記し、巻を開く所の席上に持ち出
 て、其番號の景物を別ちて、一の臺の上に積み置くべし。さ

よりの事をるべしと云ふ。左
 もやあらん。
 花ぶさを摘み、花びらをため
 て、硯の箱の蓋などに入れ、
 歌添へて友のもとへねくりな
 どせし事は往くあり。まこと
 に風流の心ばへと云ふべし。
 文又は歌を、重ね、色目の紙に
 書き、さまざまの花の枝、其
 他、木艸の枝に結びてねくり
 かはしたるは、はやくよりの
 事にて、文を文箱に入れ、歌
 を短冊に書くやうに成りし
 は、新らしき事なり。
 夏の頃は、若竹を愛して、雨
 の後の露帯へるさまなどをや

○四句ぬき

て、別に依頼し置きたる點者は、一番二番の番號を追ひて、
 讀みゆくに、點者の點は、大抵甲乙丙丁位に區別し、秀逸の
 ものは、更に秀逸なる語を附す。斯くて、歌抜きたる人の點
 と、點者の批判と、合ひたるものは、總ての景物を取るを得
 べし。更に、合はざる時は、其次點の、點者のに合ひたる人
 是を取るなり。こは、自ら歌詠まぬ人にも、出来得る故に、雨
 夜の徒然を慰むる料に行ふことなり。但し、此の景品は、極
 めて廉價なる物に限り、小兒にても、なし得らるゝやうにす
 べし。例へば、鉛筆一本とか、紙五枚とか、状袋十枚とかを出
 すものなり。但し點者になる人は、多少詠歌の心得ある人な
 らでは協はじ。

愛ではやしけん。水のほとりに生ふる蘆荻なども、涼しき夏の陰と頼み、撫子、百合などは、花壇にも植ゑ、花瓶にもさし、文歌などを添へて、友のもとへねくりなど、すべて、春の花に云ひつると同じ事なり。

殊にをかしきは、心のまゝに生ひ茂る庭の夏草こゝかしこに刈り残させて、秋待つ蟲の宿りと頼めりしも、いと優しき風流の心なりかし。

菖蒲の事は前段に、殊更に掲げつれば省きつ。

蓮花は、殊にみほとけの料と

四の句抜の遊嬉も、古歌を暗誦するために行ふものにして、即ち、智育の一助たるなり。極めて年少の子女に、玩ばしむるには、百人一首、古今和歌集の中より、撰ぶべく、漸々年齢の長ずるに従ひては、可成、見慣れ聞慣れざる古歌を撰ぶべし。されども、古歌を、多く覺ゆる時は、初めて、聞きたる歌にても、大方類似の句を附け變ふる事を得るものなり。されど、まづ大抵は、ひとわたり見たる古歌の中より、記憶を呼び起して、附るを常とす。例へば、

我身一つの
と四句を出せば、是が前後をつけて、
月見ればちかむに物こそかなしけれ
我身ひとつの秋にはあらぬど

て、愛ではやし、名高き寺院の池などには必ず植ゑたるものごとし。されど佛法隆盛時代より、世の塵に染まぬ極樂浄土のものごとさへに尊びて、愛でもしたりけん。斯道やうく衰へもて来しよりは、却りて、佛じみたるものとして、祝ひの心には、こよ無く忌み嫌ひ、果ては、死者の具にさへ成りぬるこゝろいとをしけれ。

秋は、千種の花のいろくを翫び、つひに 秋の七種などいふものさへ出で来て、これを、京あたりにては、嵯峨、

ど、いひ、又
我身一つは
と、四句を出せば、
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わが身ひとつはもこの身にして
と、前後を、附加ふるなり。又
わが衣手に
と、四句を出せば、其前後をつけて、
君がため春の野に出てわかなつむ
わが衣手に雪は降りつと
ど、いひ、又
我衣手は

大井などの近傍の野に求め、摘みもし、折りもして、持て歸りしは云ふまでも無く、根ながら、掘り植ゑて樂しみしことは、貴族の家のならはしの如きにさへ至れりけん。庭を秋の野につくりて云々、前載の千種の花の盛りを御覽する云々など、物に見えたり。朝顔も野生なるを折りもて來しやうなり。さまざま珍らしきを培ひ、年々種をとりて蒔くやうに成りしは、近き世のことにもやらん。殊にもてはやされしは、かの七種の類にて、萩 薄 藤 袴 女郎花

と、四の句出せば、其前後をつけて

秋の田のかりほのいほのとまをあらみ

わが衣手は露にぬれつと

ど、いふなり。是も、五人なり、十人なり、有る限りの人数、圓く連り座して、順次になすなり。扱、四の句の題を出す人は、別に、古歌の本を携へ居りて、其人数よりは、見せざる別の處に居るべし。斯くて、四の句を、詠上ると同時に順番に是を答ふべし。答能はざる時は、次に次にとまはずなり。而して、其人数の姓名を記したる紙に、出來たる數を記し置き、最も多くなし得たる者に褒美を與ふることなり。

○てんがう俳諧

てんがう俳諧は、俗に天狗俳諧といふ。こは、てんがうを約

朝顔 葛花 撫子(今は、庭に培ひて、専ら夏咲くもの)やうに成りたれど、そのかみは、秋の七種の中にさへ數へられて、却りては、秋の花といはれたる、こは、今世にいふ大和撫子なるものにて、多く、野に生ず。色は一定にて、薄紅梅なり、其れを、秋の七種には數へたるなり。今の撫子(石竹の類)と呼ぶものは、いにしへは、唐撫子と云へりしものなり。この種は、なほ支那 朝鮮などより持て來にけん。よりて、唐撫子 大和撫子など分ちとなへつゝあり。

めて、ぐの如く呼びたるを遂に天狗なる文字に、書きかへたるなるべし。てんがうとは、笑談の意にて、今も、京阪地方にては、笑談を言ふといふことを、てんがう言ふとは言ふなり。即ち是は眞面目ならぬ歌を、狂歌と言ふが如く、眞面目の俳諧にはあらずして、笑談の俳諧と言ふ意味なり。是も、雨夜の徒然などには、善き慰みたるなり。

てんがう俳諧の方法は、發句の如くなす時は、三人づくりに限り、歌の如くなす時は、五人づくりに限る。但し人数多き時は、幾組にても、爲すを得べし。まづ、發句の如く作らんとするには、半紙を、幅五分程に、折手本の如く折り、是を更に、横に三ツに折り、まづ、首座の人、何にても、五文字書きて、其書きたる所は、中に折り込み、見えぬ様にして、次の人に渡

又、桔梗を加へ、撫子を省きても、秋の七種と云ふなり。斯くの如く、當時の人の専ら愛ではやしつるは、最も淡泊なる花の種類なりしがごとし。

紅葉を愛でつるさまは、紅葉狩のところに、菊を愛でつるさまは、菊の遊びのところに云ひ置きつるは省きて、其洩れたるをいさゝか爰に云ふべし。

紅葉は、枝ながら折りて、花瓶にさしつるなどは云ふまでも無く、これを、遊船に書き、秋の色を翫び、宇治川

すべし。次の人、何にても、七文字を書きて、見えぬ様に折りて、また其次の人に渡すべし。其受取りたる人は、更に五文字を書き終り、紙を廣げて讀み擧ぐべし。然るに、三人にて、三句を書き、互に他の書きたる物を見ざる故に、つきほなき様の句出來て、極めて、可笑しきなり。例へば、最初の人

さみだれに

と、書きて、次の人に渡すに、次の人は、

てる日さかりに

など、反對の事を書き、又次の人は

さくらかな

などと、如何にしても、付き難き句を、續くる故に、其讀み上る時、極めてさかしく、座興を添ふものなり。然れども、稀に

は、殆言ひあはせて、作りたる連歌の如く、存外に、名句の、出來る事もあるなり。

又、歌の様に作る時は、是も、發句の時の如く、第一は五文字、第二は七文字、第三は五文字にて、さて、第四は七文字、第五も七文字と續くるなり。例へば、前に示したる如く、五文字迄を書きて、第四の人に渡すに、第四の人、更に

もゆる螢の

など、書きて、次に渡せば、第五の人、

あぢさゝかの花

など、きて、之を開きて讀む時は、

五月雨に、てる日さかりにさくらかな

もゆる螢のあぢさゝかの花

大井川などを漕ぎめぐりて、詩歌管絃の遊樂をもせしなり。又、櫻の花びらを翫びしやうに、散りたる紅葉を硯箱の蓋などに盛り、歌添へて友のもとへおくりなごもし、あるひは、これに、歌をも書きて贈答どもしけり。又、最も色よき葉を選びとりて、双紙の中に入れ置きなごしたるよしも物に見えたるが、こは自づから、今、植物の標本として、殊更につくるなる、れし葉の類にて、存外に、其色ながら、何時迄も存したりしをあらはれがりしなり。又、散り積る紅

葉をうのまゝ敷かせて、其上にて、さまざまの遊びのむしろ開きし事なごもありき。菊も、そのはじめ愛で翫びしは、野生のものなりしがこそし。然るに、これも、支那朝鮮などより、各種のものをねくり来したりけん。宇多延喜の朝の頃よりは、重陽の宴とて、九月九日に行はるる節會は即ち菊の宴なり。故に此頃より、菊花の名も、普く世に匂ひ出でしにあらん。されど、うの培養法等も、今の如く開けたるにあらねば、目下見る所のごとき、立派なる

など詠まれて、殆狂人の戯言の如き句の出来るを、人々うち興するなり。

此の、てんがう俳諧にも、題などを定めてなす事あり。例へば、五月雨 納涼 初秋等の如し。然れども、この遊嬉の目的は、もと、眞面目なる連歌、俳諧を爲すの主意には非ずして、極めて可笑しく興味ある事を爲すの意味なる故に、務めて、其句の、つきよからんやうにするは、却りて面白からず。寧、各自の意の欲するまにくと、雅言にても、俗語にても、勝手に思ひ出るまゝを、記すをよしとす。

○連歌遊び

連歌は遊嬉に屬すべきものにもあらねば、實は、詠歌の所に、其方法を言ふべきなれども、この連歌の方法を以て、てんが

種類の花は無かりしならん、されど、餘りにつくろはぬ難の菊は、中々に雅致ありて、自づからなる秋色は、うの當時に十分占取得たるなるべし。畏き御前あたりに、舞ひかたでつる人々の挿頭に、菊紅葉の枝を折りてかざしつるなども、珍らしからぬ事なりけん。

大方、植物を翫ぶ事は、今昔も變らねども、目に見耳に聞くものゝ種類、近世のごとく多からざりし時代に在りては、最も、天然の物を愛することの深かりけんは、さる

う俳諧の如く、歌よみ習はぬ人も、俗語にて、連ね試むる時は、存外に、興味あるものなれば、因に記して、高尚なる遊嬉の、枝折とせんとなすなり。扱、連歌の式は、正しくすれば、なか／＼面倒なる事なり。されば、こゝには、連歌なる題目を掲ぐれども、こは單に、連歌の遊嬉と心得てよし。詳しく言へば、連歌に類似の遊嬉なるなり。

○推察物

推察物の遊嬉は、先座中十人の人ありとして、其一人を鬼と定め、別室に去らしめ置き、残る九人の人、相談して、題を定め、題は何にても、其一室内にある處の物を用ふべし。而して、其題は、余りに目立たざる物をよしとす。假令へば、棚飾

事とて、木の花の多き春と、艸の花の多き秋とには、是等によりて、人の心を樂ましめしこと少なからざりけんぞ覺ゆる。

冬の雪間に咲く花は、うのかみは、先づ大方梅の類ひにて、山茶花、水仙なども、ふるくは見えず。たゞ雪のあした面白かるべき常盤木どもは、庭園にあまた植ゑて、そこしへに變らぬ緑の色をもてはやしとなりけり。歌文やうのものゝくるには、常盤木の枝をも折り、葉をも摘みて添へたり

りに用ひたる小箱などを題とすれば、用意宜き由を鬼に報ず。鬼は、今回の題の、小箱と定まりたるを知るよしなれば、先第一座の人に之れを問ふなり。然れども、其問ひ方には、一定の規則ありて、其規則に超ゆることを許さず。扱之れを問ふの範圍は、方角、色、質、數、大小、使用方等なり。試みに、其仕方を掲ぐれば、

鬼、お品はどこにありますか。

子、室内にある物です。

鬼、方角は何處です。

子、東南隅です。

鬼は其時次座へ廻るなり。一人に付、一度より問ふ事を得ざればなり。

しは、他の花ものと異なることなし。松がえなどには、獵にて獲たる雉などを添へしが、遂には、禮の一つともなりぬかし。

四十二 動物の遊び

動物の遊びも、前に、豎狩鳥蟲の音の樂み、及び、漁獵等のところ記載せたるものは省きて、うの洩れたるを、ここに集め記すべし。

鳥は、うるはしき聲を愛で聞きつるは、はやくよりの事にて、今の如く、羽色の美しきを悦びて、籠中に飼養せしは、新らしき事なるが如し。

鬼、色は黒いですか、白いですか。

子、黒うございます。

鬼、植物性ですか、動物性ですか。

子、植物性です。

鬼、木ですか、竹ですか。

子、木です。

鬼、單數の物ですか、複數の物ですか。

子、單數のものです。

鬼、大きい物ですか、小さい物ですか。

子、小さいものです。

鬼、食器ですか。

子、いえ。

春の頃は、野山に出で、鶯、鶯、雀、雀の囀る聲を聞き、夏は、時鳥、水雞の聲に明くるも知らず、秋は、鴈、鴈、鴉、鴉の聲を悦ばせらるるものにて、其他も、大方愛ではやされしが多し。雀は、往々、幼き子女が雛よりとらへて、愛育せしこと、しばしば物に見えたり。鶴も、上代には、原野海邊に多く住めりしやうに見えて、其形ちと聲とを愛でたるよしなり。獸は、鹿の音を愛でたるは、前述のごとし。飼ひ馴らして愛でたるものは、犬と猫とを

鬼、文房具ですか。

子、いゝね。

鬼、玩具ですか。
子、先うんな物です。
斯の若く、座中を鬼は順次に廻り問ひて、扱聞きたる言葉を考へ、小箱と答ふ。斯くいひ出づれば、主座の人は、更に鬼に向ひて、

主座の人、あなたは何によりて小箱といふ事を分りましたか。

と問ふとき、鬼は第何席の誰の何と云はれたる事を以て察したる由を言ふ。其言葉によりて察せられたる人、更に代りて、鬼となるなり。この遊嬉は、鬼なるものには、推測力を増

り。
一條の帝の頃、宮中に飼ひ馴らされて、人々に愛せられたる、翁丸といふ犬の、帝の愛猫をねびやかしたる罪にあたりたる程のことは、清少納言が枕双紙にも書きて、其犬の極めて伶俐なるさまより、多くの人に愛養せられたりしことどもをうつつし出でたり。この他、飼犬の物がたりは、さまざま物に見えたる少なからず。猫は、彼の、帝の深く愛せさせ給ひし猫は、命婦の名をさへ賜はりて、其れが爲に、乳母をしも附けられたる、又これ

し、子なるものには、言葉の注意を興へ、智育上、又多少の裨益ある遊嬉なり。而して、何品にせんと、思ひ廻らし、いか様に問ひ、いか様に答へんと考ふるなど、存外に興味ある遊ひなり。

また一法其問ひかた、鬼の方よりのみ、動物ですか

と問ひ、子はたゞ、ハイ、とか、イ、エ、とか答ふるのみなるきめもあり。

○地水空の遊ひ

此遊ひは、先左右の人數だけ、圓く廻り坐し、其中の一人を鬼と定め、鬼は第一座の人より、先、空氣、といひて、直に一、二、三、と早く數ふる間に、其いひかけられたる人、何にて

をおびやかしく犬の勘氣を蒙りたるなど、猫の、其當時、高貴の人に愛せられけんさまをも見るに足るべし。源氏物語の、女三の宮の養はれし猫のことなき、こはもとよりつくり物語にはあれど、なほ、其程のありさまは察するに足るべきなり。斯かる貴人に養はるゝ猫は、錦のまどねの上に起き臥して、よき食に飽き、うれが首の飾り、これにつけたる綱なども、まことに、善をつくし、美をつくしたるものごとし。

此頃、猫を呼ぶに 唐猫の

も、鳥の名を答ふべし。其次は、陸といふ之れに答ふるは獸の名を以てすべし。其次は、水といふ。之れに答ふるには、魚の名を以てすべし。斯して、一、二、三、といふ間に、よく答へ終れば、鬼は幾回にても、廻り問はざるを得ず。然れども、若し一、二、三の間に、其問はれたる中の名を云ふと能はざれば、其人は、負けとなりて、代りて、鬼となるなり。即ち左の如し

鬼、空氣一、二、三、

子、鶴

鬼、陸一、二、三、

子、熊

鬼、水一、二、三、

子、鯉

斯の如く、幾回にても、廻りとふべし。之れも、年少の人々に、各種動物の名を覚えしむる、智育の一端となりて、良き遊びなり。

○言ひ續き

稱を以てせしを見れば、こもまた、支那、朝鮮などよりや、渡り来けにん。されど、わが國には、もとより、猫も産したるなるべけれど、近世、地犬のありつるにも關はず、洋犬の渡来せしより、みな、家毎に飼ふものは、洋犬にして、地犬は、殆ど、影もとめざるに至れる、うのかみ、猫の渡来も、また、これに類似の現象もや呈じたりけん。因みに記す、牛馬を飼養して各種の用に供したるは、はやくよりのことなり。農家にては、牛馬ともに耕耘の用を助

けしめき。士人以上の家にては、馬は、専ら乗馬に、牛は大抵車を引く料に用ひたり。(上古は、女子も、乗馬をならひて、軍陣田獵にさへ従ひたりしなり)されば、牛も馬も、其毛色を艶やかにし、其形ちをととのへしめて、これに乗り、これに車引かじむる時には、さまざまの裝飾をも施したりき。牛は、前述のごとく、専ら車に用ひたれば、恰かも、現今、馬車に用ふる馬は、其毛色も形ちも、注意して、一塵に揃へなごするがごとく、當時の牛は、最も、

して、末席の人まで、言ひ續き終りたる後、更に末席の人は、鳥の名を逆に言ひ續ぐなり。かくして、甲の座まで言ひ續き終りたる時、甲の人は、左右の人より、巳に一ツづつ聞き置きたる、花の名と、鳥の名とを云ひ、又次の人も、かくの如くす。斯様になす時は、或は梅に鶯の如き、似合はしき花鳥の名を結び附くることもあり。又は思ひの外に鶯に菊の若く、可笑しき結び附けをも爲す故に、極めて興あるなり。今其例を左に掲ぐべし。

- 甲、梅
- 乙、櫻
- 丙、菊
- 丁、卯の花

其形状の立派なるを尊びしなり。

現今の取者のこときものを、今ののみは、舍人と云ひき。舍人もまた、今の取者の形ちをうなへしむるがごとく、見かけの立派なる者を選びととのへしめき。馬につきて、多少遊びに屬することば、競馬なり。これは、朝廷又は、神事の時、神社の境内などに行はれたることにて、是時には、馬の裝飾は、もつとも美麗にせしことの外なり。女子の乗馬は、太古より上代

戊、桔梗
巳、藤
庚、萩
申、杜若
壬、蓮
癸、朝顔
かく末席まで、花の名の傳はりたる時、更に癸なる末席の人は、先の如く、極めて小聲にて、逆に壬なる人に、鳥の名を言ふこと左の如し。

- 癸、雀
- 壬、鶴
- 申、子規

に及ぶころまでは、殆ど普通のこのことやふにありけんを、やうく、世の文運の進むに従ひて、これと、正反對に、尙武の氣おとろへもて行きて、中世、則ち藤氏隆盛時代にいたりては、つひに、其跡を立ちぬ。一條の朝に及ぶころ、たゞ、姫まつなるものありて、后宮行啓の正式なる時、騎馬にて供奉したるよし見えたりとも、其外にはあるを見ず。但し、農家には、いにしへより、今に至るまで、大半、女子、馬に乗るの風を、變へずといへども、こは、正確に、

- 庚、孔雀
- 己、鷺
- 戊、鳥
- 丁、山雀
- 丙、眼白
- 乙、鶉
- 甲、雲雀

かくして、癸の甲に傳へたる花の名と、乙の甲に傳へたる鳥の名とを、結び合はすれば、朝顔に鶉となり、甲の乙に傳へたる花の名と、丙の乙に傳へたる鳥の名とを結び合はすれば、梅に眼白となるなり。又山水の景色を結び合はすれば、更科山に須磨の浦、大井川に吉野山の如くなるべし。又和漢の

乗御の術を習ひたるものにはあらず。

曲馬の如きものは、競馬の一部分として、はやくより、少しは行はれたりしやうなれども、此技を演じて、衆人が遊樂の具に供せしことは、徳川氏時代以後のことなるべし。魚類は、漁の外に、多少、慰みの料とせしは、庭園の池に、魚を放たしめて、うが游泳のさまを見たることはあり。されど、最も、眼に見るにうるはしき、金魚やうのものは、近頃のものを見て、はやくは、嘗て其名を見ず。

人物を結び合はすれば、楠公に諸葛亮、菅公に司馬温公などの如く結び合はするもあり。又男女の人物を結び合はすれば、豊太閤に長孫皇后、馬皇后に徳川家康など、結び付けらるゝは可なれども、稀には西行法師に呂后、曹太家に石川五右衛門杯と、結び付けらるゝことありて、極めて興味ある遊ひなり。之れも亦先の地水空の遊嬉の如く、各種の物の名を記憶する爲に、随分裨益あるものなり。

○電信拳

電信拳は多數の人ほど面白し。こゝに廿人ありとすれば、其廿人を十人づつ、二列に分ち、各列の中央に、司令官を置き、司令官は、各自の兵士にうつべき拳の種類を暗號にて知らせるなり。各兵士は前以て、其暗號を記憶し置かざるべから

又、鳥魚を池、あるひは、川に放つことをせしは、放生會とて、生物の命を救ふといふ、即ち、佛道より來たることにて、こは、もとより、遊嬉の種にはあらず。今も、佛法にて、人の死にたる折、又は、りが、追福の爲まごに行ふことなれども、中世の頃、佛法の盛んなるは、やうく、名を尊びて、實を忘るゝの形状となり、佛の供養には、數千金を抛ちて、寺院其他の裝飾に、善美をつくせども、佛の眞意とする所の慈悲善根、衆生濟度の方法手段等に至りては、

茫として、これを爲さんとする者、殆んど少なかりしがごとく、佛に所謂、放生會は、其死になんくとする生物を助けて、其所を得しむるのころなるべけれども、其當時の放生會にわざと、これを爲さんがために、幾多の魚鳥などをとらへ來たらしめて、りが裝飾等も、専ら、人の目を驚かすやうにし、許多の僧侶を集めて、ことごとくしき施餼鬼、供養等を爲さしめ、且つ、これが施主、及び、りれを助くる人の、衣裝行列などは云ふまでも無く、これを見んとして

ず、其暗號を傳ふる法は、各兵士其手を後にまはし置き、司令官の指に傳ふる暗號をまつなり。而して、用意よしとの言葉につれ、一、二、三の號令にて、兩列の兵士は、一勢に拳を打つなり。其拳の打ち方にて、一度の勝負を定め、かくして幾回も打ちたる後、全軍の勝敗を決するなり。

例之は、甲の列は、司令官の命に従ひて、鉄鎧を打出し、乙の列は、同じく司令官の命令により、狐を出すとすれば、甲列は乙列に勝ちたり。この時、甲軍は乙軍の兵士中より、一人好みの兵か、或は乙軍の端より一人とりてもよろしく、捕虜として、甲軍にとらるゝなり。又若し、乙の軍中に、號令を受け誤るものありて、一人或は幾人にて、違ひたる拳を打つ時は、軍令に觸れたるものと

して、之れも同じく甲軍の捕虜とせらるゝなり。かくの如くして、幾回も打ちたる後、其兵士を失ひて、乙軍の司令官一人となりたる時は、司令官は甲軍の前に伏して、降参の意を表し、而して一座手をうちて笑ひ興するなり。この遊嬉は、室内遊嬉中、最運動に可なるものなれば、多數の人ある時は、遊び試むるもよかるべし。

○一種物合せ

この遊びは、嘗て藤氏隆盛の頃、宮中に行はれたるものなり。其仕方は、種々歌の題の心ばへなる食物一種、何にまれ歌添へて持出で、菓物の如きは其儘にて、又調理すべきは、煮もし焼もして食りたるなり。されど、今現に時々行はるゝ處の一種物合せの遊びは、全く直に食し得らるべき様に、調理した

集ふ人さへ、綺羅を飾り、艶妖を懲らして、物見に出で立ちけんこういと笑止なれ。されば、うのかみの放生會は、うの起因こり、善根の一つなりけめ。其行爲は、實は、一種の遊嬉類似のものとなりきといふも不可なかるべし。因に記す。社參、寺詣、即ちかの物まうで云ひて出で立ちけるは、もとより、神に祈り、佛に事ふる心ならめと、其當時は、これまた、一つの遊びと成りて、これが爲に、衣装調度を製作すとして、新意匠をこらしたるなど、實にね

る物を持出ることなり。之れは極めて高尚なる遊嬉にして、猶歌よみ習ふ人などの翫ぶものなり。先其仕方は兼て當日より一週間程前に、社中へ探題を分つ。假令ば春なれば春の期節の物、夏なれば夏の期節の物に、或は多少雜を交ふるも良し。斯くして、一人一題づく得たる物により、其題の心ばへを考へて、一種の食物を調理し、一種の歌添へて出し、之れを其當日に持ち出で、人々其食物を分ち食し、又其歌を批評して、其優劣をも論じ、又其食品の心ばへと味とのよしあしをも評することなり。此食物を入る器も、種々に注意して、其題の意味に適ふ様に爲すなり。之れは、多少意匠の巧拙も比ぶるものなるが故に、種々の工夫を爲すべけれども、多くは餘りに費用と手數とを懸すして、鳥渡思ひ附きあるも

びたがしき事なりしなり。況て、何の神社の祭りなどいふものは、物見車の立て場に争闘を引きおこしたる例しさへある程にて、いとかたはら痛きまでありけん。春の頃、董菜の床にもつれ、櫻が枝にたはると蝶をとりて、現今のごとく、刺製などにして、保存する等のは無けれど、烏蟲のひたひつきうつくしくなど云ひて、蝶を愛したるは、また、みやび少女が春のすさびなりけん。ふるき繪巻物の中には、往々、女の童などの、扇打ち開きて、飛び

のを稱讚することなり。今左に其一、二例證を擧ぐべし。之れは、冬の頃ある處に行はれたる一種物合せなり。

行路時雨

繩手みちめぐりく〜て幾う度同じ時雨の雨にあひけん
出しものは、みのぼしの大根に、三ばい酢をかく。器は粗末なる素焼様の雅致ある平たきどんぶりなり。之れは、行路に時雨にあひたる心ばへにて、みのぼし(簀欲)の義なり。之れらは繕はずして、淡泊なる食物に、面白き意味の添はりたるなり。

海邊時雨

海こしの外山に雲やかゝるらん海士が磯やに時雨ふる也
大きなる蛤貝の中に時雨蛤をもりて出す。之れは、貝

行く蝶を追ひとらへつゝあるさま、又は、長き袂に小蝶をまらせて、嬉しげに、年かさなる人のほそりに持て行きで見せなどしたるさまを、をかしくあがけるものあり。蝶の羽色の麗しきは、はやくより、もてはやされしものなるべし。

笠をもてはやしたる事は、最も多く物に見えたり。(笠狩の條にも云へりしごとく)一の狩りさらへたる笠は、うすものに包みて、御簾、几帳などにもかけ、又は、庭前の泉水、やり水等に放ちて、宵々に其

海と通ず。故に海邊とす。時雨蛤の名によりて、時雨としたりなり。然れども、之れは先には及ばず。

月前時雨

久方の桂の露のこくちして月のかけより降る時雨かな
名月と名づけたる菓子の傍に。時雨羹をもる。これも、
鳥渡き思ひ付きなれども、同じくは、最中に換へたらんには、手輕にて却りてよかるべし。もなかは、誰にても知りたる名なれども、名月と云ふ菓子の名は、知る者少なければ、少しいかにうや覺ゆとの評なりき。げにさもこそ。

竹雪

親竹ををりしものとも見えぬ哉小笹が上にかくる白雪

笹の雪と云ふ豆腐を、薄葛にて出す。器は無地の菓子椀なり。

松雪

白雪のうづむとすれど山松の千代はかくれぬ物に予ありける

之れは、松茸飯なり。飯を雪になすらへ、松茸を松と見たてたるなり。趣向は兎も角も、下戸には極めて嬉しき合せ物なりとの評にて、一座皆さめめき渡れり。

斯の如くして、何人にも、各自に、品物と歌とを用ひて、食する人は、各自好みの物のみを食することなり。

また詠歌のたしなみなき人は、題をとりて、品ものくみを持出し遊ぶこともあるなり。

影をも愛したりけん。時どしでは、室内にさへ放ちて、涼しき光をもてはやしたるもありき。現今のごとく、瓦斯燈、電氣燈に、開夜あることを知らずなりぬる世こりあれ。幽かなる、燈臺、紙燭の影に、文をしも讀みつる當時に在りては、笠の光もまたこよ無きものと、愛でにしもいと理りなりかし。

今の世には、笠の首に細き金鎖を施して、装飾の具に供すと傳ふる風さへありと聞けば、室内に笠を放ちけんは、さして驚くべきにあらず。

又、螢の體中に光りあるが故に、且つ、其光の燐性なるからに、や、青みを帯びたるが、當時、人の魂なりと思へり。流火、即ち、世に人魂なるものと、同じやうの光なるを見て、こも亦、物思ふ人の魂のあくがれ出で、散りほへるものなりなど云ひつゝ、此虫をあはれがり、あるは、身をこがす、思ひにもゆるなど、歌にも詠みつることをかしけれ。蛙の聲は、鶯の音と比べて、いたく愛ではやしつるなるが、かの、古今和歌集の序に、

花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれが歌をよまざりける。

とある、即ち、微妙なる清音に對して、感の禁ずること能はざるどころ、何としてか、萬物の靈たる人の歌詠までやはあるべきの意なり。されば、この鶯の音に對して云へる蛙の聲は、決して、今の蛙にはあらず、即ち、現今も、水清き山川にて聞く、かじかなるものにて、金蛙これなりとある、げにさざあらん。このかじかを捕ら

○福引

福引は、もど種々の品物を選び、長き紐の先に結び付けて、其品だけをかくし置き、其紐の先を坐中の人に適宜に選びひかせたるなり。然るに、夫だけにては興味薄きゆゑに、今は大抵、其品物に各種の名をつけて、其名は更に札紙に書き、之れを探題の如く粘り、又は紙捻にして坐中の人に選みとらするをもて普通の方法とす。先其一、二、例證を擧ぐれば、

紙札に、春風と題をかき、福引の品物には「ハンカチーフ」を用ふ。之れは、はなをふくといふ意なり。

分別といふ題に、羽織の紐、之れは胸にありといふなり。鶯をまつといふ題に、小松菜、之れは小松菜成長すれば、鶯菜となることなり。

許諾といふ題にて、筆の軸二本。之れは蔑にて作りたるものゆゑ、よし／＼、と云ふ意味なり。

右に示したるは、大抵普通に行はるゝ處のものなり。又ある時は、歴史により、歌により、歌題によりて、種々の品物を福引とすることあり。或處にて行はれたる歴史福引の面白きがあれば、一、二の例を左に掲ぐべし。

宇治川の先陣と云ふ題に、墨を一丁、短ざく一枚を出す。短ざくには、池月といふ題にて、

二つなき物と思ひしを大澤の池の底にもすめる月かけどかきたり。

この二品を包みたる紙の上には、何れがさきと書きたるも面白し。こは池月、摺墨なる故なり。

へて、庭の中のやり水などを
も放ちたりけん。されど、中
世の歌に、現に、田中に鳴く
蛙の聲を詠みたるもの多し。
こは必ず今、世に云ふ蛙にし
て、かじかにはあらずるべし。
勿論、田蛙を詠みし歌には、
さして、其聲を愛でたるやう
にもあらず、なつかしきさ
まには詠みたるもあり。然る
に、やうく春深く成りて、
夏にかゝる氣色の青葉をぐら
く成り行く程、田家の住居な
どにては、耳かしましきまで
鳴き立つる蛙の聲こそ疎まし
くもあれ。櫻花や散りゆめ

次に神功皇后といふ題にて、密柑三ツこの包み紙には、
之れを取りたる方は直に食し盡さるべしとあり。
乃ち之れは三韓征伐の意なり。食物を皆食し盡すこと
を俗に征伐といふ語のあればなり。
次に平忠度、之れは「ボール」がみの縦に赤き線あるもの
を長方形にたち、夫れに横に糸製の帯しめをぐるぐ
と間を一寸づく程明けてまき付くること、宛も鎧の織
の如くして、小さき短冊を付けたる花かんざしを扱む。
この短冊には、
行暮れてこの下蔭を宿とせば花や今宵の主なるらん
と歌を認む。
次に清少納言之れは食物にかくる少き簾にこしの雪

て、岸の山吹少しほろろみ初
むる頃、せき入れし苗代水の
りこはかと無く、幽かなる聲
に、ころくと鳴く蛙は、憎
げなるものにはあらず。され
ばず、古人も、田蛙もまた時
としては、捨てがたきものに
云ひ思ひけんかし。
夏の頃、たま〜の閑を得て、
都門の暑を避けんと、山水の
清きかけ求めて、風流の心あ
る友だちの限りして、山がた
つける草の庵などに旅寝する
宵、雨しめやかに降り出でた
るも、また、月の色涼しげに
澄みのぼりたる程も、夕暮、

といふ菓子を含む。之れは簾を開きて雪を見るの意な
り。
次に新田義貞、波形の模様ある幅紗に、翫弄物の太刀を
包み、稻村が崎に太刀を投げたる意なり。
之れらは、皆其選ぶ人も品物を受くる人も、大抵多少の心得
ある座中の催しなれば、其品を得るに従ひて、善悪を論評す
るも殊に興味あるべし。
又物語福引を催したる例あり。其一二を掲ぐれば、乃左の如
し。
此時には、總て源氏物語五十余帖を選ばれたり。乃ち、夕
顔の巻、扇の上に小さき瓢箪一ツを載す。
次に若紫の巻、美しくしき籠の中に雀を入れ、其上に袋を

曉とも云はず、かじかの聲の爽やかに聞けたるは、花に鳴く鶯の聲よりも、げに身にしみて、萬のあはれいと深く覺ゆかし。まことに、古人の、鶯聲と並び稱せられたる理りにこうありけれ。現今も、好事の人の、時々このかじかをとらへ來たりて、籠中に飼養するがあれども、年を越えてなほ死なず。且つ、ありし山川に鳴きつる聲のやうに清き音を聞くこと稀なり。うは何の故ぞと云へば、多少は、氣候又は水の違ひにもよる事あるべけれど、

彼れは、常にさらさらとほとほとばしり流るる清き水の音にきそひて、其聲音の調子を習ふにあらざれば、決して、清音玉を轉ずるがごときこと能はずと、人の云ひたる、左もやと覺て、いとをかしければ、因に爰に記し加へつ。蟲のことは、前條、鳥蟲の音の所にも云ひ置きつるが、鈴虫、松虫などの涼しげなる聲は、いにしへも、今も、雅俗ともに、人々にもてはやさるるものにて、これ、いかばかり、歌のころをも助けにけん。秋の千草のいろく咲き

置きて、とる迄は分らぬ様になしおき、之れを取りたる人、其上を持ちあぐれば籠の底は下に残り籠の上の取放さるるゆゑに、雀は其内よりバツト立出で、室内を舞ひ歩行く。極めて興あり。次に末摘花の巻、深紅の作り花一種、之れは鼻の赤き心なり。斯の如く、總て巻の内の意味を取りて、趣向をたつるなり。又今春わが帝國婦人協會發會の日に、二月廿七日、歌題に因みたる各種の菓子を福引にしたることあり。其例を一、二左に掲ぐべし。兼題は、雪中梅と、水上花とにて、一般の人に出したる物、乃ち雪中の梅は、梅か香を中に入れたるまきずし、水上、

の花は櫻湯なり。

探題の數種を例すれば、左の如し。

春	夏	秋
籠中鶯	垣橋	月下擣衣
歸雁	梅雨	名所鹿
風前落花	葉間蟲	行路時雨
扇の地紙の菓子に瓢のくわし	蒸羊羹	
落花生を手巾に包みて	梅干の菓子に飴菓子	
越の雪に落雁	干柿に蜜柑	
手附籠の中に鶯餅	もなかの下に砧巻をりて	
	小倉野と別名ある鹿の子餅	
	辻占に時雨羹	

句へる野邊に、ふり出でたる音、いかゞはあはれならざらん。是等の蟲は、うすものして張りたる籠の中にこめて、あしたの露かはせ、軒にかけ、端居にも打ち置きて愛でつるなり。その蟲をさらへ、又、うが聲のよしあしを比べなごするに、蟲選みなご云ふことさへ出で来て、貴人の、下部などに命じて、原野にいで、鈴蟲、松蟲、其他の蟲をさらするに當り、最もよき聲に鳴くものをさらへたる時は、かづけ物多くして、これを賞しなごせしからに、いづれも劣

らじ負けじと、蟲の音を聞き分きて、選びとり持て歸りしことなごもありけり。是等の蟲は、籠にも入れ、または、庭の草村にも放ち飼ひたりき。されど、はやくは、近き頃のごとく、蟲賣なご云ひて、いろいろの小さき籠を製し、うれた、さま／＼の蟲を入れて、市中を賣り歩りく等のことはなかりけん。こは、徳川氏時代中頃よりの事なるがごとし。蟲賣の業盛りになりては、野邊に行きて、鳴きたつ蟲を捕ふるのみならず、兼ねて、蟲を飼養し置きて、

冬 橋上雪

八ッ橋に初雪といふ菓子

雨中神樂

おかめの面の裏に飴菓子もりて

○談話會

これをとりたる人はかおりにて禮をいふ。

はなしの會は、談話會又は脩辭會杯の名によりて、各種女學校の同窓會又は親睦會等に、言語の練習を爲す爲に行はるゝものなり。又夫迄ならずとも、年長の婦人より集りて、爲すことあれ共、茲には先規則だちたる談話會の遊びを掲ぐべし。談話會には、大抵あらかじめ、先幹事數名を選びて、之れに當日爲すべき談話の種類、及其組合せ等を選び定めしめ、且其會場の席次等の整理をも、任するなり。而して各々其爲さんと欲する談話を代るゝ爲すこともあり、又は數名組合せて、たとへば、一名は教師となり、他は生徒となりて、問

答の状を爲すこともあり。或は、朋友同志旅行をなしたる様をもはなし、又は母と娘と兄弟姉妹團樂の話の模様を寫す等も面白かるべし。或は又、有名なる和漢文章の一節を朗讀し、又は英語佛語の對話、名詩の朗讀等も宜しかるべし。稀には、箏琵琶、バイオリン等の音楽を適宜に挿入することもあるべし。今左に掲げたるものは、某女學校生徒の行ひたる談話の會の折、數名の生徒協議して新作したるものなるが、少女の作としては随分に面白しと感ずれば、其一を左に掲げつ。

七福神の日本家庭改造談

夷三郎

布袋和尚

辨財天

大黒天

福祿壽

先づ出でく適宜の場所に在り、

これが供給にあつるまで成りにたりける。

蜘蛛のしわざは、まことに憎きものにて、羽色うるはしく、形も愛らしき蝶、蟬などの、飛び歩くと、蜘蛛は、待ちまうけて、巧みに糸を引き、これらの蟲を捕らへて、己が腹をこやすなり。ことに、蜘蛛の巣は、荒れたる屋の標とればえて、疎まじきものなれば、誰れもく、見れば、速やかに取り拂はんことを要すべきに、うのかみ、一種の迷信より、蜘蛛のすがきする宵には、待つ人必ず來たるべし、といふ諺

の世に流布して、かの、衣通うすとお媛むすめも、

わがせこが、來べき宵なりさうがにの、蜘蛛のふるまひこよひしるしも、

など詠まれたるより、宵に集あはがく蜘蛛は捕らふべからずとて、こよ無く、みやび少女たちにあせられたるをかしき。こは、うの始め、支那の、ある所の風俗のうつり來たるなりと云ふ。詩などにも、左様の事見れば、彼の國の俗言の、われに傳はれるにもありけん。

此他、遊嬉に屬するものは、

毘沙門天は後より出づ、

私等七人は、昔から日本の福の神といはれてをりまする事は滅多にありませんでしたが、此度畏こき邊りの御慶事があつたので、珍らしく會合しましたを幸ひ、何とお互の素性役目を話し合ひ、益々日本國の爲に盡くさうではありませんか。先づ大黒天貴君からお話しを願ひます、

大黒、

うんなら、皆さんに御免を蒙つて、私から申上りますが、私と夷君とは、元から日本の神なので、大巳貴命といふのは私の事ですが、大巳貴を音で讀むと、ダイコキとなり

ますが、キはグイのつぎまつたので、つまりダイコクとなります處から、天竺の大黒天といふ佛と混同せられたのですが、私の役目は、日本紀神代卷に百八十一の神と力を戮せ、人民畜類の爲に病を直すとある通、醫藥專門で、昔から袋は持つてをりましたが、今では俵の上に乗せられ、槌を持つ様になりました。

布袋、

成程貴君は見た處、御色が白いのに世間にある貴君の像は眞黒にかいてあり。又大黒天など、天の字の付け、佛臭い名なのは、全くいくらも例がある神佛混同から來たのでせう。私などは、唐土の明州奉化縣の和尚に過さないで、唯一ツ大きな袋を持つて居りまして、何でも

なほ許多あるべけれど、左迄はとて爰にとぎめつ。

前に載する所のものは、往昔に行はれたるも、今は全く其跡を断ちたるものあり。又は、今猶、其名も、しかたも、ありしをがらに存して、ある部分に行はるゝものあり。名は變りて、其しかたの残り、其しかたは變じて其名は、ありしをがらに存せらるゝものあり。是等は、大方、この菴頭に掲げしるしつ。今新らしく、出で來たる遊嬉と、昔より傳はりて、現今も、多くの人のもてあそびつゝあるものとは、

大抵載せて、本文に出だしつれば、彼是を見合はせて、古きも、新らしきも、よりくは、さるべからんと思ふものは、取り用ひたらんには、興あることもぞとて、掻き集め記しつるなりけり。

童 話

童話は、一種、りの行はるゝ部分の人情風俗をも徴するに足るべきものにしあれば、こも亦、古代よりのを子細に調べ、時代を逐ひて、掲げたらんにはと思ひしかど、ふるき書によりて、尋ね見るに、童話と、普通の

入れてをりますが、唯便々たる腹を抱へて、どんな事があつても、怒らないで、にこ〜として居るといふ徳があるのみです。時に福祿壽さん、貴君はたしか南極のお星さまですな。

福祿壽

左様、私は南極星で、福祿壽といふ人間の大好きなもの三ツを司つてをりますが、家來は三人で、鹿は音がロクですから福祿のロクに通し、鶴と龜とは長壽な處から昔から私について居りますが、私などは、只髯が立派な位な取り得なのですが、うこに入らつしやる辨財天は、御容色がいく處から考へれば、お生れは京都邊ですか。辨財天、

イエ、私は天竺の生れですが、日本へ來てから、最早大分長くなりましてから、色も白くなりましてが、私が或時は、蛇の姿となつて、人の眼に觸れる様にしますのは、つまり表面ばかり奇麗でも、心が邪な女の多いのを戒める爲です。時に夷さん、貴君のお話しを伺ふのを忘れておりました。

夷

はい、私は大黒天と同じく日本の神なので、日本紀神代巻に、伊弉諾伊弉册の二神が、先づ日の神を生み、次に月の神を生み、次に蛭子を生むとある、此三番目の蛭子と云ふのは私の事ですが、三才になつても、足が立たなかつた爲、天盤樟船に乗せられて、風のまに〜放ち棄ら

俚歌を區別するさへ、極めて至難なるに、其數、將た餘りに少なければ、これ、強ひて今爰に、あなぐり求めて記したりとも、此書の趣旨とする所に、格別の裨益を與ふること無かるべしとて、今爰に掲ぐるものは、大抵、徳川氏時代より行はれそめて、今も存するものに限り。されど、うが中に、いさゝかにても、風俗を善すべしと覺ゆるものは省きて載せず。
然るに、明治聖代の恩澤は、各種のものにまで及ぼし

れました處が、其船が攝州武庫の浦についたので、土地の者は、後に私を神として祀りましたのが、所謂西の宮の夷です。

布袋、

時に毘沙門天は武道の神として、トランスヴァールへ戦況視察の爲趣かれて、未だお歸りがありませんが、福祿壽貴君の鶴をお迎にやつて下さいませんか。

福祿

イヤ私の家來の鶴だの龜だのは、此度の御慶事奉祝の爲め、種々の事に使はれて最う疲れ切つてをりますから、一層布袋和尚貴君の袋で風船を造つて、お出向きを願ひたい。

大黒

夫れが宜しうございませう。私は、持合せの袋で同じく風船を造り、皆さんの代理として、巴里の大博覽會視察に参りませう。

布袋、大黒天、

退場續いて

毘沙門天、

登場

毘沙門天

ヤア、これは皆さんお迎ひで恐れ入りました。私は、元天竺の佛でしたが、今では日本の福の神の一人で、主として、武道守護の任に當ると思はれて居るのも、全く手に矛を持って居るからです。此度南阿戰爭視察に赴きました。が、イヤ英軍は連戦連勝で、トランスヴァールの同盟

て、民間に多く行はれし重謠は、殆ど存するもの稀なるにいたり、大抵は、學校にて教へらるる唱歌及び、兵士、又は、男兒の間に行はるる軍歌のみ、年少子女が口にせらるることとなりしは、まことに悦ぶべき事なりかし。但し、今猶唱歌と軍歌との二種の外に、幼少なる女兒の間に許多行はるるは、鞠歌の一種なり。余は、嚴肅なる家庭の裡にひととなりて、幼少の比より、父母、及び、祖父母は、今の當時、普通に行はれし、

鞠歌の多くは、禁じて誦はしめられず。ある少数の種のみをゆるされたりきかし。今、匣底を探りて、今の當時より保存し置きたるもの、又は、爾後よりく集め置きたるをも掲げて、鞠もてありふ少女が爲にせんぞす。

○鞠歌

- 一 近江八景
- 一つとや、比良野の暮雪の遠げしき、見るより人々、指をさし、教ようかいなるの雨、ひきもどながら

- に松陰に、宿らうかいな
- 三つとや、みるにすげ無きむかひ山、秀郷頼んで弓と矢で射させうかいな
- 四つとや、よはひを延べんと旅人が、しばらく粟津の晴嵐に、吹かれうかいな
- 五つとや、いつもの事は思へども、堅田をめざして落つる雁、淋しいはいな
- 六つとや、むかしにかはらぬ石山の、うへ無き姿の秋の月、ながめうかいな
- 七つとや、なになつ下りの

國、オレンジ自由國は、先月末に合併せられ、新にオレンジ殖民地と云ふ名稱の下に、全く英國の屬地となりましたから、今はトランスヴァールは、全く援助を失ひましたから、何れ戦争のすむのも近い中でせうが、是れまで防戦したボーア人の勇氣忍耐は、感ずべき價があり、殊にポーアの婦女が、夫を助けて、家事一切は勿論、負傷兵の手當から糧食の供給まで、残る方なく盡力した其勇氣膽畧は、うごろにスバルタの昔を思はしむるものがあります。日本の婦女も、男子をして、内の事を心配させないで、十分の働きをさせる様にしなければなりません。之れには、平常から勇氣耐忍を養ひ、萬一の時の用意が肝腎です。時に夷君に伺ひますが、貴君は何時から商

賣保護の神となられましたか。

夷、

私は推古天皇の九年三月に、聖德太子が始めて市を設けて、商賣を教へなすつた時、姪子の神、即ち私に誓ひて、商賣鎮守の神となすつたに基くのですが、昔江戸の商家では、十月廿日に夷講といつて、親類や知人を招いて酒宴を開き、商賣の繁昌を祈りましたが、大黒天も古くから福の神と云はれ、能狂言の福の神も、矢張り大黒天ですが、昔は正月大黒舞と云つて、大黒天の面を被つた者が、家々の門を見舞ひ、一に俵をふまへ、二ににつくと笑ひなど歌うて、商賣の繁昌を祝ひました。

辨財

やばせより、向ふはるか
に歸る帆を、招かうかい
な

八つとや やまノはるか
に暮れりめて、入日まば
ゆき瀬田の橋、渡らうか
いな

九つとや ころろをこめん
と京上藤が、誓ひかけた
る三井の鐘、つかせうか
いな

十とや ところの名物源五
郎が、あぶり立てたる鯉
餅を、あがらんかいな
これは、文化年中より、
京都、及び江戸等に、

専ら流行したる、鞠歌
のよしにて、わが祖母
より傳へられたるもの
なり。

總じて、今の當時の作
にかゝる歌謡は、たゞ、
其語呂と調子との滑ら
かなならんことをのみ
つとめて、やゝもすれ
ば、意味不明瞭なるも
の、極めて多きがごと
くなるに、この歌は、
大方、よく歌意も通じ
て、詞も卑しからず、先
づよき出来なりと云ひ
て可ならん。但し、石

成程さうしますと、先づ大黒天は農業醫藥の神で、夷君
は水産海業海軍及商賣の神で、毘沙門天は陸軍の御掛
り、布袋和尚と福祿壽は健康と度量など云ふ人間の身
體精神を司られ、私は美術、文學、音楽等守護の役目で
すが、世に七福神と云ふに、一人數が足りないやうなの
は如何云ふ譯でせう。

福祿

一體福の神を七ツとしたのは、仁王經といふお經に「七
難即滅七福即生」とあるから起たのですが、世間で我々
の畫を書く時には、壽老人と云ふものを加へますが、之
れは矢張り私同様南極星で、役目も私と同様ですから、
今は天上へ歸りて仕舞ひ、私一人で二人前の職務を行

ふ事となりました。

毘沙

はとあ、うれで御互に役目も分りましたが、私が亞弗利
加から歸途、世界各國を見渡しました處、何れも中々勉
強して、私共の兄弟分を呼び集めやうとして居ります
が、自ら國によつて長所即ち盡力する福神の技量に相
異があります。例令ば、金力と海軍及商業に秀でたる英
國は、主として夷大黒二君の兄弟分の力が多く、醫學陸
軍で有名なる獨逸は、大黒毘沙門二天の親類の御盡力多
く其他農業と陸軍では、露國、文學、美術二藝では佛蘭士
等、うれく其國の福神が盡力されておりますが、日本
では、まあ誰の力が一番よく顯れたでせう。

遊嬉之栞

山秋月の所うへ無

き姿と云ふことを解しが

たし。傳へのまゝを記

し置きつれど、あるひ

は、誤謬にもや、

近江八景は、勿論八つ

なる故に、三上山と、

源五郎餅との二つを、

取り加へたるなり。

二 正月の歌

一つとや ひいと夜明け

ば賑やかでく、かゝさ

り立てたる松かざりイ

、松かざり

二つとや ふつかは初夢初

荷ずめく、引き出す初

夷

其れは古い丈、大黒天でせう。日本で一番進歩して居る

學問は醫學と云ふではありませんか。其他、毘沙門天の

陸軍は十三師團の常備軍を有する様になり、私の掛り

の海軍も近い中に廿六萬噸の大艦隊を有するやうにな

りますから、少しは鼻が高うございますが、辨財天の御

掛りの文學、美術、音楽などは、甚だ進歩が遅いやうで

ございます。如何なもので、

辨財、

これは恐れ入りました。私とて、中々苦心してをります

けれど、文學とか美術とか云ふものは、いくら力を費し

ても、中々一朝一夕に發達するものでなく、全く其機運

荷の勇ましきア、いさ

まじさ

三つとや みなさん小供達

樂遊びく、はーねや手

鞠で面白やア、面白や

四つとや よーもの松竹し

めかざりく、ちーよの

ことぶきおめでたヤーア

、ねめでたや

五つとや いつでも正月

元日のく、こころで一

生暮らしたやア、くら

したや

六つとや むつましつーき

のこの月の、今日ほめで

たき月日なりイ、月日

室内遊嬉

が來なければ、大文學、大美術は出來ません。維新の改革

以來、未だ三十年今日の様に、社會の基礎が定まらない

時には、中々私の手の附様もありません。おや布袋和尚、

大黒天、大層御早い御歸り。

大黒天布袋和尚 登場

大黒、

イヤ御承知の通り、大阪濱松などに「ベスト」が再發した

處から、私の家來の鼠が驅り出されるといふ報知で、急

いで歸つて來ましたが、どうも人間と云ふものは勝手

なもので、昔は鼠の居ない内は、火事があるとか、不幸

があるとか、いうて鼠の騒ぐのを喜んで居つたのに、今

は天上に硝子をはめて、鼠退治をする様になりました。

なり

七つとや 何事あつても元
日はく、腹立ち泣く
な小供らよヲ、小供ら
よ

八つとや 屋のうち残らず
あつまりてく、いーは
ふさふにやとりの酒エ、
とりの酒

九つとや こころも延び
く、氣も晴れてく、
もーかふ若水はつ日の出
エ、はつ日の出
十とや とほからまーちし
正月のく、あーさは
おくれず起き出でよヲ、

然し、いくら鼠ばかり退治しても、人間自分が病氣を隠蔽したり、豫防消毒を怠つたりしては、何の役にも立ちません。イヤとんだ愚痴をこぼしました、博覽會の御話は、布袋和尚から御聞き下さい。

布袋、
此度の博覽會で、日本の出品も中々評判がいくやうですが、美術は勿論、機械工藝の點に於て、まだく歐米諸國に及ばない處が、澤山あるやうですから、御互に一層盡力して、次回の博覽會までに、是非共、日本を立派な工業國としたいものです。うれはさうと、私等が歸りがけに、英國を見渡しました處、佛蘭士と違つて、其家庭の嚴格の中に楽しい幸福な處あつて、これでこそ立派

起き出でよ

右も、また、わが祖母より傳へられたるにて、何人の作なるかを、知るよしも無けれど、今より、八九十年若しくは、百年ほど前より、行はれたるものゝことし。前の 近江八景の作に比しては、ころもことばも劣れりとも、覺ゆれども、風教に害あるものならねば、爰に掲げつ。

三 一月の歌

鏡光尼

室内遊嬉

な英國紳士の出るのも無理はないと思ひました。

大黒

左様く英國は、流石舊國だけあつて、且つ佛蘭西の様に社會が動搖しませんから、善良な習慣が、法律と同じ程の力で行はれておりまして、社會の制裁力の強いといふたら、彼のパー子ルとか、シルクとかいふ、立派な政治家でも、一度不道徳な評判が立つと、昨日まで神様のやうに尊んで居つた味方から、悪魔の様に賤められるやうになります。此社會の制裁力こそ、英國紳士の品位を保ち、世界より尊敬される原神力です。

布袋

さうです。開國の紀元からいへば、日本は、英國よりも舊

一つとエ 一夜ばかりにあらたまるく、松と竹との千代の色く
 二つとエ 二日は書きずめ筆はじめく、結ぶ初夢たから船く
 三つとエ 三日の御祝儀ねころかにく、君につかふる臣のともく
 四つとエ 四つの海さへしづかにてく、のどかに迎ふる御代の春く
 五つとエ いつに變らぬ御佳例をく、いはふかち栗のしこんぶく
 六つとエ むかしながらに

國ですけれども、近來英國の基礎は、十七世紀の革命に形づくられたのでず。今からざつと二百五十年たちます。日本は維新の改革で、萬事破壊されて仕舞つてから、まだ漸々三十年ですから、此れから秩序もたち、善良の習慣も出來て、初めて、社會制裁力も強くなりませうが、然し唯時を待つ計でなく、御互の盡力で、一層其時機を早める事も出來ませう。

福祿

何しろ、新しい社會では、人物の需要が急で、藝さへあれば、どんな卑しい人物のものでも、社會の樞要の地位に立てますが、今から、追々、才學品格共に秀でた者でなければ、社會の上になてなくなりましやうが、さういふ立

初春をく、鄙も都もむかへつとく

七つとエ 七種つまんと少

女子がく、わくるみゆきも父の爲母の爲

八つとエ やかで人を打ちつとひく、鏡開きのい

さまじさく

九つとエ これも御國の光

りどく、あぐるさざちやう松と竹く

十とエ ところく、のちらはしもく、かはらぬ千

歳の春の色く
 右は、大野鏡光尼の作なり。こは、もと行は

派な人は、必ず清い楽しい家庭から出るものです。

夷、何よりも、家庭の改造が、今日の急務です。これも、急激な改良は、殆んど破壊と同じですから、我が美しい國風をあくまで保存すると共に、西洋文明のいく處を、十分採用して、天晴れ、廿世紀の新家庭を造なければなりません。が、それには、女子が男子と同等に立てる教育識見を持ち、又男子をして、家庭の楽しさをまらしめなければなりません。

辨財

家庭を楽しくするのが、第一肝要です。嚴格な處は、毘沙門天のやうに、經濟に抜目がない點は、夷、大黒天のやう

れつゝありし、正月の歌にならひて物たるなれども、今の當時は、恰かも、維新前の頃にて、やうやく文明の光、まさにほのめきうめんとする時なりければ、多少、新色のくはりたるを覺て、前段のものよりもめでたしと云はまじし。
なほ、此他にも尼が作の鞠歌ありしかど、散見して見わすなりぬるいと惜し。

四 十二ヶ月の歌

- 正月とせ 正月はよい月む つみ月く、門には松竹 しめ飾りく
- 二月とせ 二月は初午稻荷 さまぐ、稻荷まうでの はで衣装く
- 三月とせ 三月やよひは花ざかりく、桃の節句や 雛まつりく
- 四月とせ 四月は卯花ほととぎすく、お釋迦の御誕生寺まわりく
- 五月とせ 五月五日は初のぼりく、かぶと人形や 菖蒲太刀く
- 六月とせ 六月はみなづき

に、又、福祿壽の若く衛生に注意し、布袋和尚の様に、莞爾として交際に巧みなると共に、又私の役目の、文學美術を應用して、家庭の趣味快樂を高尙にまなければなりません。

毘沙

左様、見た處は氣樂さうでも、卑い亂れた家庭がありまじ、嚴重すぎて、温い樂しい風の吹かない家庭もあります。此極端を離れて、丁度程よい家庭を作るには、つまり主人から小兒まで、職業を十分勉強すると共に、遊ぶ時には、成べく共に樂むやうにし、旅行をするにも、一家すべてゆき、宴會にも、主人主婦共に行くやうにして、只今の宴會の狀況等から、改良しなければなりません。

大黒

一家内共に心を合せ、主人が高尙な文章を讀んできかせる時、妻は樂しい音楽を奏し、一同暇あれば、温泉海水浴へ行き、家にある時は、四季の花物を培養し、小兒をして、樂しい中に、植物學の智識を養はしむる等、斯ういふ家庭が澤山あつたら、我々は忙しくて、兄弟分でも呼んで來なければ、とても、廻りきれないだらうと思ひます。

福祿、
イヤ、今年、日本で一二といはれる華族女學校から、幾人かの卒業生がありますから、其等の人々の責任として、是非共模範となる家庭を作らなければなりません。

土用入りく、わいく
 天王きやりぶしく
 七月とせ 七月はふみつき
 天の河く、たなばたま
 つりや、船ありびく
 八月とせ 八月朔日白がさ
 ねく、はつさく祝うて
 おさかづきく
 九月とせ 九月は菊づき菊
 の宴く、後の月見もあ
 もしろやく
 十月とせ 十月はごこでも
 神無月く、玄猪の祝ひ
 やあかの餅く
 十一月とせ 十一月はごわーつ
 は祝ひ月く、髪置き袴

イヤ、私等が作らせまじやう。それはさうと、これで御別
 れ致すも、物足らぬやうに考へますから、此處は、辨財天
 のお好きな音楽を以て、日本將來の家庭を歌うて、きかし
 て頂きませう。皆さん。
 四人、これはけつかう、どうか願ひます。
 辨財、
 皆様がさうおつしやつては恐れ入ります。私は元は琵琶
 琴を抱へてをりました。日本で琴を習ひましたから、
 うれでは御聞き苦しい處は、御免を蒙つて、一曲奏しま
 せう。

夷、
 皆さん、何れこの十月には、出雲の大社で、御目にかくり

着宮まわりく
 十二月とせ 十二月は極月
 暮の市く、煤どり餅つ
 きいうがしやく

この十二月の歌も、ま
 た、何人の作なるかを
 知らず。今より、五六
 十年前の頃、流行せし
 ものゝこととし。勿論、
 別に面白きものにもあ
 らねど、その當時十二
 ケ月の年中行事をあら
 く云ひ並べたるもの
 にて、今より見れば、
 りの頃の風俗も見らる
 ることちして、な

ませうが、先づうれまではお別れといたしませう。

(終り)

○讀本の會

此遊嬉は、前段談話の會と等しく、大に智育上に裨益ある遊
 びなり。昔輪講輪讀などといふものありて、専ら儒家の私塾
 に行はれしものなるが、之れは單に學力を増し加ふる勉強
 の一手段なりしなり。讀本の會、また之れに似たれども、多少
 の趣味を加へて、且余りに多く腦力を費すことなきなり。往
 時の輪講は、先經書なり、史傳なり、一ツの本を定めて、之れ
 を講演討論し、學友同志其當否を試みたる事もあり。または、
 師に出席を乞ひて、其巧拙の批判を請ひしこともあり。輪讀
 は、單に一ツの書物を順次素讀して、其音訓の誤れるを正し

くにかをかしくも覺ゆ
かし。

五十二ヶ月の歌(新作)
一月とエ 一月一日四方拜
く、参賀のひとく
馬車く
二月とエ 二月十一日は
紀元節く、國旗にか
やく朝日影く
三月とエ 三月盛りの梅の
はなく、散りて櫻を
まつの門く
四月とエ 春季休業いさま
得てく、吉野嵐の花
を見んく
五月とエ 五月下旬は地久

たるものなり。然るに、其讀本の會は、先談話の會の如く、數名の幹事を定めて、其會に關係する一切の事を整理せしめ、當日には、各好みの書物中より、事柄の面白きもの、文章の絶美なるもの等を一節づつ選り出して、之れを朗讀するなり。かくして、其約束によりて、一人の判者を定め置き、某氏の選まれたるもの最面白しとか、有益なりとか、或はまた、其讀み聲等につきての巧拙も判し定むることあり。是れは、廿人以上の人集ひて行ふときは、各種の書物中の名文名句をきくことを得て、博識にもなり、存外に興味を感ずることあるなり。又今少し進みては、往時の輪講の如く、其文章に付きての解説評論をも試みて、互に討議する等は、尤有益にして、趣味も深かるべけれども、こは、多少書物の上に付き、評論を爲す

節く、國母の御壽命
萬々歳く
六月とエ 六月梅雨のたご
中にく、早苗どり
く、田子の歌く
七月とエ 七月暑中の潮湯
治く、海邊づたひの
賑はしさく
八月とエ 八月一杯旅にし
てく、暑さわするく
山のかげく
九月とエ 九月なまばの空
の色く、秋風すまし
き朝ぼらけく
十月とエ 十月末より時雨
してく、物の淋しき

程の學術あるものに非ざれば能はず。況や、女子は男子と異なりて、遠慮深きものなれば、同窓の人杯の外は、十分に討論をなす等のことは難かるべけれど、前者の如く、只名文を抜誦するは、甚容易きことにして、自ら其名文を誦んじ、又其眞味を味ふ等に付きても、極めて裨益ある遊ひにして、年長者、年少者共に稍文字あるものは、よく之れを行ふべければ、時々、之れをなし試みしめたきものなり。

○音楽の遊ひ

この遊ひは、音楽の音につれて、探し物をする遊ひなり。こゝに、十人の人ありとすれば、其人の中より一人を鬼とし、外に出しおき、内なる九人は、何にても室内なる一ツの品物を極め置き、而して、一人の人は、琴にても、「ピアノ」にても「オル

秋氣色

十一月とエ 天長節の御佳

例をく、祝はぬ民な

き秋つ國

十二月とエ 歳のをはりに

一年のく、罪もむく

いも消ゆる雪

この十二月の歌はふる

き十二月の歌はちなみ

て、わが友某女史の作

られたるを、ある日自

ら持て来て、「斯かるも

のは、作り試みたるを

も無きに、いかでと人

の強ひてうまのかすま

くに、いでやと、筆と

ガン」にても、(亦室内に樂器なき時は唱歌にてもよろし)彈
き初む。音樂のねの聞こゆる時を合圖に、鬼は入り來りて、内
なる人の定めおきたる物を探すなり。この探し方は、音樂の
音の強弱によりて探すなり。鬼もし極めたる品物に近づき
たる時は、奏樂者は音樂の音を強めて、品物に近きを示す。
し遠ざかる時は、其音を弱めて、知らするなり。斯くの如くし
て、最品物に近くなりたる時は、最強き音を出す。故に、鬼は、
この時最注意して、品物を見付け出すの便を得るなり。しか
して、品物見付かりたる時は、其品物を定めたる人代りて鬼
となるなり。此遊嬉は、極めて優美に、且年長者も、子供も、ま
たいかなる人にも出來うべし。甚簡單にして、面白き遊ひ
なり。

○聞香

雪の朝、月の夕は云ふもさらなり。月花につけてこよなく慰
むものは、香道のあるそびに予あるべき。動作優美にして興
趣淡雅なる、誠に遊技界の上乗にして、到底點茶、骨牌、挿花
等の及ぶべき所にあらざるなり。

若し夫れ、綠樹陰深き邊、會心の友と薰香一炷の慰樂を共に
するが如き、うの趣致の高崇純潔なる、そごろ塵外の樂地に
逍遙するの淨念胸臆に浮動するが如きを覺ゆ。

薰香を賞するは、既に古く足利氏の中世に始まる。佐々木佐
渡判官道譽等誠に之れを好みきと云ふ。然れども、これ單へ
に薰香を賞するまでに止り、今日の如く作行禮式の定れる
ものはあらざりき。將軍慈照院深く之れを愛し、志野入道宗

りつれど、三十一文字
の歌と異なりて、中々
に難きものにもあるか
な。取り直してたびて
んやなど、ありしを、こ
れにてけしうはあらじ
なご云ひて、其儘にさ
し置きつるが、其人は
程も無く失せて、つひ
の形見と成りにたるな
れば、後の思ひ出艸に
もと、爰に書き加へつ。
されど、作者もいと飽
かず覺ゆるよし、かへ
すく云ひ置かれつる
を、亡からん後とて、